



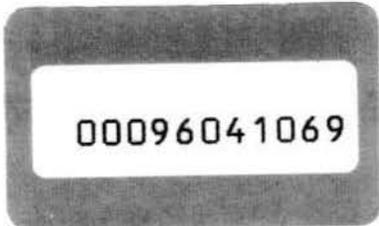
震災文庫 8 - 120

目次

巻頭言	校長 藤原 周三	1
芦屋南高2年の歩み		2
学校日誌から	総務部	6
阪神大震災ドキュメント1ヶ月		8
混乱・悲しみ・秩序回復 阪神大震災と学校	校長 藤原 周三	9
学校再開への経緯	教頭 田原 美生	11
「心に刻まれた言葉」	庄 義 広	15
地震のあとの図書館	山本 宏美	17
修学旅行の中止	木村 信吾	18
「1.17」生徒文集作り	幸森 孝子	19
「お別れの会」	木佐貫 正博	21
松村吉成先生を悼む	倉 芳博	22
弁当の支給	小林 正文	23
事務室の震災記録	事務長 田平 純吉	24
本校の施設・設備の被害状況	主査 安田 幸生	25
「防災計画」に関する一考察	主査 安田 幸生	27
生徒作文『震災なんかに負けない』より		30
私たちの非常時生活アイデア集	所崎 明雄	38
The Hanshin-Awaji Earthquake	Chikage Nakabayasi	40
阪神・淡路大震災（日本語原稿）	中林 千景	45
私の体験		48

深田 崇子	水上 勉	篠田 通子	奥村 政則
小林 正文	宮本 拓行	西川 公規	梶山 祥木
宮定かをり	西田智代美	池田 敏弥	

生徒作文「地震による再認識」		56
生徒作文「フランス旅行記」		57
資料編		59
教育相談研究委員会より（被災報告）	木佐貫 正博ほか	74



# 巻 頭 言

## — 研究紀要第7号 震災特集の刊行にあたって



校 長 藤 原 周 三

平成7年1月17日、5時46分 私達はその一瞬を一生忘れることはないでしょう。あれから一年、松村教諭と7名の生徒を失う悲しみ、辛い避難所暮らし、交通途絶のなかの出勤など多くの困難を乗り越えてきました。本校教育もほぼ回復し、今ではさらなる発展への第一歩を歩みつつあります。今年度芦屋南高等学校研究紀要は、震災特集とし、この一年を振り返り、阪神大震災の被害に本校教職員、生徒、保護者はどのように取り組んできたかを記録に残すことにしました。

私達は全く予期せぬ大災害に遭遇、地震直後はこれまで経験のない事態に次々と対処してきました。ガス・水道がストップし、飲料水だけでなく、便所も使用出来ないなかで授業をせざるをえませんでした。生徒の約3割が避難所で生活しながら通学しました。弁当がなく、学校で昼食を用意もしました。この他にも多くの困難な問題がありました。

学校教育機能が一応回復した後も、生徒の心のケアにも積極的に取り組みました。「不安で夜眠れない。」「怒りっぽい。」と訴えていた生徒も、今は落ち着きを取り戻しています。まさに本校教職員が一丸となって努力した1年でありました。

校内には今も地震の爪痕は多く残り、今なお仮設住宅等から通学している者も多く、心のケアが必要です。完全に立直るにはいまだ少し時間があるであろうと思われます。しかし、この1年間、本校教職員、生徒はよく耐え、頑張ってきました。この研究紀要「地震特集」を発行することにより一つの区切とし、さらなる発展を期したいものです。

最後になりましたが、小林正文教諭をはじめ編集委員の方々に深く感謝いたします。また、本紀要が芦屋南高校の震災記録として関係の方々の参考になればこの上なく幸いに思います。

# 芦屋南高 2 年の歩み

(平成 6・7 年度)

## 平成 6 年度 (1994 年度)

- |                   |   |                 |                                       |
|-------------------|---|-----------------|---------------------------------------|
| 4. 8(金)           | 始業式、着任式 (藤原周三校長・田平純吉事務長・宮定かをり・梶山祥木・田中謙次・泉喜代和・屋島哲也・篠田通子教諭・鳴島豊実習助手・池田敏弥校務員) | 6. 30(木)        | 保護者会 (1・2 年)                          |
| 4. 11(月)          | 第 16 回入学式 (普通科第 16 回生・国際文化科第 12 回生・理数コース第 8 回生)                           | 7. 2(土)         | 生徒会役員選挙 美化デー (3 年)                    |
| 4. 11(月)          | 離任式 (佐野弘校長・佐伯道明事務長・西田薫・白水陽一・田中偉禾・東谷好久・木村教之・小泉武彦・中西喜久教諭・森實夫講師・新本多美男校務員)    | 7. 5(火)         | 職員研修会 (講師 県教委地域改善対策室 竹内牧人「同和教育の基礎知識」) |
| 4. 12(火)          | 対面式、身体測定  | 7. 6(木)~12(火)   | 期末考査                                  |
| 4. 12(火)          | 基礎学力テスト (1・2 年)、課題考査 (3 年)、追認考査   | 7. 6(木)         | 編入考査                                  |
| 4. 16(土)          | 生徒総会  | 7. 12(火)        | 企業見学 (2-7 住友特殊金属)                     |
| 4. 25(月)~27(金)    | オリエンテーション合宿 (1 年鉢伏)   | 7. 13(木)        | 福祉講演会 アジア協会 村上公彦 演題「21 世紀に向けての私たちの視点」 |
| 4. 25(月)          | 春季遠足 (2・3 年六甲山)   | 7. 14(木)~16(土)  | 球技大会 (3・2・1 年の日程)                     |
| 4. 30(土)          | リーダー研修会   | 7. 18(月)        | 生徒会役員認証式 (第 15 代会長 小林稔)、防災避難訓練        |
| 5. 9(月)~13(金)     | 登校指導週間  | 7. 20(木)        | 終業式                                   |
| 5. 13(金)          | 育友会総会 (第 12 代会長 鈴木昭彦)   | 7. 21(木)~30(土)  | 補習授業 (3 年)<br>補習・補充授業 (1・2 年)         |
| 5. 21(土)~25(木)    | 中間考査  | 8. 24(木)        | 転編入考査、追認考査                            |
| 5. 25(木)          | 企業見学 (2・3 年生就職希望者 辰馬本家酒造、1-7 協和株式会社)                                      | 8. 25(木)~31(木)  | 補習授業 (3 年)                            |
| 5. 28(土)~6. 10(金) | 教育実習 (5 人 英語: 3 人 地歴: 1 人 国語: 1 人)  | 9. 1(木)         | 始業式                                   |
| 5. 28(土)          | 美化デー (1 年)  | 9. 2(金)         | 課題考査                                  |
| 6. 15(木)          | 第 15 回芦南祭・文化の部 (校内展示・舞台発表)  | 9. 2(金)~8(金)    | 校門指導                                  |
| 6. 16(木)          | 芦南祭・文化の部 (古典芸能狂言鑑賞 ほか、西宮市アミティホール)   | 9. 20(火)        | 編入考査                                  |
| 6. 18(土)          | 美化デー (2 年)  | 9. 22(木)        | 第 16 回芦南祭体育の部 (本校グラウンド)               |
| 6. 25(土)          | 生徒会役員立合演説会  | 9. 24(土)        | 美化デー (1 年)                            |
| 6. 29(木)          | 保護者会 (3 年)  | 9. 29(木)        | 暴風波浪警報発令のため臨時休校                       |
|                   |   | 10. 1(土)        | 美化デー (1 年)                            |
|                   |   | 10. 6(木)        | 国際文化科入試説明会                            |
|                   |   | 10. 15(土)       | 美化デー (2 年)                            |
|                   |   | 10. 17(月)~20(木) | 中間考査                                  |
|                   |   | 10. 26(木)       | 芦屋市内 3 中学 学校説明会                       |
|                   |   | 10. 31(月)       | 県教委指導訪問 (理科)                          |
|                   |   | 11. 1(火)        | 秋季遠足 (3 年京都嵐山、1・2 年六甲山)               |
|                   |   | 11. 2(木)        | 創立記念日 (本年はボランティアデー)                   |
|                   |   | 11. 7(月)~11(金)  | 登校指導                                  |

- 11. 18(金) 国際文化科・理数コース 学校説明会
- 11. 19(土) 美化デー(3年)
- 11. 24(木)～30(木) 三者面談週間
- 12. 8(木) 職員研修会(講師 宝塚市教育相談センター所長 馬殿禮子「学校カウンセリングについて」)
- 12. 9(木)～15(木) 期末考査
- 12. 16(金)～19(月) 球技大会(3・2・1年の日程)
- 12. 20(火) いきいきハイスクール発表会 演劇部発表「トロピカルレイニィシーズン」
- 12. 21(木) 人権学習 映画「橋のない川」鑑賞と感想文
- 12. 24(土) 終業式
- 12. 26(月)～28(水) 補習・補充授業(3年)

平成7年(1995年)

- 1. 9(月) 始業式
- 1. 10(火) 県下一斉考査(1・2年)
- 1. 11(木) 課題考査
- 1. 17(火) 阪神・淡路大震災の日(松村教諭、生徒七名が死亡)
- 1. 20(金) 自衛隊1000名、救助活動で本校にこの日より宿泊
- 1. 21(土) 芦屋市災害対策本部の一部本校に移される
- 1. 23(月) 安否確認のための登校日  
職員会議で2月1日から学校再開  
修学旅行、マラソンなどの行事の中止  
緊急校務分掌を決める
- 2. 1(水) 学校再開(登校率74%)  
被災状況調査
- 2. 13(月) 国際文化科入試(男子15名、女子77名  
計92名受検)
- 2. 17(金) 国際文化科合格発表(男子7名、女子33名 計40名)  
正午、震災の犠牲者へ全員黙祷
- 2. 22(水) 理数コース入試(男子32名、女子3名  
計35名受検)
- 2. 24(金) 阪神・淡路大震災「生徒職員お別れの会」

- 2. 26(日) 芦屋市主催合同慰霊祭が本校体育館で行われる
- 2. 28(火) 第14回卒業式(男子148名、女子161名、計309名)
- 3. 1(水) 県芦高、卒業式が本校体育館で行われる
- 3. 8(木) 学校保健安全委員会
- 3. 8～14(火) 学年末考査(1・2年)
- 3. 10(金) 転編入考査
- 3. 16(木) 普通科入試(男子104名、女子124名、計228名受検)
- 3. 20(月) 普通科合格発表(男子90名、女子110名、計200名)
- 3. 24(金) 美化デー(1年ワックスがけ)
- 3. 29(水) 終業式  
美化デー(2年ワックスがけ)

平成7年度(1995年度)

- 4. 10(月) 始業式、着任式(西川哲・古藪省二・伊達久代・高田桂子・上野仁史・浅田健・山本紀子・所崎明雄教諭・佐井絵美講師・藤本和雄校務員)  
第17回入学式(普通科第17回生、国際文化科第13回生、理数コース第9回生)
- 4. 11(火) 離任式(増井文美・西尾嘉尉・阿部彰宏・金延峰子・岸田大輔教諭・半野賢治・阿部三枝子・小川鮎子講師・森田博美事務職員・森田育男校務員)  
対面式、身体測定
- 4. 12(水) 基礎学力テスト(1・2年) 課題考査(3年)
- 4. 18(火) 追認考査
- 4. 24(月)～28(金) 面談週間
- 5. 8(月)～12(金) 登校指導
- 5. 10(水) 精神衛生健康アンケート
- 5. 11(木) 企業見学(1年理数コース 協和株式会社)
- 5. 16(火) 育友会総会(第13代会長 知福典子)

5. 20(土)～24(木) 中間考査
5. 24(木) 会社見学(2・3年就職希望者 新神戸オリエンタルホテル) 専門学校説明会
5. 25(木) 春季遠足(1年万博公園、2年京都東山周辺、3年奈良公園)
5. 26(金)～6. 9(金) 教育実習(5人 英語:1人 地歴:2人 保体:1人 家庭:1人) 保護者会(3年)
5. 31(木) 総体壮行会、美化デー(2年)
6. 1(木) 芸術鑑賞会「エウフォニカ演奏」
6. 5(月) 実力テスト(1・2年)
6. 7(木) 美化デー(1年)
6. 12(月) 生徒会役員選挙告示
6. 21(木) 美化デー(3年)、保護者会(1年)
6. 28(木) 保護者会(2年)
6. 29(木) 生徒会役員選挙立合演説会
7. 1(土) 生徒会役員選挙投票
7. 3(月) 大雨洪水警報のため午前中で授業打切り
7. 4(火) 再び大雨洪水警報が出され臨時休校
7. 6(木)～12(木) 期末考査
7. 13(木)～15(土) 球技大会(3・2・1年の日程)
7. 17(月) 精神衛生講話(講師 宝塚市教育相談センター所長 馬殿禮子) 演題「青年期のころ」
7. 18(火) 校長講話(避難訓練にかえて) 米国高校生交流プログラム
7. 20(木) 終業式、離任式(外国人英語助手トルディ、フィービー、古在邦子講師) 生徒会役員認証式(第16代会長 安達隆志郎) 邦楽部全国大会壮行会
7. 21(金)～8. 5(土) 補習授業(前期3年)
7. 21(金)～7. 29(土) 補習、補充授業(1年・2年)
8. 21(金)～8. 31(木) 補習授業(後期3年)
8. 24(木) 追認考査、転編入者考査
9. 1(金) 始業式
9. 2(土) 課題考査、リーダー研修会
9. 6(木) 追認判定会議
9. 17(日) 山手中学校体育祭(本校グラウンド)
9. 24(日) 潮見中学校体育大会(雨天中止)(本校グラウンド)
10. 4(木) 第16回芦南祭文化の部
10. 5(木) 第17回芦南祭体育の部
10. 6(金) 国際文化科学学校説明会
10. 7(土)～8(日) 校外模試(3年)
10. 11(木) 美化デー(1年)
10. 16(月) 県教委指導訪問(音楽)
10. 20(金) 4年制大進路調整会
10. 21(土)～25(木) 中間考査
10. 26(木) 県教委指導訪問(地域改善対策教育)
10. 28(土) 29(日) 芦南国際交流セミナー(西宮総合体育館)
10. 31(火) 実力テスト(1・2年)
11. 1(木) 秋季遠足 3年京都 2・1年六甲山
11. 2(木) 創立記念日、(ボランティアデー)
11. 6(月)～10(金) 登校指導
11. 8(木) 美化デー(2年)
11. 10(金) 芦屋市内3中学校学校説明会
11. 11(土) 12(日) 校外模試(3年)
11. 15(木) バドミントン近畿大会壮行会
11. 16(木) 介護実習(芦屋ハートフル公社)
11. 17(金) 国際文化科、理数コース説明会
11. 21(火) 近畿地区生徒指導担当指導主事連絡協議会
11. 24(金)～30(木) 3者面談週間
12. 6(木) 同和教育職員研修
12. 7(木)～13(木) 期末考査
12. 14(木)～16(土) 球技大会
12. 18(月) 防災避難訓練
12. 19(火) いきいきハイスクール発表会
12. 20(木) 人権学習映画「潤の街」鑑賞
12. 22(金) 終業式



## 震度7襲う

忘れまい、あの悲惨な光景を  
忘れまい、我々はそれを  
越えて来たことを

1995年1月17日未明、まだ多くの市民が浅い眠りについていた時、突如、阪神淡路地方を大地震が襲った。明日もまた昨日と同じ日がやって来る……そう信じて眠りについたら私たちを、未曾有の巨大地震が震撼させた。そして誰も経験したことがない混乱の朝を迎えた。

本校から教師1名、生徒7名の犠牲者を出す惨事となった。他に、自宅全半壊生徒400余名。

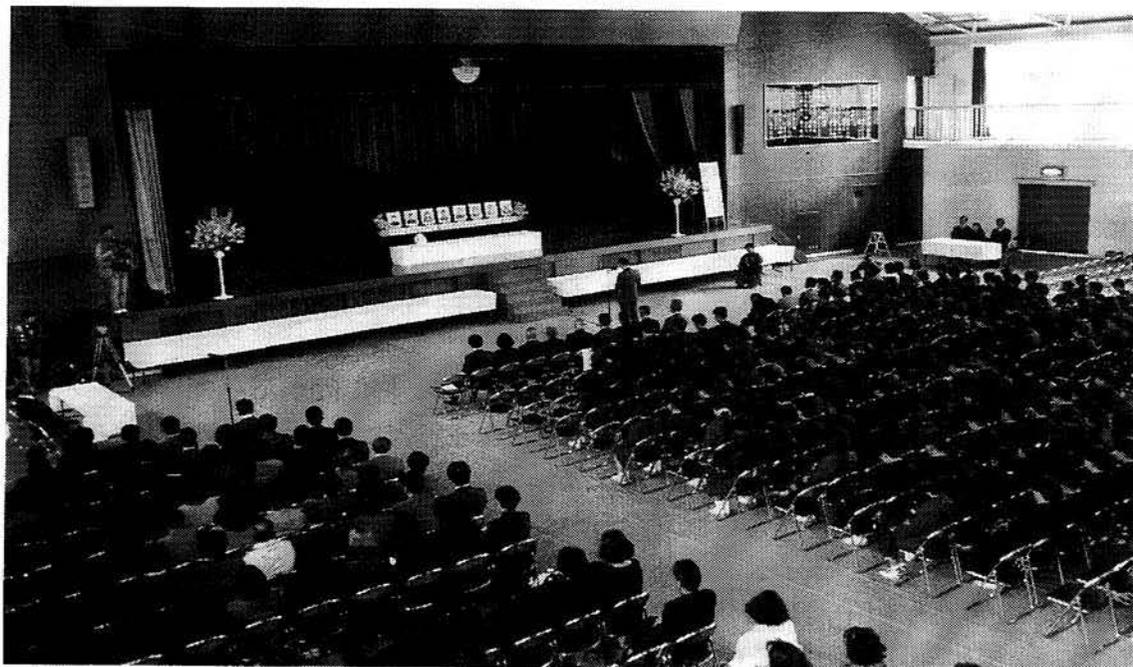
これは地震の日から3月末までの兵庫県立芦屋南高等学校の記録である。

# 学校日誌から

総務部

月	日	曜	お も な 記 録
1	14	土	生徒休業日
	15	日	成人の日
	16	月	振替休日
	17	火	阪神大震災起こる（午前5時46分）。登校できた教職員10名、事務2名。校舎とその周辺、グラウンドは激しい揺れと液状化現象で、亀裂と損傷大。簡単な安否確認。（学校への電話不通）避難者に校内から出てもらう。危険箇所を調べる。
	18	水	登校できた職員：教職員12名、事務2名。藤原校長垂水区から自転車で登校。交通機関はすべて寸断され利用できず。とりあえず小物の整理、安否確認。前日と同じ用務をつづける。
	19	木	登校できた職員2、3名増えたが、依然として全体の4分の1以下。登校出来ない職員は、専免扱い。安否確認などはこれまでと同じ。
	20	金	安否確認。生徒7名、松村教諭の死亡がわかる。事務室で立ったままの職員会議、23日を安否確認のための登校日と決める。自衛隊1000名救援活動で本校に宿営を始める。（体育館、剣道場、女子更衣室）
	21	土	安否確認。校舎の点検つづく。芦屋市災害対策本部の一部本校に移る。（のち全面移転。）対策本部の救援物資が生徒昇降口、連絡通路、食堂に搬入される。
	22	日	職員数名登校して作業。市側や自衛隊と折衝。松村先生の葬儀、淡路島の自宅で。校長参列。
	23	月	安否確認のための登校日。午前11時テニスコートにて集合点呼。教室でホームルーム。生徒登校率は38%、職員78%。午後、職員会議、緊急校務分掌決まる。松村先生のクラス1年5組は、宮定先生が代行。1月いっぱい臨時休校とし、2月1日を学校再開日と決める。 JR、私鉄は代行バスを走らせているが、道路は大渋滞、バス停は長蛇の列。
	24	火	生徒、職員の安否確認つづく。バスは2時間以上待たされることもある。10～15kmの長距離を歩くひとが多い。
	25	水	全国からの救援物資届く。さらに置場をタイプ室、国際文化科講義室、2号館1F廊下にまで広げる。この日、JRが甲子園より芦屋駅まで開通。芦屋－須磨間は不通。
	26	木	学校再開に向けて準備つづく。本校関係の犠牲者の「合同追悼式」（のちに名称変更）の案を練る。
	27	金	翌日の校務運営委員会の準備。
28	土	11：00校務運営委員会。学校再開2月1日の日程確認、被災状況調査の準備。教務部より学用品の被害調査。特別時間割。諸注意など。教科書、辞書等の献本を出版社へ求める教科もあった。 追悼式は2月24日、卒業は2月28日と決める。	
29	日	職員数名登校して作業。救援物資一階連絡通路もいっぱいになる。	
30	月	学校再開の準備。担任、引き続き各生徒に連絡をとる。藤原校長、死亡生徒の遺族訪問を始める。 葬儀も相次いで行われ、校長、学年主任、担任、生徒たちが参列した。	
31	火	同上。各部、学年団も再開へ向けて準備を続ける。	
2	1	水	学校再開。10：00職員登校、11：00生徒登校（テニスコートで集合点呼）教室にてLHR、出席した生徒だけでなく、欠席生徒の状況調査。芦屋市災害対策本部より、家屋全半壊の生徒に弁当150食支給される。男子小便を除き校内便所は使用禁止。仮設トイレ10基設置。 登校率：1年…86%、2年…75%、3年…61%（平均74%） 午後職員会議。

月	日	曜	お も な 記 録
2	2	木	特別時間割、10:00始業。但し、この日は最初にLHRで被災状況調査。午前中2限。6日より午前2限、午後2限に変える。上記の弁当支給は3月28日の終業式までつづく。(但し、最後は70食。)
	3	金	特別時間割。昇降口が使えないので1、2年の下足箱を2号館西側に移動。この日、午後、国際文化科、理数コースの推薦入試実施要領の説明会。熊本、新潟など他府県の学校へ転校、および一時転学した生徒数19名。
	4	土	特別時間割午前中2限 出席率1年79.4% 2年79.8%
	5	日	職員数名登校
	6	月	この日から午前2限、午後2限の45分授業4限になる 校務運営委員会
	8	水	国際文化科、理数コース推薦入試願書受付 1年、2年生終礼時に震災について作文。三年の成績会議
	13	月	国際文化科入試
	17	金	10:00国際文化科合格発表 正午、大震災の犠牲者へ黙祷
	22	水	理数コース入試
	24	金	10:00理数コース合格発表 3年卒業式予行 13:10「阪神大震災生徒・職員お別れの会」(体育館)
	26	日	芦屋市合同慰霊祭が本校体育館で行われる 皇太子夫妻参列される
	28	火	第14回卒業証書授与式
3	1	水	この日から9:10職員打合せ50分×4限授業 県立芦屋高校が本校体育館で卒業式
	8	水	学年末考査始まる 学校保健安全委員会
	9	木	普通科入試調査書審査始まる 一年個人写真撮影 クラブ顧問会議(部活動再開に向けて)
	10	金	二年個人写真撮影 転編入考査
	15	水	入試前大掃除 検査場作り 成績会議(1)
	16	木	普通科入試、16:10全員により採点
	20	月	普通科合格発表 校務運営委員会
	28	火	この日で3学期の授業を終える 成績会議(2)
	29	水	終業式



お別れの会

## 阪神大震災ドキュメント1ヵ月

1月17日	5. 46	地震発生
	5. 55	大阪管区気象台が「震源地は淡路島北部、マグニチュード(M)7.2と推定、京都などで震度5」と発表
	6. 00	関西、四国のJR、名神高速も全面ストップ
	6. 13	大阪管区気象台が地震情報6号で「神戸、震度6の烈震」と発表
	7. 35	神戸市東灘区で阪神高速の横倒しが判明
	9. 30	JR西日本が「山陽新幹線大阪ー西明石間で高架橋の橋げたが落下している模様」と報道機関に第一報/神戸市が県に自衛隊出動を要請
	10. 00	知事が自衛隊に出動要請
	11. 00	気象庁が「兵庫県南部地震」と命名
18日	6. 22	神戸市東灘区のガス貯蔵タンクからガス漏れ、住民8万人に避難勧告
19日	9. 16	スイスから災害救助隊25人と救助犬が関西国際空港に到着
20日	10. 07	京都ー新大阪間で東海道新幹線復旧
	11. 30	兵庫県内の断水は95万世帯、ガス停止も85万世帯と判明
	18. 00	気象庁は現地調査の結果、神戸市の一部と淡路島北部を震度7と発表(2月7日に地域をさらに拡大)
21日	0. 00	神戸市消防局、市内の焼失面積100ヘクタールを超えたと発表
	21. 12	北淡町で震度4、神戸で震度3の余震
22日	23. 37	気象庁は余震が1000回に達し、うち有感105回と発表
23日	11. 05	震災名が「阪神大震災」に
	17. 00	関西電力が被災地全域への送電を再開と発表
24日	14. 00	第五管区海上保安本部、震源地の海底調査、須磨沖にも断層
25日	5. 46	JR東海道線の甲子園口ー芦屋間が復旧
	23. 16	神戸市中央区などで震度4の余震
26日	4. 59	阪神電鉄が甲子園ー青木間で運転再開
27日	15. 00	本州四国連絡橋公団第一建設局が「明石海峡大橋淡路島側アンカレッジが西へ1.4メートルずれた」と発表
30日	4. 56	JR山陽線の神戸ー須磨間が開通
2月1日	6. 00	国道43号線西宮市から神戸市灘区までの13キロ通行規制
3日	12. 50	山形大の前田保夫教授らが、複数の活断層が動いた地震と推定(三宮で地震断層発見)
6日	6. 00	阪神・三宮ー新開地、阪急・花隈ー新開地、山陽・高速神戸ー新開地の各区間が復旧
7日	2. 00	阪神電鉄尼崎駅で回送電車が脱線。青木ー梅田間が不通に
	5. 01	神戸電鉄の鈴蘭台ー長田間が開通
8日	6. 00	JR住吉ー芦屋間が開通。ラッシュアワーは住吉駅も大混雑
	9. 30	23日ぶりにすべての県立全日制高校130校で授業再開
13日	6. 00	阪急御影ー王子公園で運転再開
	20. 00	警察庁が午前10時45分現在、死者5329人、行方不明2人と発表
15日	7. 00	JR和田岬線運転再開
16日	5. 45	神戸市営地下鉄が全面復旧(三宮など3駅は通過)

## 混乱・悲しみ・秩序回復 阪神大震災と学校

校長 藤原 周三

『震度7、学校はどうなったか、生徒は……』突き上げる激しい揺れ、地鳴り、発光現象。体でこの地震の激しさを即座に実感した。学校は崩壊していないだろうか。生徒、職員は無事だろうか。校長として、以後数々の不安、悩み、悲しみを経験することになる。

『被害確認』地震当日に建物については被害は軽度である事が分った。2日目以後出勤出来た先生方により、生徒、職員の安否確認に入った。電話の不通、交通の途絶により作業は困難を極めた。このような大災害の後では、日常の連絡網は全く機能しなかった。むしろ口伝えが有効であった。1人の生徒の死亡が確認された。しかし、ラジオで次々と伝えられる死者の数のためか、その時はあまり悲しみは感じられなかった。しかし2人、3人、4人、5人……たゞ呆然とするのみだった。先生方の安否確認は私の最も急ぐ事だった。特に田原教頭に連絡出来ない事は何よりも心配であった。今度のような緊急時職員、生徒をまとめ、指示する者は不可欠である。この点本校の先生方は、私が不在の時も適切に行動し、処理出来たことは、この上なく心強い感じがした。心配した田原教頭は家が全壊しているにもかかわらず出勤された時には頭が下る思いだった。以後田原教頭なくしてはあの混乱から立直れていないのではないかと思う。今度のような大災害に備え学校の指揮系統の確立を痛感した。特に管理職が不在の時、誰が全体を指導するか日頃から決定しておくべきと考える。

先生方の努力の結果、生徒の安否、生徒の家の被害は、1月23日最終的に判明した。死亡は生徒7名と松村先生、住む家を失った生徒約125名。想像をはるかに越えた数字である。しかし、校長として被害を最も理解したのは、やはり自分の目を見た崩壊した家、倒れた高速道路、3階部分で壊れたマンション、運び出されている遺体、燃える家であった。災害現場に立ち、直接体験してこそ、被災生徒のきもちが理解できるのではないか。以後の学校運営に大いに役立った。

『亡き生徒、先生への思い』一瞬にして8名の尊い命を失った事は、時が経につれ実感となり、悲しみを新にした。亡き生徒、教師のために学校として、校長として何をすべきか、私は悩んだ。やはり一人でも二人でも遺体に会おうと考え、遺体安置所へ行った。柩……。たゞ合掌するだけだった。ヘリコプターで遠くの斎場へ運ばれる生徒の遺体を見送りにも行った。全壊した家、避難所、テントへと死亡した生徒の家庭を訪ねたこともあった。そして、亡くなった生徒の葬儀にはすべて参列した。悲しい別れだった。私にはこれしか出来なかった。

亡き生徒、先生への悲しみに沈んでばかりはいられない。生き延びた生徒の事を考えねば。私は「お別れ会」を開くことにした。亡き人達のために全員で哀悼の意をあらわし、同時に再出発の一步としたかった。小林総務部長を中心として全職員の協力で、立派な会が開催出来た。一輪の花とともに全校生が亡き友を思い、生きる事の大切さを認識してくれたものと信じている。

『秩序回復と心のケア』生徒一人一人は、未曾有の現実と直面した。母を亡くした者、家族を失った者。そして、約半数の生徒の家が全半壊した。最も多い時には約200名の生徒が避難所に居た。3年生の多くが大学受験直前であった。1、2年生もある者は半壊の家で、ある者はテントの中で余震に

脅えながら悶々とあてのない日々を過ごしていた。「おもいきりオナラがしてみたい。」と言った生徒があった。この生徒達を何んとかしてやらねば、と思った。地震後ちょうど1週間後の1月23日全校生を集めた。制服の生徒、私服の生徒、どの生徒も明るく、再会を喜びあっていた。全校生徒を前にした時私は、「生きていてよかったね。」と思わず叫びそうになり、涙があふれた。この時ほど、「生きる」と云う事の大切さを感じた時はない。この子供達を一日も早く元気にしてやらねばと心に誓った。

不安、焦燥、放心の生徒を立直らせるには、学校の一日も早い再開しかないと考えた。しかし容易ではなかった。再開を決断するまでには、校長として悩みに悩んだ。交通手段を確保するため生徒の居住地ごとの数を調査し、バスの運行も考えた。遠方から通勤する先生に泊る場所の確保も一時しようともした。2月1日学校再開を提案したところ、先生方には種々の悪条件にもかかわらず受け入れてもらえた。生徒が登校するようになってからも、自転車通学途中の事故の心配など、毎日不安の連続であった。

3月上旬、保健部の先生を中心に健康（心理）調査が実施された。生徒の心理面での問題発生を私も心配していた時であり、時を得た調査であった。以後生徒指導部、保健部によるCMI調査など生徒の心のケアに積極的に取組む組織も出来、多くの生徒、保護者が救われたことは幸いであった。本校のこの取組みは、カウンセラーの配置となるなど高く評価されている。

【校長としての決断と配慮】緊急な事の連続であり、また、前例のない事態が次々と起った。教職員に十分検討してもらいたいことも即決せざるをえないことが多かった。また、授業の再開などは、無理も承知のうえ、私の独断で決定した。職員、生徒には出勤、登校に大変な困難を与えたと思う。先生方、生徒諸君が黙って私の指示に従ってもらえたことに心から感謝したい。

校長は、先を予測し、全力を尽して生徒・職員・学校を守る。この気持ちで震災後今日まで過してきた。震災から学校が立直るには何よりも教職員が立直ることと考えた。先生方、事務職員が家庭に心配を持たず、安心して職務に全力を注げるようにすることが私の第一番目の仕事と思った。住む家を失った職員に事務長の努力で家が確保できた時は安堵した。

本校は、幸いに避難者もなく、校舎の破損程度は軽かった。芦屋市の災害救助物資の集積所となったが生徒、職員の強力のおかげで何の問題も生ずることなく無事終了出来た。しかし、運動場の仮設住宅建設は悩みとなった。「仮設住宅を芦屋南の運動場に建てたいと申し出があるようだがどうか。」とある日突然県教委高校教育課より電話があった。「学校の運動場は若い生徒のためにあるんですよ。そんなばかな」とその時は答えた。教育委員会にもよく理解してもらったが、結局は教育上支障の少ないと思われる位置に建設が決った。仮設住宅により運動場を全くなくした近隣中学校等のことを考えると本校は幸であったと考えている。仮設住宅建設や中学生の本校運動場の利用についても、体育科の先生方の協力に深く感謝している。

予期せぬ大地震、生徒・教師の死亡、混乱。悲しみと混乱の年であった。しかし、命の大切さ、人間の強さ、人間性の回復など多くの事を学んだ。私達は、この大震災を負とせず、貴重な経験と考え頑張らねばならない。

## 学校再開への経緯

教頭 田原 美生

平成7年1月17日の阪神・淡路大震災は全体で全壊家世帯179,202世帯、半壊227,135世帯、死亡者5,480人、避難者数304,595人（7年8月11日現在）となる大惨事であった。本校生徒の主たる通学区である神戸市で全壊115,302世帯、半壊113,110世帯、死亡者3,891名、避難者227,819人、また、学校の所在地である芦屋市は人口870,000人程の小さな都市であったが全壊7,412世帯、半壊9,296世帯、死亡者433人、避難者16,134人という甚大な被害を受けている。

本校も海岸の埋め立て地に建設されている状況から液状化現象と50センチもの地盤沈下による校舎施設等への被害を受け、教員1名、生徒7名が死亡するという悲しい結果になった。

生徒の約半数の家庭が全半壊し、教職員にも家屋に損壊を受けた者が多くいる中で断水や交通機関の不通から一時、学校の教育機能が麻痺した。このような状況の中で、学校機能を回復するための必死の取組みが教職員と生徒の間で行われたのであるが、それは大変な困難を伴うものであった。

ここに、その経緯の一端を記しておく。



左側に車が下敷きになり、電柱のところに供花が見られる。

神戸市東灘区

1月17日（火） 午前5時46分に大震災発生。

午前7時に近くの教員寮に住む1学年の主任が登校。玄関のピロティや運動場に30名程の避難者を確認。続いて2・3学年主任等数名が出勤。事務室を開けて学校長や教頭と電話で連絡をとるがなかなか繋がらない。机を外に出し、ラジオとポットに残っていた飲料水を避難者に提供する。

避難者からトイレの開放と学校を避難所とするよう依頼があったが校長の指示が出るまで指定された中学校等へ避難してもらう。トイレは開放。学校周辺の高層住宅は断水のためプールの水を下水用に汲みに来る人が増える。学校長は出勤した職員に人的・物的被害の調査を指示。自ら職員の安否確認を行うと共に教育委員会との連絡をとる。生徒1名が登校するが指示により帰宅。

学校へ徒歩で向かうが、たどりつけない職員もあった。出勤できた者12名。

## 1月18日（水）

午前7時過ぎに登校した職員が事務室を開ける。被災箇所の点検を開始。理科の教諭が化学準備室の散乱した薬品をかたづける。家庭科室は給湯器の破損のため水びたしになっている。漏電とガス漏れがあったため、元栓を切る。図書室は書架が倒れて足を踏み入れられない。藤原校長が西舞子から自転車をに乗って出勤。職員に指示を与えるとともに被災状況を調査。校内に避難してくる人やプールの水を汲みにくる人が増える。

## 1月19日（木）

早朝教頭が出勤。教頭は家屋の全壊で埋まっていたこともありこれまで出勤できなかった。出勤してきた職員の分担を決める。職員の安否を確認する作業、学年別に生徒全員の安否を確認する作業、公衆回線を使って校長と連絡をとる係、水や食料を確保する係等を緊急に決める。避難者やマスコミとの対応は教頭が行なった。安否確認は電話、新聞、ラジオによった。生徒からの電話が入れば必ず近所の生徒の安否を聞いた。事務室に模造紙をはり、職員の安否と生徒の安否を記入していった。生徒の死亡者名が書かれるが事実が確認されるまでだれも信じたくない気持だった。

学校長から松村教諭の安否の確認の指示がでる。教頭が確認に行ったがマンションが谷に落ち込んで道路がなくなっており寄りつけない。近所の人に聞くとこのあたりでは死者はでていないという。

## 1月20日（金）

早朝より昨日決めたシフトでの作業が始まる。死亡したとされる生徒の確認のために生徒の自宅や死体安置所に学年の教師が走る。この日からの電話が急速に増える。1年の主任が松村教諭の安否確認に行くがやはり近寄れない。松村教諭の奥さんは淡路の小学校の教頭なので淡路の校長からも確認の依頼が入る。再び教頭がでかける。倒壊したビルのすきまから入り込んで崖を降りる。谷間のマンションは1階部分が押しつぶされてなくなっている。1階の住人の名前が2階の壁にペンキで書かれ松村という名以外には○印が入っている。松村教諭の居住部分は跡形もなく崩れている。教頭が学校へ戻って間もなく毎日新聞社から松村教諭の遺体を確認したという連絡が入った。

午後、事務室で立ったままの職員会議が開かれる。生徒7名と教員1名の死亡を確認。大学入試の日程も迫っている時でもあるので出勤できる職員での臨時校務分掌を学校長が委嘱。校舎の応急修復、教務（高校の入学者選抜）、生徒指導、進路指導、市や自衛隊との折衝等いずれも急を要するものである。1月23日を安否や状況確認のための生徒登校日とする。

夕刻、陸上自衛隊第10師団1000名が救助活動のため到着。学校側と部隊の責任者との協議をもつ。運動場に車両を配備。体育館と剣道場が宿舎、食堂を部隊本部とする。

## 1月21日（土）

生徒の安否状況の確認作業が続く。臨時の分掌での入試等の準備の再開される。受験のための調査書を依頼してくる卒業生が次々やってくる。大学や予備校からのファックスがしきりに入り連絡用の電話回線に支障がでてくる。校舎の応急修理が続く。芦屋市の災害対策本部物資班を本校に移転させたいとの依頼で市と協議に入る。市の救援物資が搬入される。夜間になって学校、自衛隊、市の3者で調整会議をもつ。

### 1月22日（日）

教頭ほか数名の職員が出勤し生徒の安否確認の作業を続ける。全国からの救援物資が集積されてたちまち通路も食堂もいっぱいになる。再び自衛隊、市と調整会を開く。自衛隊からは通信部隊用の教室の提供を依頼される。市からは物資集積のための教室の提供を依頼される。

この日、松村教諭の葬儀が淡路で行われ学校長が参列した。

### 1月23日（月）

午前11時テニスコートに生徒を集合させる。生徒の登校率は38%、職員は78%の出勤であった。学校長から犠牲者の報告があり全員で黙祷した。全体会のあと、学年別、学級別に生徒の安否の確認、被災状況の調査を行った。学用品、通学用品を失っている生徒が多いが、本日来れなかった生徒の多くは交通手段のない者の他、避難所や他府県などに避難している模様で更に連絡が取りにくい事態が起こっている。死亡した松村教諭の1年5組は宮定教諭が担任を代行する。当面、交通機関の復旧が見込めないことと道路の危険性、家庭の復旧などから判断し学校の再開を2月1日とする。

### 1月24日（火）～1月25日（水）

生徒の状況調査続く。生徒の避難先は避難所の他、公園でテント暮らしを続けている者もいる。他府県へ避難した者は東京、九州まで広がる。25日の調査で生徒の内、母を失った生徒2名、祖父母を失った生徒3名、怪我をした生徒2名が判明。その外、死亡した生徒7名の内1名は父母、弟と一家全員が死亡している。

### 1月26日（木）～1月27日（金）

本来ならこの日から4泊5日で修学旅行であった。大震災のため中止、積立金は緊急の生活費としてただちに返金の処置を取った。全国からの救援物資が続々と対策本部に届く。

### 1月28日（土）

午前中校務運営委員会。2月1日よりの学校再開に向けて臨時時間割の作成、教科書等の学用品の確保が問題となる。出版社等から被災見舞いととどいたノートや鉛筆を分配することとし、教科書がなくても教えられるよう各教科で教材を工夫することとした。

生徒・職員の追悼式を2月24日とすることに決定。



校内の災害対策本部前

## 1月29日（日）

教頭他数名が出勤。救援物資が通路、廊下等に続々と集積されるため、授業の支障のないように整理することが職員の仕事である。ボランティアも多数やってくるようになったので活動場所の指示も行う。

## 1月30日（月）～1月31日（火）

学校再開の準備。教材作成等。藤原校長が死亡生徒の家庭の訪問、葬儀の参列を始める。

## 2月1日（水）

学校再開。生徒はテニスコートに集合。隣の運動場は自衛隊の車でうまっている。学校長の状況を知らせる言葉の中に亡くなった友を思い出して泣いている生徒もいる。

教室でHR。調査用紙が配布され本人および欠席している生徒の状況調査を行う。この日から市の対策本部の協力を得て150食の昼食を生徒に提供。職員は野菜の調理やレトルト食品を温める作業を連日行った。トイレの使用ができないため、仮設トイレを10基設置した。

この日の出席率は1年86%、2年75%、3年61%であった。

## 2月2日以降

2月2日以降は授業の再開となるが、交通の途絶は依然続いており、生徒の登校は困難を極めた。遠い生徒は奈良県や京都府から通学していた。遠方の避難先の高校で一時受入れをしてもらった生徒は9名、そのまま転校せざるを得なかった生徒も10名いる。

毎日昼食を提供しながら授業を続ける中、2月13日には国際文化科の入学者選抜、2月22日には理数コースの入学者選抜を実施した。

2月24日は理数コースの合格者発表の日であったが、午後本校体育館において死亡した職員・生徒に対するお別れの会を実施した。遺族が参列し生徒一人一人が霊前に花を捧げた。

2月26日は芦屋市の合同追悼式が本校で皇太子殿下ご夫妻や県知事、芦屋市長をお迎えして挙行された。厳重な警戒であった。

2月28日は芦屋市長の祝詞をいただいて卒業式を挙行。震災で死亡した生徒1名も友達と共に卒業していった。例年より遅い卒業式であった。

3月下旬に運動場の一部に仮設住宅39戸が設置される。

終業式は3月23日の予定であったが今年度は授業を1週間延長して3月29日とした。

学校の教育機能の回復のための取組みはこれ以降も長期に渡って続くことになるのであるが、このような非常災害時における教育機能の回復にとって最も大切であったことは学校長を中心とする指揮系統が確立されていたことであった。十分な会議をもつ余裕もない中で、学校長の判断に従い職員が自らも被災しながらも体力や精神力の限界まで努力してくれたことも記録にとどめておきたい。

# 「心に刻まれた言葉」

## 記録文集の編集を担当して

庄 義 弘

今回の阪神大震災によって、本校も大きな被害を受けた。8名もの犠牲者を出し、多くの生徒が、家族や友人を失い、住み慣れた住居と街を失った。全ての者にとって、言い知れぬ衝撃であった。

何もかもが、不自由、不便な中で、2月1日より学校が再開された。その直後、藤原校長先の発案により、生徒の文集を作る事となり、私が編集を担当する事となった。その日から、無事完成し、4月19日に本校教職員と生徒に配布するまでの、編集作業の日々は、今もなお忘れがたいものである。

3月上旬になり、ようやく一年生の原稿を、宮定先生から、少し遅れて、幸森、山照先生から、二年生の原稿を受け取った。目を通して行く内に、大きな感動を覚え、強く心を動かされた。それは、文章の美しさ、上手さによってではなく、事実そのもの、生徒の心の思いそのものによってであったと思う。全てを、読み終えた後で、こう思う様になった。生徒達の書いてくれた文章を最大限に生かし、出来る限りの文集をつくることは自分の使命であると。

しかしながら、個々の文章の多くは、そのままでは、文集にのせられないものであった。タイトルの無いものも多く、読んでいて、意味が不明なものや、誤解を与えそうな表現もよく目に付いた。それら一つ一つをチェックしていくことから、開始した。何度も繰り返して読む内に、全体構想のイメージがしだいにハッキリして来た。内容によって三部に分ける。それぞれにタイトルをつける。これは驚くほど、すぐに頭に浮かんだ。ただ、どの文章をどこに入れるか、順番をどうするかは、かなり考えた。編集の仕事は、料理人、野球の監督、オーケストラの指揮者に似ていると思った。やり方次第で、個々の素材を生かしもすれば、殺しもする。

表紙をどうするかも、大問題であった。3月2日、自転車に乗り、津知町、本庄町を中心とした一帯に写真を撮りに出かけた。午前11時に、現地に着いた。カメラを手に、歩き回った。その日は天気が良く、人の姿はまばらであった。新聞でも読み、話にも聞いてはいたが、その破壊されつくした街の姿は、想像を絶するものであった。最も多くの犠牲者の出た地域であるが、そのことは、一目で理解できた。家屋は倒れているのではない、押しつぶされ、ねじりつぶされているのだ。まるで巨大な津波によって、天空に持ち上げられ、大地に叩き付けられたと、思える様な状況であった。その場に居ると当日の、あの日の、人々の叫び声や、物音が聞こえて来る様に思えた。あちこちに、小さな花束や果物が置かれ、紙のひな人形がかざられている。胸を押しつぶされる様な感情におそわれながら、写真を撮り続けたが、なかなか、見えそうな写真がとれず、夕方五時頃になり、暗くなり始めたので、学校へ戻った。

文集を作ることを意味を、私は次の様に考えていた。一つは、この出来事を記録として残すこと。一つは、犠牲者を追悼すること、一つは、この体験を一人一人が無駄にしない様にする為であり、そして、多くの傷ついた生徒にとって、生きる力と希望となりうるものにすることであった。3枚の新聞記事のコピーを使ったのも、その為である。数種類の新聞を調べたが、神戸新聞を手にしたとき、その地震報道の迫力に圧倒されてしまった。わずかの紙面ながら、全面が地震の記事でうまり、まる

で、全身で地震と戦っている様な印象を受けた。そして、地域新聞の重要性を再認識した。

一日も早く、発刊する為に、私の編集作業は、ごく短期間に、仕上げなければならなかった。3月は入試の時期でもあり、他の仕事も重なり、連日、家に持ち帰って、2時、3時まで作業を続けた。ともかく読むのに時間がかかる。何度も何度も読んだので、ほとんど全ての文章を暗記してしまった。なるほど「読書百遍意自ずから通ず」と言うのは本当だなと思った。

編集が終り、印刷された文集を手にした時は、ほんとうに嬉しかった。苦勞がむくわれたと思った。そして、私の仕事は終った、とホッとしたものだった。ところが終わらなかつた。文集の発刊後予想もしなかつた大きな反響を呼んだ。本校の教職員の中からも、実費でわけて欲しいと言う方が多く、私の手を通して出て行った分だけで124冊に上った。

各新聞にも取り上げられた。4月22日付朝日、23日付読売、27日付神戸、5月9日付サンケイが全て写真入りで記事にした。5月9日付神戸新聞に、本校生の母親から、文集の書店販売を望む投書が載った。この頃から、学校への問い合わせが増え出した。そこで、増刷して、書店にも置いてもらうことになった。短期間に全て売り切れたそうである。

あの文集が、多くの人に読まれて、何らかの役に立てたとすれば、編集者として、これ以上の喜びはない。これも全て、協力いただいた多くの方々のおかげであり感謝したい。なかでも国語科の先生方の協力がなければ、文集編集は全く不可能であった。特に、犠牲となられた、松村先生に代わって、クラス担任となり、大変忙しい中を、1年生全体をとりまとめてくれた宮定先生、何度も作文指導をし、校正の時にも手伝ってくれ、何かと相談にのってくれた山照・幸森先生に対しては、格別感謝の念が大である。



## 地震のあとの図書館

図書部長 山本宏美

一月二十日(金)、職員会議のあと、大勢の先生方に手伝っていただいて、倒れた書架を起こした。木製傾斜書架が十六個、木製文庫新書判用書架が十八個、木製大型書架が一個、雑誌架が一個、カード・ケースが二個だった。

他に、スチール製書架が横ずれしていたり、木製窓下書架が横ずれしていたり、ということがあったが、これらは本を下ろさないと動かさないため、復元は後日に回した。(校務員さんの手を煩わした。)

倒れた書架は、傾斜書架はすべて北向きに倒れていた。文庫新書書架はほとんどが北向きだったが、南向きにも一列倒れていた。雑誌架は南向き、カード・ケースも南向きだった。

閲覧室内、北側の壁を背に配置した書架は、納品されたばかりで、本を配架していなかった大型書架一個が倒れた他は、まったく倒れていなかった。

北から南へ大きな力が加わったため、書架は北向きに、将棋倒しに倒れたものと思われた。

書架の破損は、大半が裏のベニヤ板の部分が割れたり、外れたりという具合だったが、ベニヤ板以外が割れたり欠けたりした箇所もあった。

肝心の本は、不規則に散らばるということはなく、書架に並べた形のまま、床に落ちていた。傷んで利用できない、というものはなかった。

二月六日(火)、規文堂(本校が書架を購入した、京都の図書用品の会社)の藤原さんが来校。傷み具合を見てもらった。

二月中旬(日、不明)から、自習室としてのみ開館をはじめ。座席四十八名分。

また、それと前後して、地域の他校生にも図書室を開放してほしいと打診があり、条件をつけて承諾したが、その後正式な申し入れはなかった。

五月一日(月)、規文堂から藤原さんと職人一名が来校、九日(火)には職人が二名となり、修理にかかる。予定以上に時間がかかる。十二日(金)には、残った書架を工場へ持ち帰り、修理することとなり、トラックで京都へ運ぶ。それらは二十日(土)に搬入された。

五月十七日(水)から、従前どおり、図書館を再開した。地震以来、四ヶ月ぶりである。

図書館を利用しての、地域研究、その他の授業もこの日から使用してもらえることとなった。

遅くとも三月末までには復元できる予定であったが、一ヶ月半遅れてしまい、生徒にも先生方にも迷惑をかけた。



中間考査の後、六月二日(金)・三日(土)と一年生を対象に、図書館オリエンテーションを行う。全七クラスのうち四クラス。

書架修理の後、本は、取りあえず並べたものの、配列は未整理。この夏の作業となる。

設備・備品の破損として、書架の他、エアコンがある。地震後の冬の暖房、この夏の冷房ともに使用できないでいる。復旧の目途はたっていない。

以上が、地震後の図書館の状態である。

(図書館報「L I V R E」第8号より転載)

## 修学旅行の中止

第3学年主任 木村信吾

平成6年度の第15回生修学旅行は平成7年1月26日(木)から30日(月)までの日程で、長野県志賀高原にて実施の予定であった。実際の準備日程としては、2学期以降、班編成、各係、役割の決定、部屋割り、座席の割当等を含めた事前指導に入った。この間、「しおり」の編集と並行して、生徒の活動の詳細を詰める検討会を学年で幾度も重ね、それに合わせて引率教員のマニュアルも同時に改訂を繰り返した。このような打ち合わせ会は時には夜8時を過ぎることもあった。

12月に入って、スキー用品の小物販売も終わり、「しおり」が完成した。旅程では往路がバスで、第1日目の学校出発時刻が早朝であるため、例年のように生徒の自覚を高めるべく集合・点呼の訓練も兼ねて、1月の17日からは、約1週間生徒に早朝登校をさせる計画で準備を整えていた。

そして、その早朝登校の第1日目、あの思いもよらなかった未曾有の大地震が兵庫県南部を襲った。その当日からの数日間は生徒の安否の確認等で忙殺され修学旅行のことまでは思いが及ばなかったが、この学年の生徒では当時2年1組の西島昭次君、大東加奈さん、同じく2年7組の竹本靖司君の3名が尊い生命を奪われ、また家族を亡くした生徒、自らが、また家族が負傷した生徒がおり、それに加えて自宅全壊等で遠方へ避難せざるを得なかった生徒が多数いることを思うと修学旅行を実施することは許されることではなかった。また鉄道、道路が破壊され交通が途絶してしまった状況では物理的にも実施は全く不可能なことであった。

このような混乱のなかで、初めての生徒登校日となった1月23日、登校できた生徒のうち2年生は99名だけであったが、テニスコートでの全校集会で学校長より修学旅行の中止を告げたが、もちろん誰一人として中止について不満を口にしたものはいなかった。

尚、震災後の家庭の経済的状況を考え、すでに完成済みであった「しおり」印刷代等の若干の費用の一部を残し旅行積立金を2月中に返金した。



「先生、そうと違うねん、全然違うわ。」

「えー、そんなもう忘れたわ。」

「もう、どう書いたらいいかわからんわ、先生代わりに書いといて。」

まるで事情聴取しているみたいだと笑われながら始めた作文指導。生徒の書いてきた作文の大半は、話がいきなりとんでいて、第三者が読むとつじつまの合わないものばかりであった。せめ



芦屋市内で

て書かれている状況が理解できる程度に整理をしなければと思い、生徒の話の聞き始めたのである。こんなことで、果たして本当に『文集』が出来上がるのだろうかと不安になったのは、一度や二度のことではない。

二月。授業が再開してすぐに、二年生の国語を担当していた山照先生と私は、今の生徒の心境や状態を文章で表現させてみようと考え、とりあえず『現代文』の授業で全員に書かせてみた。全員と言っても、避難中で登校できていない生徒も大勢いた頃のことである。ちょうどその頃、やはり校長先生が、生徒の心の記録を是非残したいので文集を作りたいと言いだされた。

普段、国語の授業でなるべく機会を作って、「書く」ことをしている。が、生徒のほうは「書くことなど何もない」状態であることが常である。しかし、この度は「地震を体験した」という「書くこと」があるはずだが大丈夫だろうかと思っていたら、案の定、何となく似たような内容のものが多かった。私達が当初考えていた「今の気持ちを書いてみよう」というだけのものなら、それでも構わない。けれども、文集を作るとなるとそうもいかない。様々な内容のものが必要とされるものである。

「なんでそのこと書かなかったん？ そんなことちっとも書いてなかったやないの。」

生徒の話の聞いていると様々な体験談が飛び出してくる。避難所生活を送るうえでの厳しい当番制や、ボランティアをしたこと。登校するよりも家業を手伝わざるを得なかったり、ポートアイランド・六甲アイランドから船に乗って登校していたり、新聞記事に載っていたように山口組の人に援助してもらったり、自分の家が焼けていく様を見続けなければならなかったりと本当に様々である。話せばいくらかでも出てくるのに、書けたと言って持って来るものはどれも通り一遍のものばかりだ。なぜそうなるのだろうか。何人かの生徒から得た答えはこうだった。

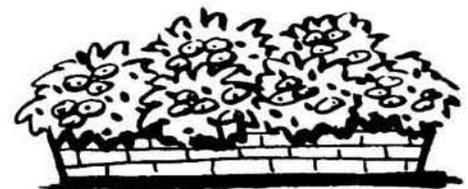
- 1、ある程度の量をきちんと書かなければいけないと思っていた。
- 2、何をどう書いたらいいのかわからない。

3、書いてはいけないことがあると思っていた。

作文だの文集だのと言うと、よほど書くことが好きな生徒でないかぎり構えてしまって書けないのだろう。生徒の作文で一番多かったのは「1月17日午前5時46分…」という書き出しのもので、その時に自分はどうしていたのかをざっと説明するものばかりである。それでもその中に少しずつではあるが独自の体験談や心境が書かれていたものもあり、それを中心にして書き直させた。また、語彙力が乏しいということもあるのだが、体験が想像を超えるものであったため表現する言葉が見つからない生徒も少なくなかった。特に、突然肉親や級友を亡くした者は、普段自分たちが使用している言葉では表現しきれないようだ。そのうえ、学校で書かされる文章は提出しなければならないものであり、教師が読むものである。生徒にしてみれば、「こんなことを書いたらどう思われるだろうか、怒られるのではないか」などと考えてしまうらしい。あまり言いたくないことだけれど書いてみようか。口に出しては言えないけれど文字にしてみようか。これぐらいのことなら書いても何も言われまいだろう。一言いたいことを思いきり書いても受け止めてもらえる。担当教師と生徒の信頼関係も、文章を書かせるうえで重要なことのひとつだと実感した。

この地震は、生徒一人一人に大きな何かを残した。生徒の書いた文章は、非日常の体験とそこからくる様々な心情のため、まとまりきれないものであったが、それゆえに言いたいことが書ききれないほどたくさんあることもよくわかるものであった。文章は稚拙ながらも、何かを訴える力強さ—そんなものを、この文章を読んだ方々は感じ取って下さったのだと思う。

最後に、これまで書いてきたことは、あくまで二年生のことであることを明記したい。というのは、一年生の国語は亡くなられた松村先生を中心に行なわれていたので、少々過程が異なってしまったからである。そのため、一年生は思うように作業を進めることもできない状態だった。今回、この文章を書くにあたって、松村先生ならどのように指導なさったのだろうかと考えてみた。『1・17』にも生徒が書いていたように松村先生は、生徒の文章を大変楽しんで読む先生でいらっしまった。おそらく、一人一人の作文を丁寧に読み、自分が納得するまで細やかに指導をなさったのではないだろうか。『1・17』は、生徒の気持ちが薄れないうちにと大急ぎで作ったものなので、不行き届きな点がたくさんあるのだが、この『1・17』を読んだ感想を松村先生に是非お聞きしたい。



# お別れの会

生徒指導部長 木佐貫 正 博

平成7年2月24日、午前中に卒業式の予行を済ませ、午後から「お別れの会」がもたれた。

震災で亡くなった松村吉成先生、3年生の西島満君、2年生の西島昭次君、大東加奈さん、竹本靖司君、1年生の坂本恵津子さん、南佐枝子さん、松浦誠君の7人の遺影が飾られた体育館舞台の祭壇前に、最前列には遺族の方々、その背後に全校生徒、両袖には全職員、PTAを配して、しめやかな中にも心のこもったお別れの会がもたれたと思う。

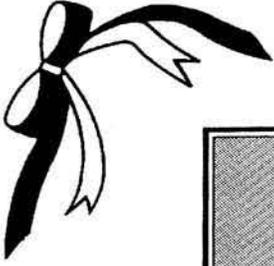
田原教頭の開式の言葉に続いて、亡くなった一人一人の生前の紹介がなされ、黙祷。静まりかえった場内に、藤原校長の追悼の言葉がひびき、遺族の方々が一人一人、花束をたずさえ壇上の遺影に向かった。生徒会長小林稔君が、生徒の書いた亡くなった人たちの思い出の記の中から幾つか選んで、お悔やみの言葉を述べた。PTA会長鈴木さんから追悼の言葉があった。そのあと、全校生徒が、担任の誘導のもと、菊の一枝を手に祭壇に向かった。多少の人の流れの混乱を予期して、教員二人が誘導に立ったが、それも不要なほどに、生徒は整然と動き、その流れの中に、職員もPTAも適時混じって献花をした。葬送の曲が流れるなか、しめやかな、心のこもった時間であったと思う。

準備にあたっては、何度も打合せがもたれた。宗教色を排して、出来るだけ簡素に、名称もいかめしい「合同追悼式」から単に「お別れの会」となった。ご遺族の了解をとり写真の手配をし、遺影にはリボンをかけなかった。祭壇は、翌々日、本校体育館で催される芦屋市の合同追悼式のものを一足先にお借りできることになった。代表献花から全校生徒による献花を、学校長は指示した。菊1000本を用意し、献花台の手配をした。

何よりの我々の不安は、予行のない本番当日の生徒の動きだった。誰にとっても初めてのことで、手順が分からず混乱が起こるのではないか、だらだらと私語に満ちた行列にならないか、菊花はいつ手渡し、献花方法は・・・些細なつまらぬことばかりが頭をよぎった。しかしこれらのことはすべて杞憂に終わった。尊い犠牲をだした事実のもつ重みであったろうか、生徒たちはそれを真摯に受けとめてくれたものと思う。これを記すにあたって、今一度、亡くなられた皆様のご冥福を、お祈りしたいと思う。



献花する生徒たち



## 松村吉成先生を悼む



第2学年主任 倉 芳 博

1995年1月17日、5時46分、突然「ドン」という音にまさに叩き起こされ、続いて激しい横揺れに現実とは思われない、信じられない数秒間を経験した。「阪神大震災」である。この震災で生徒7名と、私達の同僚である松村先生が亡くなられた。松村先生とは、同じ時に本校に転任し、15回生の1年生の担任として、又、16回生の担任として2年間いっしょに仕事をした。

先生は、国語の先生として、生徒の国語力の向上のために一生懸命、授業に補習にとがんばっておられた。生徒に「読書ノート」をつくらせ、毎月その月に読んだ本の感想をノートに書かせて提出させ、それを熱心に読んで細かな感想をノートいっぱい書いて、適切なアドバイスを送り、本を読むことの大切さを生徒に説いておられた。この「読書ノート」のおかげで本を読むことが好きになった、本を読むことの大切を知った、という生徒もたくさん出てくるようになった。読書感想文コンクールの作文提出も熱心に指導され、優秀な成績を残している。担任としても、明るく楽しいクラスをモットーにされ、文化祭や体育祭では、生徒といっしょになって遅くまで劇の練習や作品製作に取り組んでおられた。生徒の面倒見もよく、夏休みを利用してクラスの生徒を家庭訪問されたり、生徒の悩みを聞いて適切なアドバイスを送ったりと熱心にクラス経営され、指導されておられた。

ソフトボール部、剣道部の顧問としてもがんばっておられた。主にソフトボール部の面倒を見ておられたが、夏の暑い中、白い帽子をかぶり熱心にノックバットを振っておられた先生の姿が今でも目に浮かんでくる。ほとんど初心者ばかりの生徒達をボールの投げ方、取り方から教え、試合ができるまでのチームに育てるのは大変だったろうと思う。又、長く剣道をされており、顧問として、また審判としても活躍されていた。本校ではソフトボール部が主であったが、1年間顧問として、また剣道の先輩として、いろいろ適切なアドバイスをもらい、それを指導に生かすことができた。

そんな松村先生が、この大震災で愛する奥さんとともに崩れた建物の下敷きになり亡くなられたとは今でも信じられない。あんなに元気な先生だったのに、という思いがする。釣りが好きで、ちょっとお酒の好きな先生、天国でもお酒をちびちびやりながら、のんびりと釣りをやり、大きなチヌを釣りあげて下さい。

# 弁 当 の 支 給

小 林 正 文

芦屋市役所の庁舎がかなりの損傷で、災害対策本部が本校に移って来た。

そのために、本校の罹災生徒は、救援物資の中から昼の弁当を支給していただくことになった。調査の結果、1、2年生が150食をお願いすることになったが、支給は2月1日の学校再開の日から始まり、これは最後は70食となり3月末の終業式前日まで続けられた。

全国からの救援物資は阪神間の道路が大渋滞なので、その日のうちに届くのは近府県に限られ、たいていは大幅な延着を避けられなかったようだ。

弁当は、始めのうちは質素なものが多く、発砲スチロールの弁当箱に詰めた簡単なもので、時には2日前の硬くなったものもあった。飽食時代に育った若者たちだが、それでも有難かったにちがいない。支給弁当は毎日内容が変わり、おにぎり、フライ、から揚げ、鮭弁当や、白飯に梅干だけのものにカンヅメの日も何日かあった。割箸や缶きりを忘れずに付けてやったり、担当者の苦労はそれなりに大変だった。

ここに2月3日の記録がある。

おにぎり2個、おかず缶詰2個、ウィンナーソーセージ、みかんビン詰め、バナナ。

調達から仕分け作業、生徒への配給は教職員が当たった。なにしろ2月の始めは、職員室の飲料水も大型ポリ容器で、道路を隔てた非常水道まで行くか、グラウンド内の自衛隊の水槽まで汲みに行っていた頃で、授業が始まると先生方にとっては煩わしい雑用であったろう。

校内には、日本商工会議所青年部と若者のボランティアたちが2つの教室に寝泊まりしていた。生徒昇降口に災害対策本部があり、市職員とそういった人々が着荷の搬入、仕分け、発送作業と忙しく働いている所へ行き、弁当の配分をお願いするのであった。

秋たけなわの今振り返れば、ひとつひとつの作業がその頃の授業以上に鮮明に思い浮かぶ。

最後になって恐縮ですが、特別のご配慮をいただいた芦屋市災害対策本部の皆様に感謝申し上げる次第であります。



# 事務室の震災記録

事務長 田平純吉

激震にみまわれた阪神地域において、本校の位置する芦屋市は、死者433人、家屋の全半壊8604件(49.4%)と周辺都市の被害状況と比較しても極めて甚大であった。

本校は、臨海部の埋め立地という条件にあるため、液状化現象や不等沈下によって地盤に多大なダメージがあった。しかし建物については一部に損傷があったものの、学校運営に重大な問題をきたすような致命的な障害が生じなかったのは、不幸中の幸いであった。

そうした中であって、本校を拠点に展開された救援・支援活動や関連事業をかえりみることで、「災害と危機管理」についての考え方の一助としたい。

## (1)自衛隊駐屯基地(1月20日～4月初旬)

①豊川部隊を中心に、校庭に重機を含めて約百台の車両基地と体育館に隊員約千人の部隊が救援基地として駐屯した。

②無線部隊の基地を教室に設置。

## (2)芦屋市災害対策本部物資調達班設置(1月21日～6月下旬)

①芦屋市の福祉部を中心とした救援物資の集積場として、主として生徒昇降口周辺で全国のボランティアと共に、集配業務のセンターとなった。

②連合・JC等の各団体、個人ボランティアの宿泊施設として一部教室が利用された。

## (3)お別れの会(2月24日)

本校生徒7名、教諭1名のお別れの会が全職員・生徒の参加で、本校体育館において実施された。

## (4)市合同慰霊祭会場(2月26日)

芦屋市の主催で市民の犠牲者の追悼式が、皇太子夫妻、土井たか子衆議院議長、復興担当大臣、貝原知事等の臨席を得て本校体育館において実施された。

## (5)仮設住宅用地提供(4月10日)

運動場の東南部分に被災者用仮設住宅用地(39戸分)を提供した。



芦屋市合同慰霊祭

## 本校の施設・設備の被害状況について

主査 安田 幸生

本校の被害状況を一口に言えば、建物、備品類の被害は比較的少なかったが、土地の被害が甚大であったといえる。

本校は埋め立て地に立地しているため、地盤の液状化現象の被害をまともに受けることとなった。

このため、本校敷地には幾条もの亀裂が入り、そこから地底の砂が吹き出していた。

テニスコート付近は埋め立て前の海岸であったことを思わせる貝殻混じりの砂が噴出していた。

この液状化現象のため、本校の敷地は平均で約30センチ地盤が沈下した。

しかも、不思議なことにこの地盤沈下は敷地全体（シーサイドタウン全体かもしれない）を約30センチなめらかに沈降させた。

建物本体は地底を貫き岩盤にしっかりと突き刺さった基礎杭のおかげで、元のレベルを保っている。（といっても、建物本体からでている階段、プール等は基礎の杭がないために沈降、段差の発生、傾斜といった被害がでている。）

土地が沈降し、建物本体が元のレベルで建っていることにより、上下水道に大きな被害が発生した。建物に入る上水道管、また建物から出ている下水道管はすべて切断され、全校で給排水が不可能となってしまった。

この地域では3月中旬に給水が再開されたが、本校の上下水道の仮復旧はその後、2週間の時間を要した。（仮復旧工事では散水系統と体育館への給水系統の一部は工事が大がかりとなること、ライフラインが一応確保されたため仮復旧を断念せざる得なかった）

土地が均等に沈降していたため、地中埋設管は一部を除き、ほぼ正常に機能しているものと推定はされている。（仮復旧後、大きな問題なく使用できている）

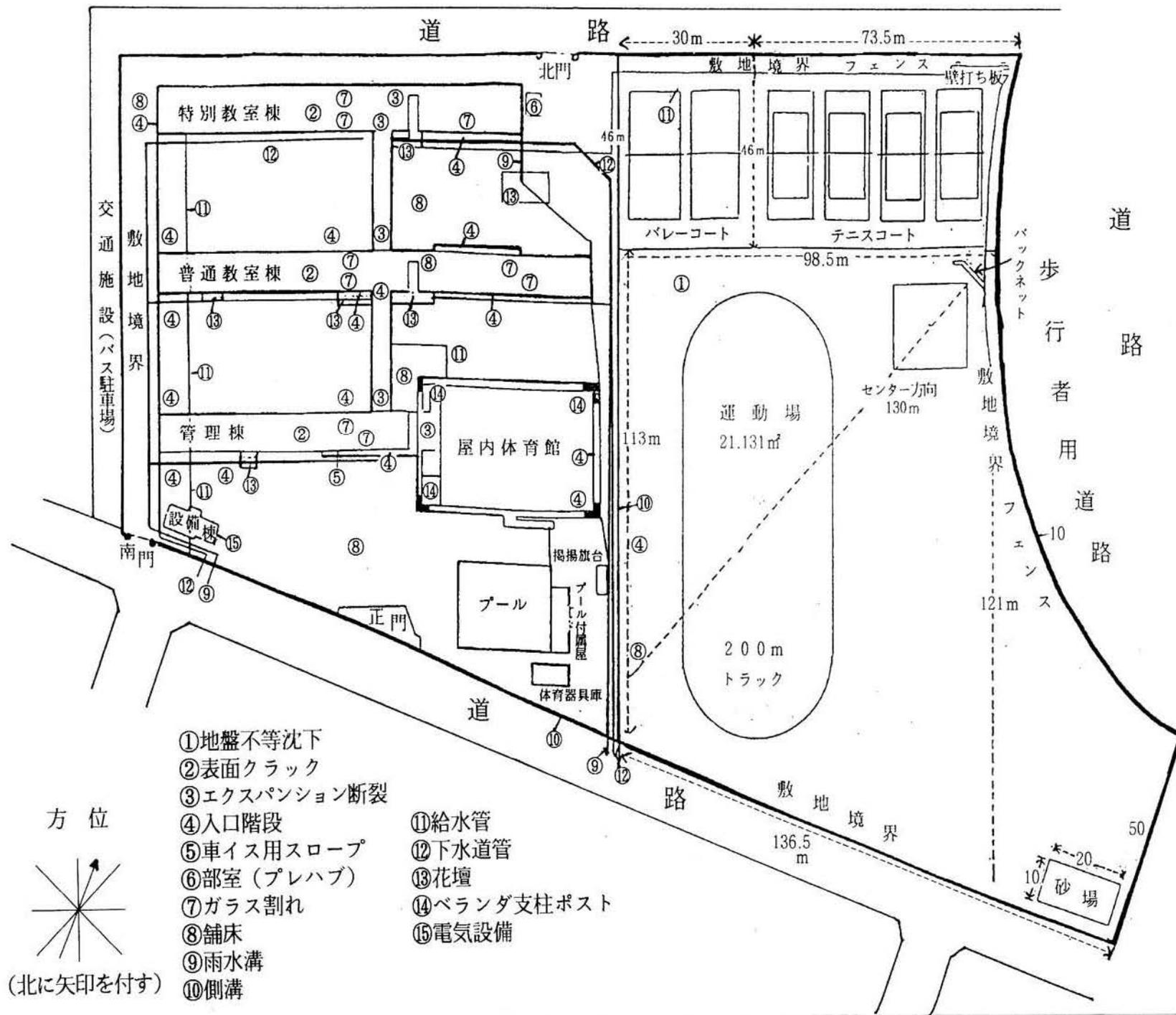
復旧工事では敷地全体で掘削工事が予定されているので、その進捗により新たに被害が確認される可能性はある。

電気も地中のケーブルから建物へと電線が伸びているが、図書室の空調設備への送電線以外は切断されているところはなかった。

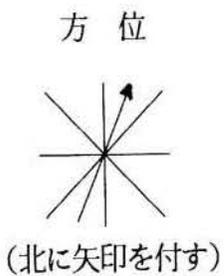
また、ガス管については幸い切断されたところもなく、2月中旬の供給再開とともに使用できた。

10月末現在、運動場の整地が決まり復旧工事も本格的に始まろうとしている。今後、新たに様々な問題が発生すると思いますが、一つ一つ問題を解決していきたい。





- ①地盤不等沈下
- ②表面クラック
- ③エクспанション断裂
- ④入口階段
- ⑤車イス用スロープ
- ⑥部室 (プレハブ)
- ⑦ガラス割れ
- ⑧舗床
- ⑨雨水溝
- ⑩側溝
- ⑪給水管
- ⑫下水道管
- ⑬花壇
- ⑭ベランダ支柱ポスト
- ⑮電気設備



# 「防災計画」に関する一考察

主査 安田 幸生

我々、学校事務職員の研修団体に「県立学校事務職員協会」というものがある。

その団体では、夏に兵庫県教育委員会が主催する事務職員の研修の企画運営を行っている。

今年は「兵庫県南部地震」の後ということがあり、非常災害時の対処についてを中心に研修を行った。事務の仕事には大きく分けて庶務、人事給与、会計、管理（管財）の仕事があるが、私はその中の管理（管財）関係を研修する分科会の企画、運営にあたった。

この分科会では、各学校で作成している「防災計画」の見直しを年間テーマに、夏の研修会をその足がかりとなるよう企画、運営した。

## <研修会の研修議題>

「災害時における対処について」

勤務時間中に阪神・淡路大震災のような災害が発生し、学校が被災するとともに、地域住民の避難所となった。県立学校の事務職員としてどのように対処しますか。

〔事例〕

避難所として安全な施設・設備を提供するために、事務職員として何をしなければなりませんか。

この事例をもとに、「災害発生直後」、「生徒職員避難完了、地域住民学校へ避難開始」、「避難所開設」、「学校再開」の各時点で起こるべき事象や留意事項、またその処理について「生徒・職員」、「施設・設備」、「住民」、「情報」という項目に分けて考察してみた。（別紙「研修のまとめ」参照）

主眼を「施設・設備」におき、避難所運営について考察したため、生徒と職員を同一項目にしたり、二次避難が必要な場合の考察が欠落している。

避難所になった学校のほかに本校のように救援物資の集配所や自衛隊の野営所になったところもあり、すべてを事象を網羅できなかつた。

また、研修時間が四時間ほどだったので、時間が不足し深く考察するまでいられなかつた。

対象をさらに細分化し、さらに深く考察することも今後の課題としてのこっている。

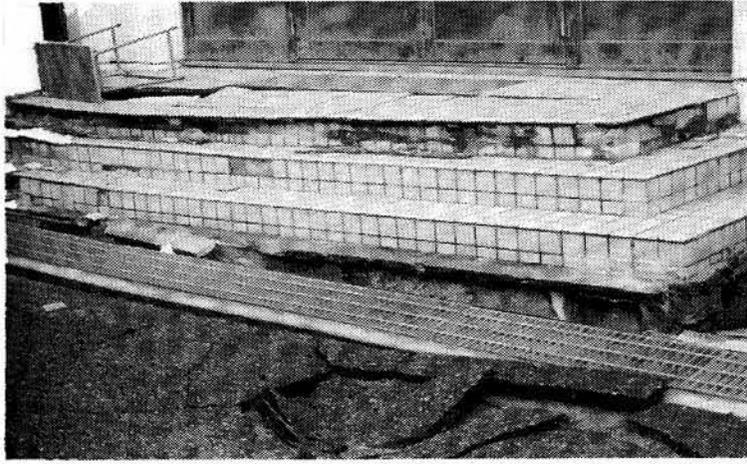
そして様々な立場からの考察もしなければならないが、事務職員の立場でしか考察できていない。

このように様々な問題点はあるが、この研修会に参加した、事務長をはじめ多くの事務職員の知恵が、この「研修のまとめ」には生かされており、これをもとに我々も今後さらに深くこの問題を考え続けようと思っている。

最後になりましたが、この「研修のまとめ」が各学校ですすめられている防災計画の見直しの一考察として各学校、各部署、各々の立場において議論いただけるよう期待いたします。

「研修のまとめ」

	生徒（児童）・職員	施設・設備	住 民	情 報
災害発生直後	<p>避難誘導 パニックの回避 避難路は？ （時間差・分散化） 負傷者の確認 救助</p>	<p>確認 避難路の確保 二次災害の防止 故障、修理箇所の把握 ガス（火気） 灯油等危険物 立入禁止箇所の確認</p>		<p>状況把握（ラジオ等） 災害の規模、状況 学校周辺の状況 非常放送（唯一の校内メディア） 火の始末、危険箇所、わかっているだけの災害状況、行動の的確な指示、あわてないように指示</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・避難路の確保が難しい。</li> <li>・一番安全なのは教室ではないか。</li> <li>・指示があるまで動かない方がいい。</li> <li>・パニック回避のため、現場の指導者に従う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実験中器具の火元の確認</li> <li>・薬品の確認</li> <li>・各種警報装置の作動の確認</li> <li>・危険なものを的確に処理</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・あわてないように指示をすることは大切である。</li> <li>・正確な情報を、わかりやすく適当な間隔をおいて繰り返し伝達する。</li> </ul>
生徒、職員避難完了 住民学校へ避難開始	<p>人員確認 行方不明者、負傷者 負傷者の応急処置 負傷者の状況 緊急・医療機関への連絡 生徒が下校できるか判断 職員緊急組織（防災組織） 家族の安否確認</p>	<p>ライフラインの状況確認・確保 被害状況の詳細調査 立入禁止箇所の明示のり面等の調査 被害箇所の写真 危険箇所の専門家への調査依頼</p>	<p>収容の決定 建物は安全か 収容数 食糧、水、生活物資の確保 収容場所の決定、誘導 避難住民－公平、平等</p>	<p>県教委等関係機関との連絡（被害状況） 電話→かかりにくい 放送設備の確保（電源、ハンドマイク等） 掲示板（連絡用）の設置 ライフライン、食糧、水等の状況 交通機関の運行状況 言葉づかいに気をつけ、丁寧な対応</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人命に関わることを優先して対処する。</li> <li>・日頃から緊急組織を明確にしておく必要がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校が安全か判断が重要である。</li> <li>・避難所としてどこに収容するか判断する。収容場所の決定の際、管理上、重要な場所は確保する。混乱が収拾したら、速やかに関係機関に運営を委ねられるようにする。</li> <li>・校舎の安全確認が終わるまで、校舎内に入れない。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・今回は電話回線がパンクしてしまった。緊急ダイヤルの設置 携帯電話の活用 FAXを非常時の専用回線にしている自治体もある。</li> </ul>
避難所開設	<p>職員組織の確立（避難所運営） 指揮系統の明確化 公平、平等の原則 避難所の自立を促す運営 避難住民との協力 一部生徒が帰宅できない場合 一般避難者と分離 家族の状況伝達 家族の元へ帰す方法</p>	<p>校舎の案内図 避難場所 立入禁止区域 管理部門 衛生の確保 備品等の持出、破損管理 弁償（不法行為）</p>	<p>名簿の作成 自治組織の結成 自主的 第三者が促す 自主運営の促進（役割の明確化） 責任者 避難住民との良好なコミュニケーションの確立 苦情への対応</p>	<p>情報の収集・整理 情報の伝達 デマの防止 公平、正確な伝達 関係機関との連絡 市町災害対策本部 ボランティア等 社会的弱者の把握と配慮 ・高齢者・病弱者・乳幼児 ・障害者・妊産婦・外国人</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・統一した組織づくりが、公平平等につながる。</li> <li>・渉外係と自治組織との関係が重要。</li> <li>・今回、生徒の安否確認、転校等に関する事務手続きについて避難所に出向き、張紙やプリントを配布した例がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・職員・生徒・避難住民が協力して環境整備を行うことが重要。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・住民に対しては公平・平等が原則</li> <li>・今回、自治組織ができなかった避難所は、後々まで問題が残った。</li> <li>・できること、できないことをはっきりさせる。</li> <li>・苦情等もとにかく聞くことが大切。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・放送と張り紙だけでは伝わらなかった。→二重三重に連絡する必要がある。</li> <li>・避難者に本当に必要な情報を提供する。</li> <li>・近隣の避難所どうしの名簿の交換をするべきだった。</li> </ul>
授業再開	<p>教科書、学用品の紛失状況 勤務可能な教職員の状況</p>	<p>ライフラインの復旧状況 教室の確保 教材・教具、備品等の整備</p>	<p>避難場所の移動</p>	<p>仮設住宅棟の募集状況 通学路等の状況 授業再開の連絡</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内で、授業の再開に向けてしっかりと計画を立てておく必要がある。 始業時間 授業時間数 長期休業の短縮 避難所からの通学者の昼食</li> <li>・授業料免除・奨学金事務</li> <li>・転編入（出）、一時受入等</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・普通教室に避難住民を受け入れたため、授業再開が困難になったケースがあった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・当初からの計画がうまくできていればスムーズに再開できる。</li> <li>・個別に話をして、移動していただく。</li> </ul>	



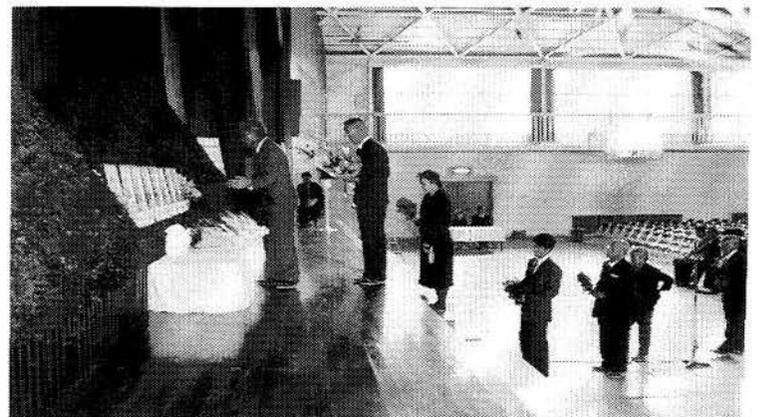
校務員室前



ボランティアのみなさん



2号館東側



「お別れの会」

次の2編の生徒作品は兵庫県が本校の国際文化科の生徒に英語訳を依頼して作成した「震災なんかに負けない」からとったものです。

## 「ファイト」

県立芦屋南高等学校 3年8組 高田 和泉

背中を突き上げるような揺れで目が覚め、ガラスの碎ける音と柱の裂ける音で頭が醒めた。何十秒、何分とも思える激しく長い揺れが収まった後、父の叫ぶ声に、声にもならない声を発した。外の冷気が部屋に潜り込んで自分の体に触れた時、私の恐怖は極限になった。散乱したガラスを裸足で踏みながら、両親の寝室へ行った。階段から下りようと思うが、三段目から下は既に瓦礫に埋まっていた。南側のベランダづたいに逃げ道を探し、近くの非常階段からやっとの思いで地面に足をつくことが出来た。表に回って、真っ白な頭で私が見たものは、一階が既に無く、二階が隣の家に覆いかぶさる様に傾いている我が家だった。この家で過ごしてきた十年間の思い出や感慨が、音を立てて崩れていくように思えた。辺りを見渡すと、隣の家も、向かいの家も、皆瓦礫と化している。パジャマに毛布をひっかけたまま小学校の校庭に行ったが、夜が明けるとの一時間は、私の人生の中で最も長い一時間であった。自然と周りに人が集まり、低い声でしゃべり始めた。話さなければ、気が狂いそうな一時間であった。

夜が明けて、皆はそれぞれの家に戻り始めた。近くの家では、その家族と思われる人が、崩れた家の瓦礫を掘りおこしている。そのうちに、畳にのせられ毛布をかぶせられた人が出てきた。人間として、側にかけ寄って、畳の端を持つ勇気がほしかったが、私の足は凍んで、ただ茫然と見送るだけであった。車庫から取り出せた父の車の中で、しばらく寝た。意識はさめたままであったが、今ある光景が夢である事を祈った。目が覚めて現実に引き戻されても、車から外にでる恐怖に打ち勝てなかった。家から取り出せた2～3枚の洋服にやっと着替え、父は車を出発させた。

"FIGHT!"

Ashiya Minami High School

Izumi Takada

A big shaking, thrusting my back, woke me up and my head was cleared by the sound of shattered glass and split pillars. After the violent and long shaking had finished, I tried to respond to my father's calling, but no sound would come out. When I began to feel the chilly air in my room, my terror reached its limits. Stepping on scattered glass, I went to my parents' bed room. Though I tried to go downstairs, I couldn't find the 4th step to the stairs, because it had been completely destroyed. We searched for a way of escape along the veranda facing the south and managed to get to the ground by going down the emergency stairs. When we came around to the front, what I saw without understanding it was my house with the 1st floor destroyed and the 2nd floor leaning against the next house. I remembered many memories of our life in this house for 10 years and felt as though my emotions were also collapsing with our home. When I looked around, I found that not only the next house but all of the buildings across the street had collapsed. We went to the elementary school schoolyard wearing only blankets and our pajamas and we stayed there for an hour till dawn. It was the longest hour of my life. Naturally people gathered around and they began to talk in low, small voices. If we hadn't talked with each other, we would have gone crazy.

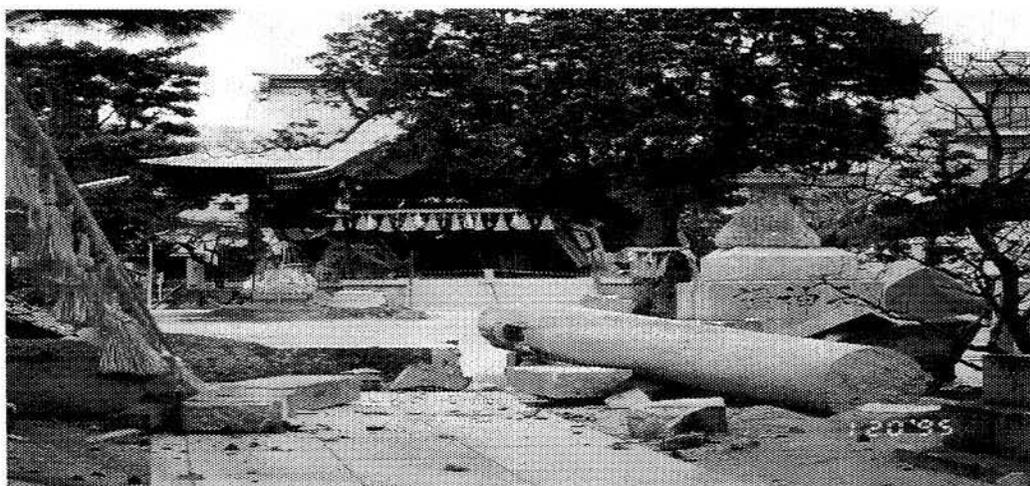
After the sun rose, everyone began to go back to their own homes. In my neighbourhood, one man dug his family out of their destroyed house. Then a man who was covered with a blanket lying a tatami mat was carried out. As a human being, I wanted to have the courage to hold the edge of the tatami but my knees cowered and I could only stand wondering what to do. As we could take the family car out of the garage, I took a nap in it for a while. I prayed for this disaster to be only on bad dream. When I woke up and returned to reality, I couldn't overcome the terror that I felt when I got out of the car.

I managed to change into a few clothes which I was able to get out of my

夕暮れが近くなって、祖父の家にたどり着き、親戚の人達が集まって来た時、私は初めて泣いた。この長い一日の後で、初めて人間としての感情を持ちえた瞬間であったと、今思う。

震災という、極限状況の中で、自らの弱い面ばかりが出て、自分自身がいかに無力な存在であるかを感じる事がよくある。生きてきたのは自分自身の力によってではなく、私を取り巻く周囲の人に生かされてきたことを意識する。この震災を通して得た、周りの人々とのつながりや触れ合いが、私の精神をさらに向上させてくれる様な経験となったにちがいないと思う。

毎朝、阪神電車の車窓から、瓦礫となった家々を見る。今までは気にも止めなかった家々にも、この一つの大きな震災を通じて、人と人とのつながりや触れ合いを共有でき得る人々が住んでいると思うと、その家に住む人々がとても近い存在に思えて、思わず「ファイト」と小声で叫んでしまう。



芦屋 打出神社

house, and we drove away in the car. After dark, we arrived at my grandfather's house. I didn't cry until my relation gathered. After a long long day, it was the only moment I was able to express my feelings.

Under the strained situation of the earthquake, nothing but my weak points appeared, and I often felt how powerless an existence I was living. I recognized that my life didn't depend on myself but I was dependant on everybody around me.

I am convinced that through this experience I have learned that the relationships between people which I formed in this calamity will improve my mind.

Every morning, I see many destroyed houses from the windows of the Hanshin train. I think there are many people who share my feelings, so I can feel their presence very close to me and I say "Fight" with a small voice, unconsciously.

Translated by herself

この地震で皆  
多くのものを失った  
失った物は様々だけど  
人の命を失うことが一番悲しい

僕は母を亡くした  
何だか心にぽっかりと穴が空いた思いだ  
どんな励ましや慰めの言葉でも  
塞がりそうにない

母が喜んでくれるような  
親孝行というものをした覚えがない  
いつも困らせてばかりいた  
一番悔しいことだ

これからは父に対して  
満足のいく親孝行をしたい  
精一杯勉強して学校に通うことで  
母にできなかった親孝行をしたい

住居も変わってほっとしているが  
心は悲しみで一杯だ  
だけど悲しんでばかりいられない  
だからなるべく表には出さない

So much was taken from everyone in the quake  
because there are so many, what was lost will vary  
but what hurts more than anything else  
is losing a human being's life

I lost my mother  
I feel as though my heart were hollow  
as though there were a hole  
and nothing said seems to fill that hole  
however encouraging it may be

I don't recall being a dutiful son  
that my mother would have appreciated  
I did nothing but trouble her day and night  
which I now regret the most

What I couldn't do for my mother  
I plan to do for dad  
and by doing my best in going to school  
I'd like to be  
the dutiful son my mother never got to see

I feel relieved to have a new home  
yet inside I am still full of sorrow  
but I know I can't remain like this  
so I try my best not to show it

地震が起きて一ヵ月が過ぎた  
初めて三宮から電車に乗れた  
街も徐々に復興し始めている  
だけど僕の心は復興しそうもない

この出来事をいち早く忘れない  
でも忘れてはいけないという気持ちもある・・・  
やっぱりこれからは  
この惨事や母のことを思い生きていたい

8月5日付 朝日新聞

## 児童・生徒の震災体験作文や詩

# 海外の人たちの心打つ

県が救援物資の  
礼状に添え送る  
**仏などから返事**

小学生から高校生までの子どもたちが見た阪神大震災を記録しようと、県教委が、震災直後に作られた作文や詩などを「震災なんかに負けない」として一冊の文集にまとめた。生きている喜びや亡くなった人への悲しみなどがつづられている。海外から来た救援物資や励ましの便りに対する知事からの礼状に添えたところ、「感動した」との返事が来ている。

## 県立芦屋南高校生が作品英訳

県教委によると、震災で亡くなった児童、生徒は合わせて三百十八人。八十八人が孤児に、二百八十六人が

孤児になった。この大きな被害に対して、海外からも多くの援助が寄せられた。県の調べで

は、五月ごろまでにアメリカ、ロシア、ブラジルなど五十カ国から二百件を超える救援物資が送られてき

た。お見舞いの手紙も百通を超えた。

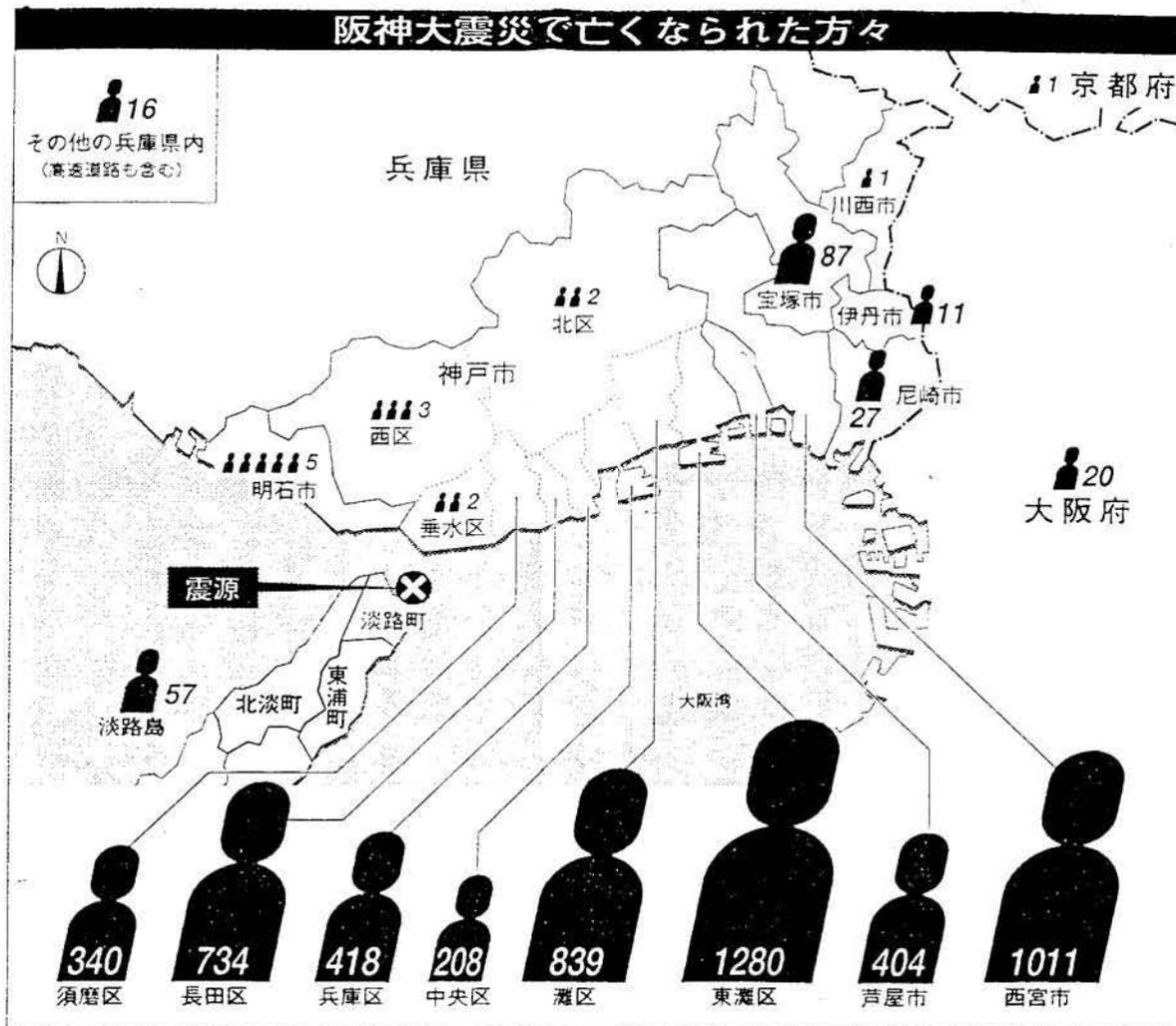
県は、礼状に添えて、子どもたちが被災体験をつづった作文集を贈ることを企画。県教委が中心になって編集をした。

神戸市のほか、西宮市や芦屋市などの教育委員会を通じて、生徒らが書いた作文を募集し、寄せられた約三百編の中から十三編を選んだ。外国人に読んでもらうために県立芦屋南高校の生徒が英訳し、日本語文の

One month has passed since the disaster  
 and I ride the train from Sannomiya  
 for the first time since the quake  
 the town is getting better  
 but I know my heart - never will

All I want is to forget what has happened  
 and at the same time I feel that I shouldn't  
 so from today I am proud to say  
 that I will live my life  
 with this tragedy and my mother  
 forever in my heart

Translated by Shino Amae



3月5日 朝日新聞

3月4日現在

# 私たちの非常時生活アイデア集

所 崎 明 雄

兵庫県南部淡路大震災の直後、電気・ガス・水道が止まり、それらが復旧されるまでかなりの日数を要した。常日頃、その有難みを実感することの薄いこれらライフラインが止まった時、どのように知恵を絞って震災後の不自由な生活を乗り越えてきたか、全校生徒に問いかけてみた。この試みは、震災の恐ろしかったこと・辛かったことに目を向けるものではなく、非常事態に直面した時の生活のアイデアを紹介してもらうことに、ねらいがあった。

この非常時生活のアイデアの中で、最も多かった回答は、やはり水廻りについてのものと、それに関連するトイレの問題であった。以下、列記すると、

『風呂の浴槽にもらってきた水を溜めて、洗顔や食器洗い・水洗トイレに使った。』

『ポリバケツ、段ボールの箱、プラスチックの衣装ケース等にビニール袋を敷いて水を溜めた。』

『風呂に入る時は、熱帯魚用のヒーターで湯を温めた。』

『近くの川に水を汲みにいってトイレで使った。』

『トイレのタンクの中にペットボトルを沈めて節水した。』

『トイレは、一回では流さなかった。』

『使用済みトイレトペーパーは、流さずにゴミ袋に捨てた。』

など、水をいかに有効に節水しながら利用するかという点に力が注がれているかが分かる。

次に、食生活関係の回答について列記すると、

『洗わなくて済むように食器にラップをかけて使った。』

『使った食器は水で洗わずにティッシュペーパーで拭いた。』

『紙コップ・紙皿・カップ麺の容器を食器代わりに使用した。』

『食べられる時に思いきり食べた。』

『避難所でもらったおにぎりで雑炊を作った。』

など、主に食事の後の食器の処置について工夫がなされており、ここでも貴重な水の有効利用に注意が払われている様子が窺える。

また、震災の教訓を生かした、防災対策としての回答を以下に列記してみると、

『枕許に懐中電灯と衣服と靴を揃えておくようにした。』

『震災後、しばらくの間、普段着て寝た。』

『貴重品や非常食や薬品をリュックに詰めてすぐに目に付く所に置いておく。』

『高い所に物を置かないようにした。』

『筆筒と天井の間に雑誌や新聞を詰めて固定した。』

『窓ガラスが割れて飛び散らないようにフィルムを貼った。』

『上下に分かれる筆筒は二つに分けて置いた。』

『ガラスや食器の破片が散らばっているので、床に布団を敷き詰めた。』

となっており、家の中で直接身の危険に遭遇した事や、地震の直後、次の行動を起こすに際して不便を感じた事に対する提案がなされている。

次に、“行動派”と言えそうな人たちの動きを見てみると、以下のものが挙げられる。

『とにかく避難所に行ってみる。行けば何かもらえる。』

『何もすることが無い時は、自転車で街中を廻って情報を集める。』

『近所の人と協力してことに当たる。協力すれば得ることがある。』

『壊れた家の廃材で、乾燥しているものを集めてきて暖をとった。』

『壊れた肉屋の肉を失敬してしまった。』

『コンビニへ行ったら、好きな物を持って行っていいと言われたので、沢山持って帰った。』

非常時の事でもあり、許してあげてほしい点も有るが、なかなか強かで頼もしくさえ感じられるのではないだろうか。

ここまで、当初のねらいとは若干くい違う回答が列んできたが、やはり、苦しい被災生活をおくる中で、“非常時生活のアイデア”などと、悠長なことを言うてはいただけなかった状況がひしひしと伝わってくる。しかし、中にはこの試みのねらい通り“非常時生活のアイデア”として紹介できるものも幾つかあった。

『炊飯器でお湯を沸かした。』

『ホットプレートで調理をしたり、温かいおしぼりを作った。』

『アルミホイルで食器を作った。』

『食器を洗わなくて済むようにラップをかけて使った。』

『段ボール箱にビニールを敷いて、水を溜めた。』

『懐中電灯は、天井から吊すより、床に置いて上に向けた方が部屋中に明かりが届く。』

ここでは、特に気を引かれたものを挙げたが、他にも「なるほど」と思えるものが多数あった。

当初の心積もりは、非常時生活のアイデアを紹介してもらうことであった。しかし、返ってきた回答を見てみると、震災の悲惨さ・被災生活の苦しさから離れるどころか、むしろその部分を直視した上で、当時の生活について、実にあっけらかんとした様子で回答している。わざわざ怖ろしかったことや辛かったことを切り離れた試みを考えなくても、生徒達は、被災時の苦労を自分の中できっちりと昇華させているかに見える。これは、『喉元過ぎれば…』の類ではなく、被災体験を成長の糧にして、次のステップに向かって歩き始めている証であろう。

しかし、全校生880名の内、回答者数は374名であり、半数に満たない。避難所の生活について触れているものも極めて少なかった。無回答の理由として、「特にアイデアと呼べるものがなかった」、「思い出したくない・触れられたくない気持ちが強く残っている」、という二つが考えられるが、回答されたものの内容から判断しても、後者が理由であるという人が多い事は想像に難くない。全体像として捉える時、まだまだ、何らかの形で心のケアが必要とされている状況が読みとれる。

# The Hanshin-Awaji Earthquake

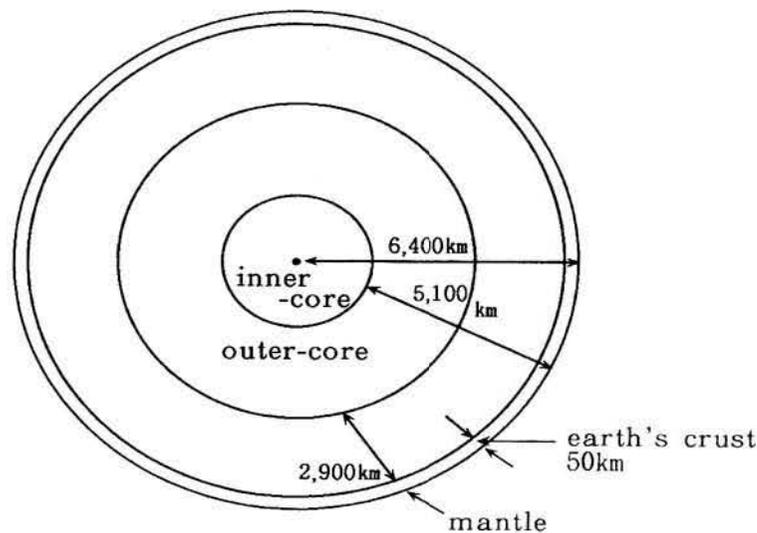
Chikage Nakabayashi

Japan is located on the well-known earthquake belt. The Japanese have experienced many enormous earthquakes.

At first, I'll talk about the outline of the crustal movements called the plate tectonics.

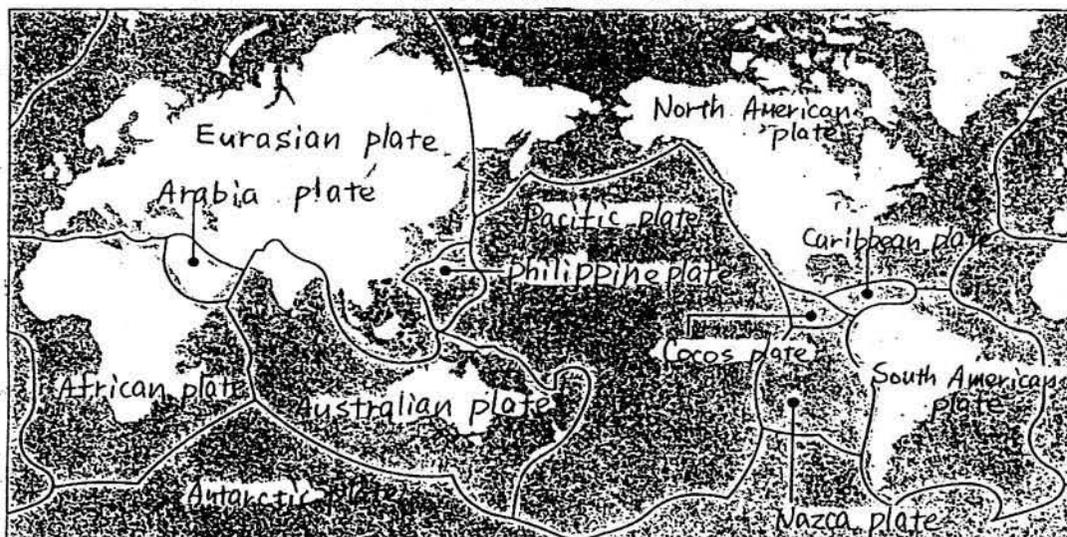
Shown in Fig.1, the inside of the earth is, you know, not uniform but consists of several parts. From inside, they are called the inner-core, the outer-core, the mantle, and the crust. The inner-core is liquid and though the mantle is solid, it is moving slowly just like liquid.

Fig. 1 Inner structure of the earth



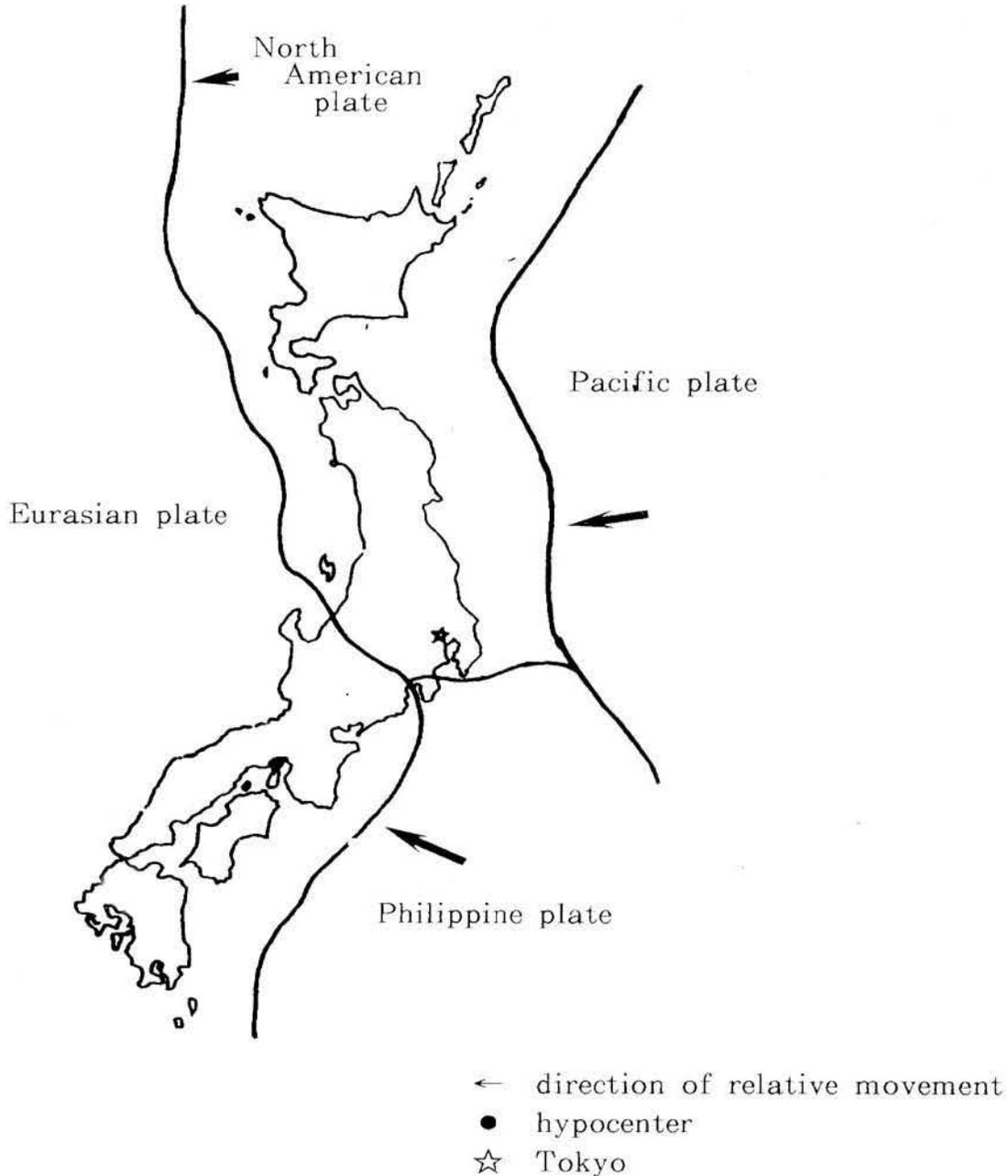
Though the crust is often compared to the peel of the earth, it is not a continuous layer of rock. The earth's crust is divided into many parts called "tectonic plates". It is known that tectonic plates move several cms a year. Of course, these movements are influenced by the core and the mantle, today, I don't have enough time to make the deeper explanation. Fig.2 is the world map showing tectonic plates. Not only continents, but also the floors of the oceans are the parts of the plates.

Fig. 2 「地球大紀行」第3巻 日本放送出版協会より改



Though North American continent is included in one plate called North American Plate, Japan, which is a small archipelago, is located on the area where four tectonic plates collide each other. Fig.3 is showing it.

Fig. 3 The Japanese archipelago and the Plates



朝日新聞 震災1カ月特集 (95. 2.17) より改

Because tectonic plates move very slowly, several cms a year, we cannot sense their movements. But the plates are so huge that the edge of the earth's crust is often broken by the pressure produced by the collision between two plates. These actions influence us as earthquakes and volcanic activity. At the same time, they make deformations of stratum, which is called "fault". Especially, it is called the "active fault" which has a strong possibility

of moving again in the near future. For example, the famous San Andreas Fault in California, which caused the LomaPrieta Earthquake in 1989 and the Northridge Quake in 1993, is a great active fault. It runs for more than 1000kms from north of San Francisco to Mexico. The San Andreas Fault is the boundary of two continentsize plates, the North American plate and the Pacific Plate. The Pacific Plate is moving toward north against the North American one and, they say, the relative velocity is about 8 cms a year. So, at the San Andreas Fault, enormous pressure which causes earthquakes is constantly produced. At the same time, the enormous pressure makes many small active faults around the San Andreas.

In the Japanese archipelago where four tectonic plates collide each other, there are many active faults. They say the number of them is more than 2000. Recently, The Sakhalin Earthquake broke out in the Far East in Russia, which was also a disaster. It was also resulted from the same movement of these plates.

Now, I'll talk about the earthquake of this time which is named The Hanshin-Awaji Earthquake. Fig.4 is showing the area near the hypocenter. The hypocenter is 14km under the north end of the Awajishima. The small island is the Awajishima, and the other side is called The Hanshin area including many cities, Kobe, Ashiya, Nishinomiya and so on. Especially Kobe is the sixth largest city in Japan, whose population is more than 1.5 million.

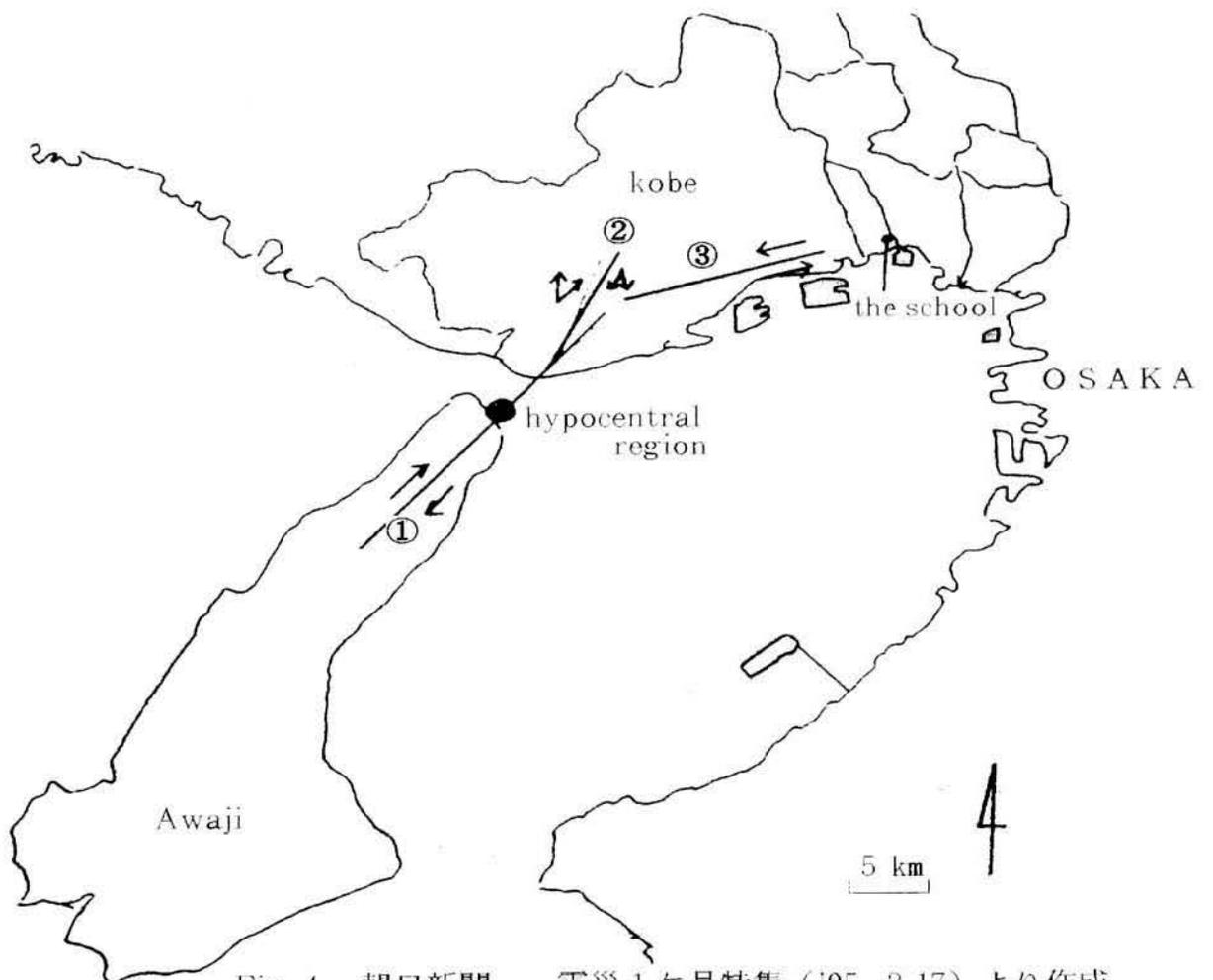


Fig. 4 朝日新聞 震災1ヶ月特集 ('95. 2.17) より作成

In this quake, more than 5,500 people died, 35,000 were injured, and 160 thousand houses and buildings collapsed. I suppose you've heard that the elevated expressway called The Han shin-Kosoku also collapsed, and that many fires broke out.

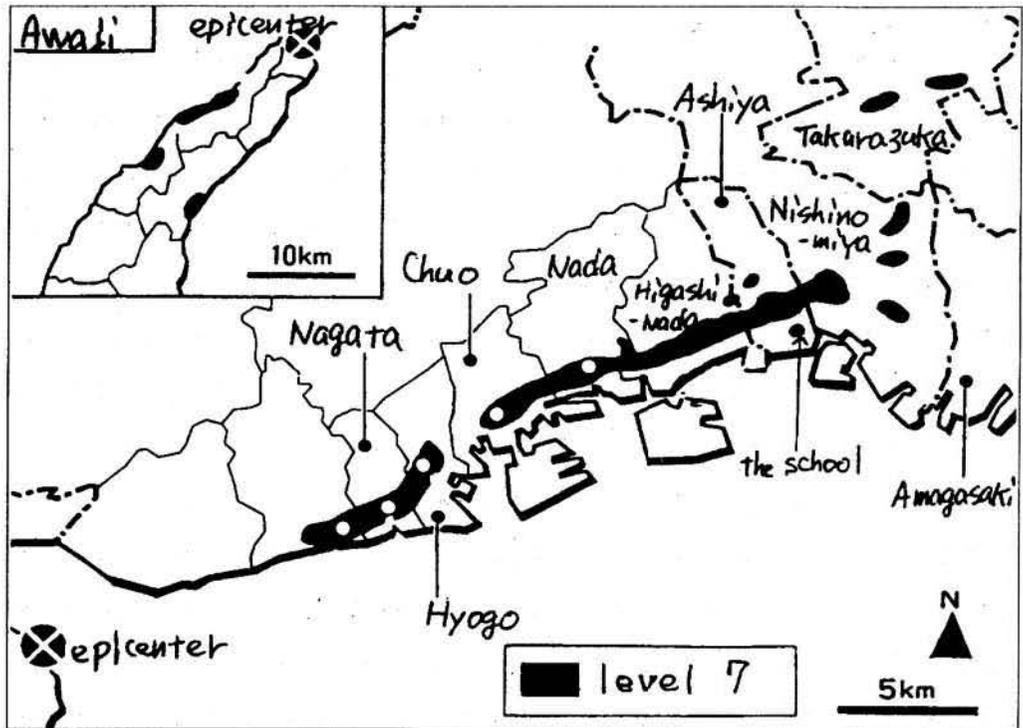
All the active faults that cause the quake have not been found completely. So we must wait for further investigation. I'm talking about only the facts which seismologists have announced. Three lines on the map are the active faults which are suspected to have moved.

It is obvious that ① moved at first and they suppose that other two active faults moved one after another. ①, which is named the Nojima Danso, has appeared on the surface of the earth this time. They say the sides of the fault shifted against each other 2 to 3 meters.

Other two faults are only suspected, not found. They were moved by the pressure produced by the collision between the Eurasian Plate and the Pacific Plate.

Though the pressure is continuously produced, when it rises over the limit, a crustal movement occurs like this. Next, please look at Fig.5 showing the seismic intensity this time.

Fig. 5 「阪神大震災全記録」より改



seismic intensity	extent of tremor
0	only seismograph can sense a tremor
I	people who are resting and pay attention to earthquake can sense a tremor
II	people can sense a tremor such as doors and windows slightly tremble
III	houses slightly tremble suspended articles shake violently
IV	houses shake violently, water spills from a vessel even walking people can sense a tremor
V	walls are cracked, chimnies are broken such as tombstones collapse
VI	less than 30% houses collapse landslip, groundfissure appear many people cannot stand
VII	more than 30% houses collapse landslip, groundfissure, fault appear

And the table shows the meaning of the seismic intensity, whose scale is Japanese own one, not international. The reason why this belt was damaged more than other areas was is that it is neighboring on the active faults suspected to have triggered the quake, and that the seismic wave was reflected and amplified by the Rokko Mountains which lies on the north of the Hanshin area and is made of hard rock.

We can see the zone of scale 7 in Nishinomiya and Takarazuka which are far from the active faults. This is because the violent tremor was transmitted there and because, on the new soft stratum which is called the alluvium, buildings shake more violently, so the buildings in the particular zone were especially destroyed.

Though the quake went on for less than 20 seconds, many buildings fell down in the zone of scale 6 and 7, not only wooden houses but also reinforced concrete buildings. Because of collapse of buildings and fires which broke out after the quake, many people lost their lives.

And then we lost a teacher and 7 students of this school. A boy-student of them was a classmate of the students with you now.

This very short lecture I've given is only the outline of the disaster. You will talk about that with the students from now. I'd like you, who have come here all the way from the US, to know what we saw, how we felt, and the way how we are struggling to recover.

I believe no one knows how precious the routine everyday-life is better than they do.

## 日本語原稿：「阪神淡路大震災」

中 林 千 景

日本は、世界でも有数の火山活動及び地震の多発地帯に存在しています。最初に少しこの理由について触れておこうとおもいます。

御存知のように、地球の内部は一樣ではありません。図1のように、いくつかの部分に分かれています。内側から順に、内核・外核・マントル・地殻と呼ばれています。このうち、地球表面をおおっている地殻は、地球の皮のように言われますが、実はひとつづきの岩塊ではなく、プレートと呼ばれるいくつかの部分に分かれており、年に数cmづつ移動していることがわかっています。もちろん地球の他の部分との関係でこのような現象が起こるのですが、詳しい説明は今日は時間の関係ですることはできません。

図2が、地球上を覆っているプレートを表した図です。大陸はもちろん、海洋底もプレートの一部です。北アメリカ大陸はほとんどが一枚のプレートに含まれていますが、日本は小さな島国であるにもかかわらず、4枚のプレートが衝突し合う所に存在しています。図3を見ていただければおわかりかと思えます。

プレートの動きは年に数cmという非常にゆっくりとしたスピードであるため、私たちはそれを直接感じることはできません。しかしプレートは非常に巨大な岩塊ですから、プレートどうしが接している地域では、しばしばプレートどうしの摩擦やぶつかりあいによる圧力によって地殻が壊れます。

その活動は、地震となって私たち人間にも影響を与え、断層とよばれる地層のズレを引き起こします。断層のうち、これからまた動く可能性のある断層を特に活断層と言います。アメリカ大陸西端にあるサンアンドレアス断層は、ロマプリータ地震などを起こしたことで有名な活断層です。

あの断層も2つのプレートの境目にあたっています。あそこは、巨大な2つのプレート、すなわち太平洋プレートと北アメリカプレートとが南北方向にすれ違う場所であり、その摩擦で地殻が歪んだり壊れたりしているのです。

このように、プレートどうしが接しているところでは、頻繁に地殻変動が引き起こされるのですが、私たちの住む日本列島では、長い間4つものプレートがそれぞれの方向に運動し、ぶつかりあってきたため、この小さな島国に存在する活断層の数は2000をこえるといわれています。つい先日、大惨事となったロシアのサハリン地震も、日本に影響を与えているプレート運動によって引き起こされたものです。

さて、今回の阪神淡路大震災についてですが、図6が阪神淡路地区を表す地図です。この地域は、150万人を超える人々が生活する大都市神戸を中心とする地域ですが、地震による直接の死者は5500人以上、負傷者35000以上、家屋損壊16万世帯以上の被害を出しました。阪神高速とよばれる高架の高速道路が倒壊したり、広範囲にわたる火災が発生した事もみなさんの耳には届いていると思います。

今回の地震になった活断層とその動きについては未だ完全に解明されていません。専門家の研究を待たねばならないところです。そのため今日の説明は、何人かの専門家たちがそれぞれに発表している説の中から、ほぼ間違いのないであろうと考えられ、新聞などで報道されていることを中心に概略を

お話ししたいと思います。図6の3本の線は、今回動いたといわれている活断層を表しています。被害の状況からみて、淡路島北部の活断層①、「野島断層」が最初に動き、その後2つの異なる断層②③が次々に動いた事はほぼ間違いないようです。野島断層は、今回の地震によって、地表面に現れ、その両側は互いに2～3m動いたことがわかりました。他の2つの断層は、推定されているものの、見つかってはいません。これらの断層は、阪神地区が存在しているユーラシアプレートに向かって、東からフィリピンプレートがもぐりこんできているために生じた活断層です。この地域にも日本の各地と同じように、地盤のズレすなわち断層が無数に存在しています。今回の地震もフィリピンプレートの衝突によって生じている圧力が限界に達し、地盤を動かしたと考えてよいでしょう。

次にこの地域の震度を表す図を見てください。(図7) ●がみなさんが今おられる芦屋南高校の位置です。横に記されているのが、震度階の表すおおよその意味です。この震度階は、日本独自の基準によるもので、他国の基準とは異なっています。

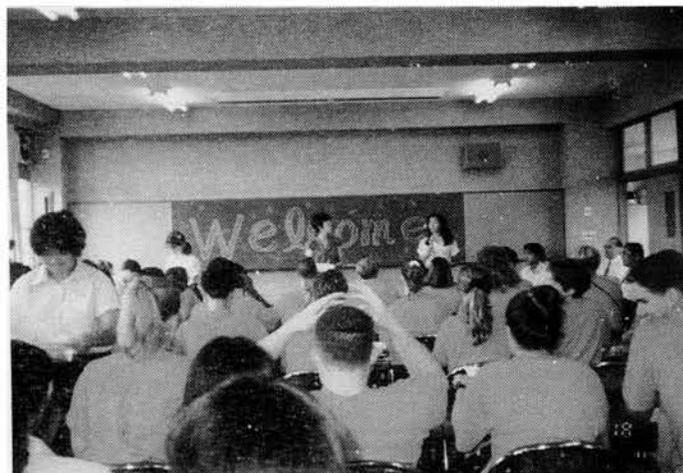
この地域に被害が集中した理由として、まず最初に地震を起こした活断層の周囲であることと、第二には地震波が北部にある六甲山地で反射・増幅したためではないかということが考えられています。

また、活断層から東北へ離れた西宮市・宝塚市にも一部震度7の地域がみられるのですが、これは断層が動いた事によって引き起こされた激しい揺れが地面を伝わったためです。また、一部の地区に家屋の倒壊が集中した理由は、これらの地区が比較的新しい時期の軟弱な地層すなわち沖積層上に存在していたためだといわれています。

震度6及び7の地区では、非常に多くの建築物が倒壊しました。木造家屋のみならず鉄筋コンクリートのビルも破壊されたのです。建物の倒壊とその後起こった火災によって多くの人々が命を失いました。私たちの芦屋南高校においても7人の生徒と一人の教師を失うことになってしまいました。今、みなさんと一緒にいる2年生8組の生徒も大切な旧友を一人亡くしています。私が今、わずかの時間のうちにお話しできたことは、今回の震災のほんの概略です。合衆国からわざわざこの被災地に足を運んで下さったみなさんには、この後、あなたたちと同年代の高校生達が、何を見、何を感じ、どのように生活を取り戻そうとしてきたかを知ってもらいたいと思います。彼らほど、平凡で退屈に見える日常生活が、どれほど貴重なものであったかを知っている者はないと思うからです。

### 今回の授業について：

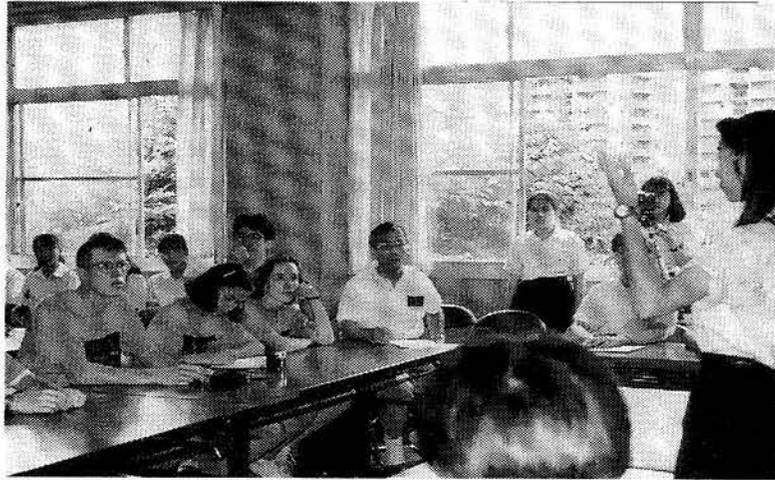
今回の授業は、AIUによる国際交流プログラムによって来日したアメリカ合衆国の高校生20名余りに対して行ったものです。彼らが、震災の被災地を訪れることを強く希望したために本校への訪問が実現したということで、2年8組の生徒達との交流会の前に簡単なブリーフィングとして行ったわけです。専門外の内容を英語で話すという大胆極まり無い提案に乗ってしまったのは、生来の大胆な性格



の成さしめるものだとしか言いようがなく、今回活字になって残るということで全く汗顔の至りです。  
軽い気持ちで読んでいただければ幸いです。

また、先に日本語で原稿を作ってから、授業用に英訳しましたが、細部で英文・和文の異なる箇所があります。御容赦下さい。

- 参考 「報道写真全記録・阪神大震災」 朝日新聞社  
「阪神大震災全記録」 神戸新聞社  
「地球大紀行」第3巻 日本放送出版協会  
「大陸は移動する」ブルーバックス 講談社  
「地形学辞典」 二宮書店  
朝日新聞 震災1カ月特集 1995・2・17 他  
TIME 1995・1・30



7月18日 米国高校生交流プログラム

# 私の体験

本校の職員の被災事情を手記にまとめてもらった。

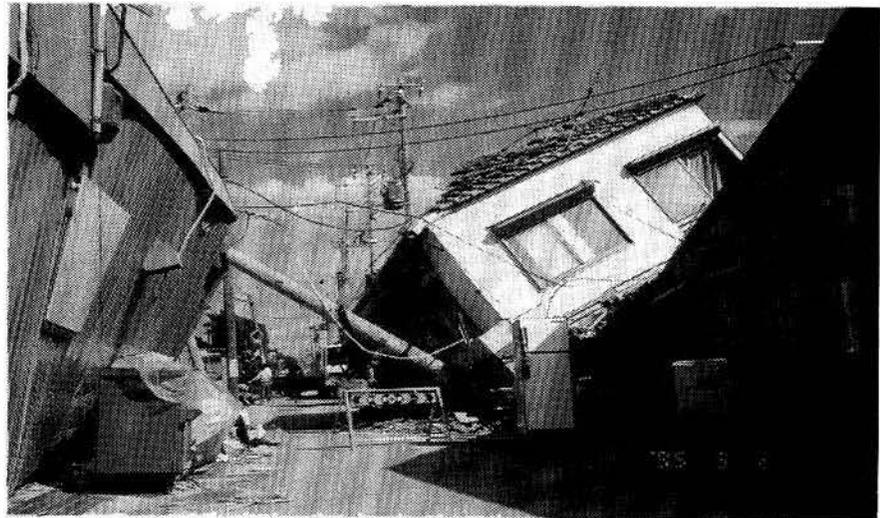
## — 私の体験 (1) —

### 心の亀裂・大震災で失ったもの

深田 崇子

1月17日の朝、そろそろ起きようと思ったその時、グラグラと来た。「長い、これは大変な事になるぞ、部屋から出なければタンスが倒れたら、ガスを止めなければ、マンションもろとも振り飛ばされるのではないか。」などピアノにつかまりながら多くの事を考えた。

夫や子供も無事で、外に出て隣り近所の人々と声を掛け合い、怪我のなかった事を喜んだ。JR西宮、芦屋、神戸方面に火の手が上がり、ガス臭い我が家が火災にならない事を願いながら、夜が明けのを待った。夫は職場へ、子供と2人で倒れた家財、本、食器類を片付け、飲み水の確保、電気は午前中についたので御飯を炊いた。テレビのニュースから被害の大きさにビックリ、恐怖のあまり画面に釘づけになった。兄の家は全壊、家族5人が我が家に来る事になり、8人がリビングで雑魚寝となった。ガス、水道が3月4日に出るようになるまでの不自由な生活が始った。



芦屋市津知町

同じ被災者であっても、被害の程度が違うので理解してやらないといけないと思いつつも、無気力で、復旧に向けて考えようとしないう兄家族に対し、いらだちを感じてしまった。震災前の生活状態にもどるには時間がかかる事は承知しているが、他人にしてもらうばかりでなく、自分達で再建

することを考えなければ私たちは立ち直れない、自然災害は自己救済が原則であると思うから。3日後彼らは何も言わないで出て行った。1月23日入院中の母が大腸破裂で危篤の時も電話一本なく、私の心の中に震災で入った亀裂よりも、もっと大きなものが入ってしまった。

この震災で色々な人々に助けられ、励され、多くの愛をいただいた。人と人とのつながりも以前よりも大事にするようになったし、自分自身に対しても、他人に対しても辛抱強くなったと思うけれど、彼らとの間にある亀裂は今だ埋ってない。道路が整備され、家並みかもどり出した頃には、心の傷も癒され、以前よりもずっと良い関係になる事を願っている。この大変な事態に苦しんだのは私だけではないと思うからです。

「その日、わたしは…」

水 上 勉

あの日の朝、私は5時45分頃に目が覚めた。子供がふとんをはいでいたので、掛け直してやってから時計を見たから、時間はよく覚えている。もう少し寝ようとして横になった直後に、大きく揺れだしたのだった。すぐに起きて長男の方に身を寄せた。妻も二男の上におおいかぶさるようにしていた。あとで聞くと、揺れていたのは10秒間ほどだったらしいが、その時はずいぶんと長く感じたように思う。子供たちも目を覚ました。私はわからなかったのだが、妻は、隣の部屋の食器棚が倒れる音が聞こえたと言っている。揺れがひとまずおさまってから、まず私だけ起きて家の中の様子確かめに立った。電気はつかなかった。懐中電灯を捜し出して、部屋の中を照らしてみると長男の頭のそばにたんすの上に置いてあった整理箱が落ちていた。近くの本棚も倒れていて、本が散乱している。子供たちにじっとしている様子を言っておいて、隣の部屋を見に行った。食器棚が倒れている。本棚も倒れて散乱している。ガラスの破片が落ちているかも知れないので、足元に注意しながら玄関の方へ行って外へ出て見た。まだ暗くてよくわからなかったが、近所の人達も少しずつ起き出して来ているようだった。しかし、この時はまだ、この地震があんなにも多くの犠牲者を出したものだとは夢にも思わなかった。

20分ほどしてから、近くに住んでいる私の母と兄がやってきた。母は孫の事が心配だったのだろう。無事がわかったので、母と兄はそのあとたまたまこの日、近畿中央病院に入院していた父のところに行った。少しして妻の両親もやってきて、無事であることがわかった。皆、孫2人を特に心配していた。まもなく電気がもどったので、テレビのニュースを見て、しだいに被害の大きさを知ったのだった。電車なども止まっている。道路もわからない。学校などに電話したりしたが通じない。今日は無理だなと思った。家の中がひどい状態だったので、とにかくあぶなくないように片付けることにした。

食器棚が倒れたので、ガラスだけでなく食器も割れて床に散乱している。足場を確かめながら片付け、倒れた食器棚や本棚をやっとのことで起こした。しかし細かい破片が散乱していて、結局まる一日片付けても1つの部屋が何とか元に戻っただけだった。相変わらず電話は通じず、学校の状況もわからない。ニュースでは、ますますひどい状況が報道されている。一日目の夜、私は38度をこえる熱を出してしまった。

翌日、熱は下がらなかった。連絡も相変わらず取れない。とにかく家の中の残っている所を片付けることにした。翌々日、まだ熱は38度をこえたままだった。結局、寝こんでしまった。ラジオをずっと聞いていたが、この先どうなるのか見通しが全然立たない。夜、校長先生から電話があり、20日に学校へとのことだった。自転車で行くしかないが、熱も下がらず心配であった。しかし朝になると、偶然か、熱が下がったので、何とか自転車で学校へ行くことができたのである。行く途中、多くの家々がつぶれているのを見て、なぜか涙が出てきたのを覚えている。学校へ着いてから松村先生と何人かの生徒が犠牲になったことを知り、愕然とするばかりだった。その後、3月ぐらゐまで、今思うと本当に大変な日々だった。

— 私の体験（3） —

あの大震災を振り返って

篠田通子

あの悪夢の1月17日からかなりの日々が過ぎようとし、少しずつではあるけれども復興への動きがあちらこちらで見られます。

しかし、誰の心の中にもあの日の恐怖が未だ消えているはずがありません。私の心の中にもあの日の記憶が生々しく浮かび上がって来ます。特に私の受け持ちのクラスのMさんの事は一生忘れ得ない悲しい事となってしまいました。

地震の数日後、全校生徒が集まる日の朝に、電話が鳴りました。その時私は『あっMさんだ。』と思いました。もちろんそれは別の人からでした。そして学校に着いた時、Mさんの死を知り、私は夢を見ているような気がしました。私は急いで自転車に乗り、Mさんの遺体を捜して2号線を走りました。やっとの思いで、某高校でMさんの棺に会えた時、私は号泣しました。しかし係の人に『明日の朝出棺です』と聞かされ、『Mさんは私を呼んでくれたのだ』と、感謝の思いで一杯になりました。

その後、私は学校に戻り、自分のクラスの生徒に会い、『ああ、よく生きて学校に来てくれた』と、涙が止まりませんでした。この時ほど生徒を大切に思ったことはなかったでしょう。

おそらく、あの震災を経験した人は皆、いろいろな思いを抱いて今、一生懸命生きているのでしょう。でも、その傷を抱きつつも、生き残った一人として、自分が生き残った意味を考えながら、一日を大切に生きて行きたいものです。

— 私の体験（4） —

1月17日 その朝

奥村政則

大きな揺れで目が覚め思わず大声で妻・子供の無事を確認する。子供はよく寝ており地震に気付いていない様子。妻と二人で「こいつは大物だ。」と笑いつつ出勤準備にとりかかる。ところが、家の中を見回すと本箱が倒れ本が散乱しており、台所では食器等がいくつか割れており、今までになく大きな地震であったことを認識する。ただ、周辺の様子も変わりなく阪神淡路の大惨事を考えもしなかった。ラジオから地震情報を得るにつれて被害の大きさを知り、これからどうなるのか言いようのない不安を感じ始める。

学校へ電話を掛けるが通じない。また、身内等の安否が気になり電話を掛けるがほとんど通じない。なんとか親・兄弟とは連絡がとれ全員無事であることが確認できる。

幸いなことに私の家族・身内は無事であり、震災直後から電気・水道・ガスは利用でき、普段と変わらない生活ができました。地震により崩壊した家屋等の光景を見るにつけ、幸運であったことを感じ、それとともに被災された多くの人々や亡くなった生徒等に対して申し分ない思いがします。震災後、10か月が過ぎようとしている今、悲惨な光景も少なくなり、復興に向けて動き出している様を見ますが、何かしら不安な思いが心に残ります。

## 我が家の体験

小林正文

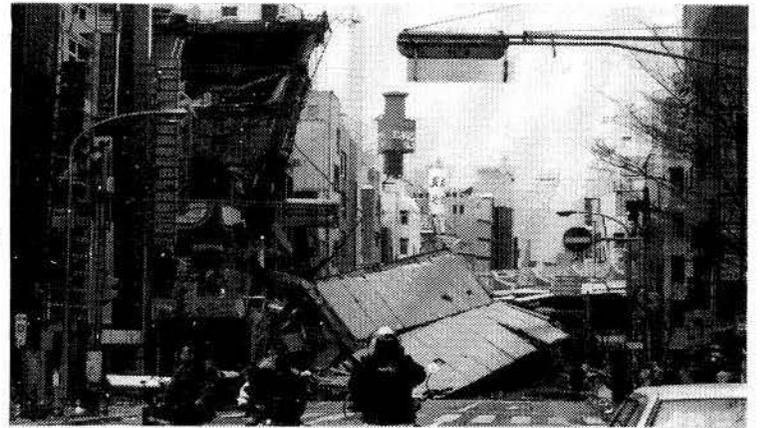
やっと探しだした携帯ラジオで、NHKの第一報を聞けば「ただいま地震がありました。放送局の内部の机などが大きく揺れました。三階から街を見てもみますと、特に変わった様子はありません。」と言うのだ。

無理もない。平和な暮らしに慣れ親しんで来た私たちのいったい誰がこの時、この近畿地方を襲った巨大地震の全体像を思い描くことが出来たであろうか。

神戸市灘区の山側は、被害が思ったより少なかった。しかし、余震がつづくのと、背後の六甲山の山崩れが怖くて、私たちのマンションの住民は、親戚や親里に逃げるように一戸、また一戸と越して行った。夜になると各戸の明かりもだんだん少なくなり、我が家も4日目、妻や子供が怖がることもあり近くの鶴甲小学校の体育館に避難することとした。

自家用車で何回か必要な夜具や道具を運んだ。余震はここでも来たが、壊れることはないだろうという安心感があった。それでも布団に横になると、ちょうど天井の真上にライトが一つあって、強震で落ちないだろうかと心配した。

ここから芦屋の勤務校に一週間通った。新潟から義兄夫婦が、来ないでいいと言ってやったのに、やって来た。新潟は地震では先輩なんだから、というのが言い分であった。この頃はJRは甲子園口までしか来ていなかったが、バスを乗り継ぎやって来た。それなのに2、3時間もいただろうか、泊まらず帰ると言う。避難所は割とゆったりしていて、泊めるだけの余裕はあったにもかかわらずだ。



神戸・三宮付近

上の娘は大学受験で、照明の悪い夜の体育館で本を開いて勉強していた。京阪神の4年制大学を6、

7校受けることにしていた。交通が遮断され、代替バスも途中駅は満員通過であったりで、頼りにならない頃である。結局、元町の級友宅、大阪鶴見の高校の先生でボランティアで受験生に宿泊をしてくれるお宅、京都の私の大学時代の先輩宅、三軒を泊まり歩いた。

恐怖感も少しずつ去り、8日目に我が家に戻った。何往復かして車で荷物を運ぶ際、小学校のグラウンドを出たところで、妻と娘は正面の石垣にぶちあたり、車は全面大破した。私は、風邪がひどいのと、服用している薬の副作用で上半身が痛いので休んでいた時だった。救急車を呼んでもらったが、暗くなっても来ない。「軽傷の場合は、こんな時だから救急車は上がって来ない。」と警官が言いに来てくれた。近所の知人の車ですぐ海星病院に運んだ。点滴をして2時間程休んで夜11時頃帰宅した。人間は軽傷で済んだが、車は重傷、ひと月ほどグラウンドに放置してその後自動車屋に処分を依頼した。

— 私の体験（6） —

1月17日を振りかえって

事務職員 宮本 拓行

阪神淡路大震災の日、朝5時に目が覚めたが、ちょっと起きるには早すぎるのもう一度寝た。そして5時46分、今までに経験したことのないほど、大きな縦ゆれだった。

目の前に洋服ダンスが2本斜めに倒れかかっていた。ベッドに命を助けられた。長女も次女も泣き叫んでいたが、寝室のドアがなかなか開かず状況がつかめなかった。妻とともにベッドから這いだし居間を見て、ほんとうにビックリした。家具は元あった場所がわからぬほど移動して、引き出しは飛び出し、食器はほとんどが割れて床一面に破片が広がっていた。母親の感高い声が部屋中に響く。

「みんな無事か！！」そしてマンションの非常警報がまもなく鳴り響く。しかし外に出る者は誰もいない。6時半頃ベランダをつたって隣の部屋から外に出た。何とか助かった。住んでいる周辺は、まだ被害が少なかった。職場に向かう車の中から見た世界は別世界だった。戦争映画を見ているようだった。高速道路は橋脚が折れ何十メートルも斜めになっていた。街の打撃は、甚大である。

街の破壊もさることながら、人々の心に残った深い傷のケアの方が重大であり最優先に考えるべき問題である。

— 私の体験（7） —

震災がくれた批判

西川 公規

1月17日の被災状況は、大変な被災にあわれた他の方がお書きになるものに譲り、震災後何を考えているかを書いてみようと思う。あの日、事態を把握せぬままに、遠距離電話で友人が知らせてくれるニュース速報に、驚いていた。無駄に動くよりも体力の温存とその日一日は動かなかった。翌朝、避難勧告を知り、2号線を歩いて東へ、電車を乗り継ぎ岸和田の妻の実家に身を寄せる。その間、空襲の時はこれに似ていただろうとか、鴨長明はこんな時にものを書いたのだろうかとか俗なことを考えていた。テレビの画面を初めて見て鳥肌がたった。親族、友人の安否を確認し、出勤して事後処理を手伝ってからは意識的に仕事のことだけを考えていた。現実に従いきれない動揺から逃避していたのであろう。自分が学生時代から買い溜めた書籍が実家の被害を大きくしたとの話はことさら胸に応えた。その本の処分に私は立ち会えなかった。過去を溜め込むな、不必要な知識は捨てよ、現在を生きることに専心しろ等々、この一件は私を様々に批判した。震災はあれこれと私を問うた。

「無常」と古典の授業で板書すると、この間まで無縁に感じていた言葉が、重力を持つ。「無常」とは批判の言葉ではないか。震災はやがて全てが過去のことになるだろう。が、震災が残した批判は永遠だ。「震災を忘れよう」などという世間の戯言は聞き流そう。「震災を忘れずしかも現在を生きる」思想を持つことが、被災者である者の義務だと思うから。

## 地震のあった日

梶山祥木

センターテストが無事に終了し明日は自己採点、その日の朝地震が来た。マンションがバリバリという音とともに激しく揺れた。「来たあ」私は大きな声で叫んだ。起きようにも起きることができず、ベッドの上で転がるだけであった。しかし家内はベッドから跳ね起き素早く子供の部屋へ。私は懐中電燈を右手に持ち暗闇の中で「だいじょうぶや、だいじょうぶや」と妻や子供たちに言った。内心これは大変なことになるぞと思いながら。もう夜が白白と明けるころであるのに街燈も消えたせいか明るくなるまでの時間が長く感じられた。ベッドの上で親子四人じっと身構えながらどうしようもない不安な時が流れた。

しばらくして、私は携帯ラジオを引っ張り出しAM神戸に聞き入りながら、ベランダに出てみた。不思議なことにいつもの様に出勤を急ぐサラリーマンの姿が見られた。「そんなあほな、地下鉄が動いているわけがない」そう思いながら人の流れをしばらく眺めていた。ラジオは須磨の様子を伝えていた。離宮道あたりで家屋が倒壊火災も発生しているらしい。そのうち真正面の空がうっすらと赤くなってくるのが分かった。しばらくするとやや左手の空が真赤になってきた。長田方面だ。刻々と伝わるニュースを聞きながら、ただならぬ事態に至っていることが理解できた。学校や芦屋のことが気になったが、電話は全くかからなかった。

何とか学校に連絡がとれたのはそれからずいぶんしてからであった。生徒たちからも何本も電話があった。「自己採点はどうなるのか。どうしたらいいのか」私は確たる情報も何もないままに「だいじょうぶだ心配ない。資料が入れば担任の先生を通じ指示する」としっかりした口調で答えた。今はそう言うしかないしそう言うべきだと考え、自分の不安が生徒に悟られぬ様にした。もちろん夜になっても眠ることはできなかつた。それから何日かは昼は水と食料を調達し、夜になれば服を着たまま横になる日が続くことになった。そして往復7時間の通勤が始まることになる。



グラウンド液状化現象

## 1月17日を振り返って

宮定かをり

1月17日、この日私は生まれて初めての揺れに目を覚ました。揺れが収まって外へ出ると、ガスの臭いがするものの、辺りは何も変わった様子はない。それでもいつもより余裕を持って、阪神武庫川駅に向かう。ところが、電車は運休だった。

気を取り直して自転車で学校へ向かった。私の家から学校までは、臨港線をまっすぐ西へ行けばよい。いつもと変わらない風景が続いたのだが、今津まで来て様子が変わった。道路に亀裂が入り、1

mほどの段差ができているのだ。初めてただごとではないという恐怖と焦りを感じた。人の手を借りてそこを過ぎると後は学校へ行くことだけを考えて自転車をこいだ。

学校へ着くと何人かの方がすでに避難されてきていた。学校に来られた先生と事務室で待機していると「電動のこぎりを貸して下さい。」という人が来た。用途を問うと、人が埋まっているから穴を開けるのだという。全く事態の深刻さがわかっていなかった私は、彼の言っていることが理解できず、消防を呼んだ方が早いのになどと考えていた。家に帰りテレビを見て、やっと駆け込んで来た彼の言っていることが理解できた。それとともに、私が学校へ向かう途中、助けを求めている人がいたのではないかと重い気持ちになった。助けを求めている人がいるなど考えもしなかった自分がくやしく、無力に思われた。

そんな私を元気づけてくれたのは、傷ついたはずの生徒たちだった。困難な状況の中で登校してくる彼らを見ていると、何かをしなければという気になった。震災を経験し、少し成長したように見える彼らと毎日過ごしてきて9ヶ月。今もその気持ちは変わらない。これからも、ゆっくり生徒とともに歩いていきたいと思う。

## — 私の体験 (10) —

### 阪神大震災雑感

西田 智代美

1月17日、私は下の5ヶ月の娘を伴って主人の実家の名古屋にいた。義母が心臓の手術を控え、自宅での静養を余儀なくされたからである。3才のイタズラ盛りの息子は西宮の私の実家に預け、主人は神戸の自宅にと家族バラバラであった。未明の地震は名古屋でも震度3ではあったが、まさかその時は淡路島が震源地とは思ってもよらない。7時のニュースで惨状を知り慌てて電話したが、既に通じない。その後、神奈川県に住む弟から電話があり、全員の無事が確認できてホッとした。それからはTVに釘づけだった。阪神間を離れたことのない私にとって映し出される場所は全て馴染んだものであった。友人は？同僚は？教え子は？親しい顔が何人も浮かんだ。過去の思い出と現在の生活と将来の生活設計、それが詰め込まれている街が、我が街だけが壊滅的打撃を受けているという喪失感に打ちのめされた。主人や息子のことが気がかりではあったが、ライフラインの絶たれた家に幼児を連れて帰るわけにもいかず、毎日苛立っていた。TVを見ては怒っていたと思う。数々の失言、暴言。政府の無策・無能ぶり。官僚の硬直性。自衛隊をめぐる与野党の不毛な論戦。(まだガレキの中に埋まっている人がいるというのに！震災を政争の具にしているとしか思えなかった。)それにひきかえ、黙々と買い出しの列に並ぶ人々。自分の国をこれほど情けないと思ったことはない。

1月末に西宮で水道が復旧したので、一担実家に戻った。その後、名古屋と西宮を何回か行き来し、ようやく3月20日にガス・水道が使用可能となった神戸の自宅に帰宅。久しぶりの一家団欒を味わった。このように育児休業中だったおかげで、それほど大変な思いをしていない。確かに年収を上回るマンションの補修に要する費用は痛手であるが、もっと苦境に立たされている人のことを思うと、口を噤んでしまう。復興の掛け声の中、被災地に住んでいてさえ、あの衝撃が薄れていきがちだが、無念のうちに亡くなっていった5500余名の人達のことを心に刻み続けなければならないと思う。

## 震災を思う

池田敏弥

あの日朝方まで起きていた。やっと寝静まった時に、「ゴー」という音と、下から「ドン、ドンドン」と突き上げるような揺れがきた。布団ごと宙に突き上げられたような感じがした。数秒後に激しい横揺れが起き、しばらくしてとまった。急いで母のいる部屋に行き、母をつれて外に出た。2階から1階に降りるとき何気なく上を見た。天井も屋根もなく外が見えた。「あーだめだな」何故そう思ったのか今でも分からない。

外はほこりで前がほとんど見えず、うめき声や叫ぶ声が聞こえるだけであった。母を連れて、近

くに住む兄のマンションへ行き、明るくなるのを待って、外に出た。家は崩れ、近くの商店街は火に包まれ、凄い勢いで周りに広がっていった。数時間後に消防車が1台だけ来たが、「水が出えへん」と消防士が叫んでいた。周りの人達は火が燃え広がっていくたびに、泣いたり抱き合ったりし、今現実

に起きている事実を信じたくない様子であった。

それから2、3日たった頃から、学校や公園に救援物資が届き始め、ボランティアをしてくれないかという話もあったが断わった。なぜなら、私は6年前からボランティアで障害を持つ人達と関わる機会が多かったので、その人達のことや、他の障害を持つ人達のことを気になり、その人達の安否確認をしてからである。安否確認をしている中でこういうことがあったと聞かされた。脳性マヒの障害を持った人が、避難所で何日もトイレに行かなかったそうである。その人は1人でトイレには行けるのだが洋式のトイレしか使えず、仮設のトイレが和式だったため行けず、何日も水も食べ物も口にせず、結局倒れ病院に入院した。またある人は、聴覚障害を持っていたために、炊き出し等の放送が全く聞こえず、何日もパンばかり食べていたそうである。いろんな事が震災後に分かったが、何もできずにいた自分を恥ずかしく思う。そして、日本中からあらゆる人達がボランティアに集まり、被災者を励まし、元気付けたあの笑顔を忘れることはないだろう。震災後、ボランティア元年と呼ばれ、ボランティアに興味を持つ人達が増えたように思う。だが、興味だけでなく、行動を起こして欲しい。小さな事からいいから。

最後に、この震災で感じたのは「人を救うのは人しかいない」と言うことだ。



玄関を出られる皇太子夫妻



# 生徒作文

・・・震災が生徒を変えた・・・

## 地震による再認識

3年3組 山本久実

ほとんどの老人が、電車やバスの座席を譲ってもらって当然と考えているだろう。この考えは世間に対する甘えであり間違っていると思う。若い人が常に健康であるとは限らないし、老人は健康のために、なおさら立っていた方がいいのではないか。つまり老若男女を問わず調子の悪い人、気分がすぐれない人が優先的に座ればいいのだ。これからの老人はもっと自立して生きていくべきだと思う。いや思っていた。あの地震が起こるまでは。

1月17日、私は余震の続く中父と姉と一緒に、母のいる病院に向かった。病院の建物はひどく破損して治療を行える状況ではなく、母は加古川の市民病院に移ることになった。私は地震の影響で加古川の叔母の所に避難していたので、毎日母のいる病院に通った。病院で驚いたことは、入院している老人のほとんどに付き添いの人がいなかったことだ。一人で寂しくご飯を食べ、寝るかテレビを見るかで、暇な一日を過ごしているのを見て、まさしく姥捨て山というような老人の現実を目のあたりにして胸が熱くなった。

ある日曜日、外出許可が出た母を車イスに乗せて家族で買物に出かけた。エレベーターを待っていたが、なかなか来ず、やっと来たと思ったら人がたくさん乗っていて見送ることになった。エレベーターの中は家族連れや恋人同士というような人達でいっぱいだった。

「若いねんから、健康やったらエスカレーターを使えよ。ムカツクな。」と文句を言ってしまった。だが同時にこの時初めて老人の気持ちを体で感じた。

車イスの母と老人。体が思いどおりに動かないということについては共通するものがあるだろう。私は老人に対する考え方に偏見を持っていたような気がする。それに母が車イスに乗るようになるまでは、障害者や老人のことを真剣に考えたことなどなかった。

私は地震で高校2年生の楽しい2カ月もの時間を失ってしまった。2年生最大のイベントである修学旅行、高校生活最後の試合のためにがんばって練習しようと思っていた部活など、二度と取り戻すことのできないものなので、とてもくやしかった。しかし地震がなければ、母も私も加古川へ避難することがなく、病院での老人の実態や社会の障害者への対応を目のあたりにすることもなかっただろう。

老人や障害者の人達が体力の低下や社会の対応に対して疑問やイラ立ちや寂しさを感じていることを知り、今まで社会で弱い立場に立つ者の気持ちを理解しようとしなかったことに気付いた。煩わしい問題から目を背けていたのだ。しかし老人や障害者などの社会的弱者について真剣に考えるようになり、世の中のことを見つめなおした。それによって自分の進路を明確にすることができ、目標に向かって迷わず進むことができた。このように地震によって失ったものはあったが、得たものはそれ以上に大きかった。

## フランス体験記

第二外国語でフランス語を学ぶ生徒の中から、被災地の高校生として二名がコンセイエコーポレートからフランス旅行の招待を受けた。次はその感想文である。

2年8組 吉田 久美子

あの激しい揺れとすさまじい音を私は一生忘れないと思う。今でこそ夜の暗闇が耐えられない程怖くはないが、地震直後の私にとって怖かったものは殺人者でもエイリアンでもなく余震と暗闇だけだった。あの恐怖の中、心が温まることがいくつかあった。実は、私は今まで人間はいざとなったら自分だけが大切なんだろうとひねくれたことを考えていたが、実際はそうではなかった。心配して電話してくれた友達、水がないという非常事態に水をわけてくれるだけでなく洗濯までさせてくれた人やまだまだたくさんの人から好意を受けた。本当に嬉しかった。

嬉しい発見もあったが悲しい事もあった。私にとって死は無縁のものと思っていた。しかし本当は身近なもので、同じ年の友人も年下の友人も亡くなってしまった。私はそれを知った時、悲しかったけれど泣くに泣けなかった。まだまだやりたい事があって、私なんかよりずっと充実した生活を送っていた人もいただろう。そんな事を考えると私には泣く資格がない様に思えた。今でも逝ってしまった彼らの事を思い出すと、彼らにはもうない未来が私にはあるのだから頑張らなければならないと気が引き締まる思いがする。

フランスに行く前、私にとってフランスは別世界だった。だから行くのが楽しみで出発が待ち遠しくて仕方なかった。言葉も文化も違う国に行くのは不安もあったけれどそれよりも期待でいっぱいだった。ド・ゴール空港に着いた時、自分がフランスにいるのかと思うと嬉しくて頬が緩んでしまった。

車の窓から初めて直に見たパリの街並みは、日本のとは違い古くて立派な建物が建ち並んでいて綺麗でただ圧倒された。エッフェル塔や凱旋門など全てが想像よりもずっと大きかった。しかし素晴らしい街並みを眺めながら、「こんなに古くて地震が起きたらどうなるのだろう。」と考えてしまったのは震災の後遺症だろうか。ちなみにフランスに地震はほとんどないそうである。

フランスは美しく芸術的でゆったりした国だった。食事に対する考え方も日本と根本的に違うらしく、食べるというより話すといった雰囲気だった。こんな風に私には初めての体験の連続だったが、すごく新鮮で素晴らしい経験になった。

被災した事、フランスへ行った事、差し引きゼロというわけではないが、被災の経験の中にも学ぶことがあったし、フランス旅行にも勿論あった。あの震災から今まで、本当にたくさんの、学校の授業では学べない大切な事を学んできた気がする。これからも「学ぶ」ことの大切さを忘れずに、いつも学ぶ姿勢で生きて行きたいと思う。

1995年1月17日午前5時46分。ほんの数秒間で、いつの間にか私の中に根付いていた“関西安全論”と思いの詰まった芦屋・神戸の街並みが崩れた。そして、多くの人々と、数人の友の命が奪われた。

あれからはや11ヶ月が経とうとしている。あの地震の記憶はうすらいでいっている様に思うが未だに余震には敏感だし、車のエンジンの音にもどきっとする。マグニチュード7.2の地震を経験し、変わり果てた街を見、友を失い、そしてあの不便な生活をした私の頭と体はあの地震を忘れようとはしないのだ。

今年の夏、私は「パリ招待旅行」のチャンスを得た。第2外国語としてフランス語を選択していた為であるが、フランス側が「フランス語を勉強していて、この度の地震で被災した高校生10人」をパリへ招待してくれたのだ。

そして私は、パリへ7泊9日の旅へ出かけた。

パリという街は芸術作品だ。どこをどう見ても絵になる。日本の街が整備された、「整の街」とすれば、パリは正に「美の街」である。それも、「エッフェル塔」が「ノートルダム寺院」がと、有名建築だけが美しいのではなく街全体が「美の集合体」という感じだった。

美といえばもう一つ重要な「食の美」がある。さすがグルメの国だけあって食はかなり重要視されている様だった。パリの人々はよく室外で食事をする。日本ならすすんでエアコンの効いた室内へ行くがパリでは反対だった。パリのさわやかな気候がゆえにできる事だが、たいへんうらやましかった。何より驚いたのが食事にかかる時間の長さだ。午後の7時過ぎにレストランに入り、10時半くらいまでいる事もあった。(もちろん戸外で、けっこう真っ暗)最初は、あまりの長さにいらいらしたが、最後の方は、食べる事と話す事に夢中で帰る時間など気にしていなかった。「フランス人は食べる事ばかり考えているよ」と教えられたが私もこの点でかなりフランス人化した様だったし、パリでの楽しい思い出の多くは食事の場面で生まれた。

地震によってこんなに楽しい日々が送れたのは少し複雑な気もするが、とにかく充実した日々だった。今でもパリの街の美しさは鮮明に思い出す事ができるが、『あの街に今回のような災害が訪れたら……。』と思う。

人間の作りあげたものを自然はいとも簡単に破壊する。しかし、私達はそれを防ぐ事もできるのだ。私達人類の命・歴史・文化を守り継承していくためにも災害対策は全世界で取り組むべき一つの重要課題であるのだ、と今回の地震とフランス旅行を通して実感した。



# 資料編

資料①

平成 7 年 2 月 1 日

保護者各位

兵庫県立芦屋南高等学校  
校長 藤原 周三

## 学校再開のお知らせ

春寒のみぎり 寒い日がつづくなか災害に会われたすべての皆さまにこころよりお見舞い申し上げます。

大惨事から約半月がたち、救済・復旧への取り組みがすすんでいます、やっと本校でも本日 2 月 1 日より学校を再開することになりました。

つきましては、生徒諸君は次のことに留意して学校生活へ復帰してほしいと思います。保護者各位におかれましてもご家庭でのご協力をお願い申し上げます。

1. まず気持ちを立て直し、生活再建への希望を持つよう。
2. 市民生活、学校生活で常識やマナーを忘れないようにしよう。  
より困った人がいたら援助の手をさしのべよう。
3. 通学には安全に十分注意しよう。
4. 悪条件下でも、学校生活と勉強に目標を持って取り組もう。

- しばらくの間時間帯は午前 10:00 開始、午後 2:30 終了です。

なお、学校再開後の教科書・学用品、時間割、トイレ、食堂利用等については別途指示します。

以上

平成7年2月1日

保護者各位

兵庫県立芦屋南高等学校  
校長 藤原 周三

## 合同追悼式の御案内

春寒の候 この度の大地震の被災には心からお見舞い申し上げます。現在震災後の避難生活や復旧作業に多忙な日々をお過ごしのことと拝察いたします。阪神間の街と私たちの生活を一瞬にして破壊した今回の地震で、校舎や校庭もかなり傷跡が残りました。

さて、皆さんへ大地震で本校からも貴い犠牲者が出たことをご報告しなければなりません。生徒7名と先生1名が帰らぬ人となりました。かけがえのないひとびとを失ったことは悲しみに堪えません。

そこで、皆さんと共にご冥福をお祈りするため下記のように合同追悼式を開催いたします。ご多忙の折とは存じますがご出席下さるようご案内申し上げます。

### 記

期日： 平成7年2月24日（金）  
時間： 午後1時～2時  
場所： 本校体育館  
形式： 生徒・保護者・職員によるお別れの会

資料③

平成 7 年 2 月 1 日

保護者各位

兵庫県立芦屋南高等学校  
校長 藤原 周三

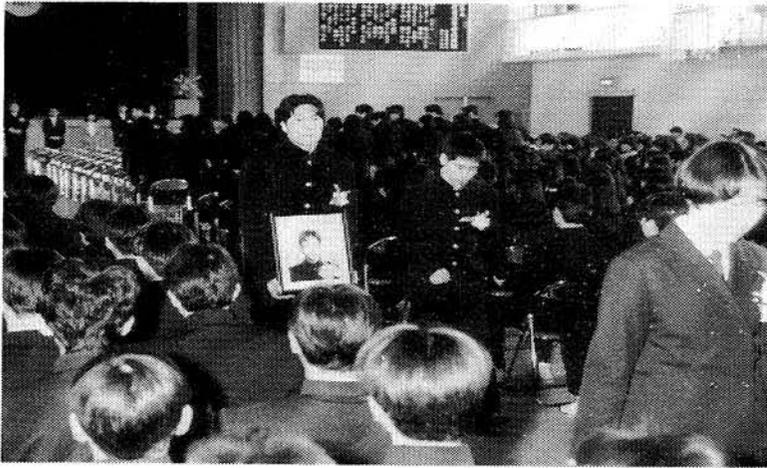
## 第 1 4 回卒業証書授与式の御案内

謹啓 この度の大地震の被災に、心からお見舞申し上げます。必ずめぐって来る早春の候を、今年は無曾有の大震災のあとで迎えるとはいったい誰が予想したであらうでしょうか。

多くの方々が財産をなくされ、かけがえのない生命を奪われました。しかし混乱と失意の時間が過ぎると各所から再建の声が伝わって来ています。この逞しきお姿に深く敬意を表するとともに、犠牲者の方々に心から哀悼の意を捧げたいと思います。

さて、三年生はいよいよ高校を巣立つ日が近づきました。保護者の皆様にはとりわけ感慨ひとしおであろうと推察申し上げます。本校の教育にも3年間深いご理解とご協力を賜り有難うございました。

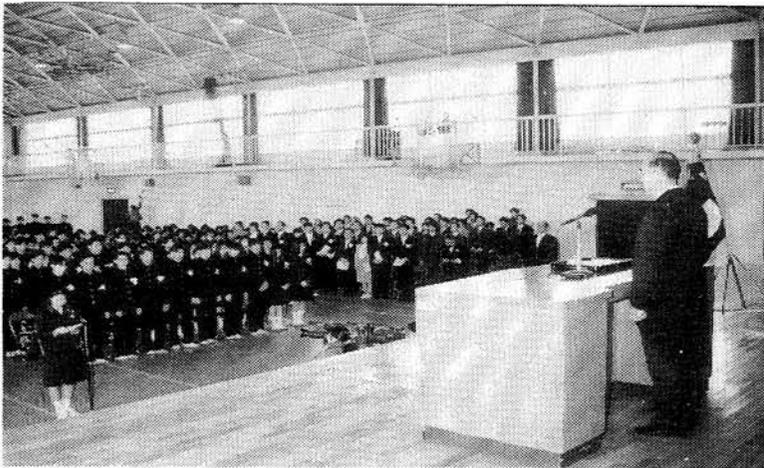
そこで、悪条件下ではありますが、右記により卒業証書授与式を挙げる運びになりました。被災後の避難生活や復旧作業などでご多忙の折とは存じますが、御子弟の門出をお見送りいただきたく、ここにご案内申し上げます。



第14回卒業式



体育館内の自衛隊



第14回卒業式



2月26日の朝

任 務	担 当	備 考
司会・進行	教 頭	開式1:10 閉式2:05以内におさめる
「報告」作成	〃	生徒7名と松村先生の紹介
案 内 状	小 林	保護者へ
遺 影	事務長	犬塚、三宮写真館
遺 族 連 絡	学年・担任	遺族の了解、参列のご案内
ステージ台座	事務長	市の追悼式の一部を借りる、業者との折衝
菊花準備保管	〃	盛花を両わきに、遺族のお花、代表献花用花
放 送	阿部彰	マイク2本 司会用と中央
P T A	小 林	会長の言葉、役員の参加など
会 場 設 営	1年5、6組	23日1限後、卒業式の座席図に準じる 320×3、それに遺族席、PTA役員席、職員席
〃 指 導	小林・半野	生徒指導部等の協力で
立 看 製 作	森田・池田	2本
〃 文 字	半 野	阪神大震災 生徒・職員お別れの会
生徒代表指導	木佐貫	生徒の「作文」もふまえて
献 花 方 法 プリント作り	〃	クラス毎に一斉に、24クラスが順々に行い、献花後館内を左右に別れて着席
〃 指 導	各担任	事前にクラスで指導しておく
音 楽	牧 坂	レクイエム風のもの、テープ
受 付	小川、斎藤 半野、	亡くなった生徒の担任は出迎える。
会 場 案 内	阿部三、古在 岡本晶	時間前に、応接室のご遺族を会場へ案内する。
案 内 表 示	小林、半野	遺族席、PTA席、保護者席、等
記 録	写真屋	
会 計	事務長	

## お別れの会 献花の要領

心のこもった、静粛なお別れの会になるよう、全員が心を合わせて協力して下さい。

### 順 序 (会場図参照)

- (1) 3年1組から順々に24クラスが行う。流れはすみやかに。
- (2) クラス毎、一斉に、担任の誘導のもと、中央に近い席の者から、左右に別れて実施する。3年生は、男女混合して流れる。
- (3) 献花が終われば、交錯しないよう静かに自分の席にもどる。

### 献花方法

- (4) 流れに従い、献花台に向かう。献花台いっぱい(片幅7メートル)を使用する。
- (5) 礼。菊の枝を正面にむけ献花する。礼(合掌)など。
- (6) 献花をすませ、自分の席にもどる。遺族席と顔を合わせた時には、目礼など。

### 諸 注 意

- (7) 移動中、待機中は、静粛に。決して私語をしない。
- (8) 献花の際、十分な時間はとれない。お別れは、待機中、自分の席で。
- (9) 献花はあわてなくてよいが、流れに従ってすみやかに、臨機応変に。

### そ の 他

- (10) 学年外の教職員は、適当に、生徒に混じって献花して下さい。
- (11) 担任は、状況を見て、臨機応変に生徒を促し、誘導して下さい。
- (12) 菊花は、SHRで指導の際、担任から生徒に配付して下さい。

資料⑤

今後の対策について

1995. 2. 1 教務部より

1. 授業の再開について

- (1) 時間帯
- |    |             |                          |
|----|-------------|--------------------------|
| 1限 | 10:00~10:45 |                          |
| 2限 | 11:00~11:45 | 2月2日(休)~2月4日(土)は1, 2限のみ。 |
- 昼休み
- |    |             |  |
|----|-------------|--|
| 3限 | 12:35~13:20 |  |
| 4限 | 13:35~14:20 |  |
- 終礼・そうじ

\* 1時間目担当の先生方は出欠をよくご確認ください。出席簿と職員室の出欠黑板への記入を確実にお願いします。

\* 各授業の出欠については平常通り記録するが、年度末において弾力的に扱う方向で考える。

(2) 時間割について

\* 教科の授業は週21時間。習熟度授業は原則として行わない。

\* 体育、芸術の授業はなしとする。他に1年では国文のLL、2年では家庭科と国文の第二外国語は行わない。(2Z国IIも)

(これらの科目の学年末の成績は原則として2学期までで行う。)

\* 担当クラス・持時間について、適当な変更を行う。(別紙)

各教科で連絡を密にしよう。

\* クラス別時間割。(別紙)

\* 教師用時間割。(別紙)

\* 使用する教室は2号館のみとする。

2. 教科書等をなくした者への配慮

(1) 授業は教科書を持っていない前提で行う。プリントの活用(教科書のコピーなど)や、板書の工夫で補う。

(2) 先生方で教科書等をなくされている場合、まずは教科内で確認してもらって進める。

(3) 被災してノートなども失った生徒には、ノート・鉛筆・消しゴムを配布する。

3. 3年の学年末の成績処理について

\* 2学期末までの分で処理を行う。

(1) 2学期までで欠席時数が年間の規定時数の5分の1をオーバーしている者については、原則としてレポートにより補充を完了させる。

(年間の3分の1をこえている場合は不認定。…1名)

(2) 1, 2学期に同一科目で欠点を連続して取っている者についても、レポートを課して成績認定を行う。

\* (1), (2)に該当する者のレポート提出は2月4日(土)10時とするが、事情を考慮して提出が遅れた者についても弾力的に扱う。

(最終的な締切は2月16日と考えています。)

\* (1), (2)の両方に該当する生徒については、課題が過重にならないように配慮する。

(3) 過年度の欠点科目を持つ者についての追認考査は行う。ただし方法について従来のやり方が無理な場合は、適当な方法で行う。

(4) 上記の(1), (2), (3)に該当しない者の評定は2学期末の5段階評定をそのまま年度末の評定とする。

\* 3年成績締切 2月6日(月)10時

3年成績会議 2月8日(水)

3年追認考査 2月17日(金)

3年追認判定会議 2月20日(月)

\* 上記の(1), (2), (3)に該当する者の一覧は別紙のとおり。

## 5. 入試関係について

### (1) 推薦入試の日程変更等

\* 2月3日(金) 国文・理数実施要領説明

\* 2月8日(水)～2月10日(金) 国文・理数願書受付

\* 2月9日(木)～2月10日(金) 国文・理数書類審査

\* 2月10日(金) 国文入試のための前日準備

\* 2月13日(月) 国文入試日……………9時からとする。

\* 2月14日(火) 資料作成

\* 2月15日(水) 合否判定会議

\* 2月17日(金) 国文合格発表

\* 2月20日(月) 理数再出願

\* 2月21日(火) 理数入試のための前日準備

\* 2月22日(水) 理数入試日、資料作成

\* 2月23日(木) 合否判定会議

\* 2月24日(金) 理数合格発表

### (2) 推薦入試実施にあたっての変更

\* 受検生の集合場所・誘導経路等について変更予定。

\* 役割分担についても多少の変更予定。

\* トイレについての配慮。

- \* チャイムが鳴らないので、開始・終了は放送で行う。
- \* 放送設備のチェック。
- \* 万が一の場合の避難経路の徹底。
- \* 国文の入試については、開始時間を遅らせる。
- \* 上履きにははきかえさせない。

(3) 普通科入試については、日程は予定通り。

## 6. その他

- (1) 次年度使用する副教材については、予定通り2月10日までに各教科で決定して教務まで。
- (2) その他…1, 2年学年末考査の日程は少しずつ予定です。

## 3年成績処理について

1995. 2. 1

兵庫県立芦屋南高等学校

今回の地震により、3年生の学年末考査は実施できなくなりました。3年生諸君の3年時の成績、および単位認定等については以下のようにします。

- (1) 3年時の成績は1, 2学期の成績で評定をする。
  - (2) 2学期末までで、欠席時数が年間の規定時数の5分の1をすでに越えている科目を持つ者については、レポートを課す。そのレポートの提出をもって、不足時間数を補充したとみなす。
    - \* レポートの内容が不十分な場合は、再提出。
  - (3) 1, 2学期に同じ科目で、続けて欠点を取っている者については、その該当する科目ごとにレポートを課す。そのレポートの提出をもって、その科目の単位を認定する。
    - \* レポートの内容が不十分な場合は、再提出。
- ☆(2), (3)に該当する者については、個別に連絡する。該当しない者については、1, 2学期の成績のトータルで成績をつけ、単位認定する。
- (4) 1, 2年時での不認定科目を持つ者の追認考査は2月17日(金) 12:35から行う。該当者は担任の先生とよく連絡を取ること。

## 生徒諸君へ

1995. 2. 1

兵庫県立芦屋南高等学校

明日2月2日(木)から授業を再開します。みんなで協力して何とか復興していくように、頑張りましょう。

## (1) 授業について

①次のような時間帯で行います。

1限	10:00 ~ 10:45
2限	11:00 ~ 11:45
昼休み	
3限	12:35 ~ 13:20
4限	13:35 ~ 14:20
終礼・そうじ	

2月2日(木) ~ 2月4日(土)は1~2限のみで終了

さしあたって明日2月2日(木)は

1限 ホームルーム

2限 授業(下記の通り)

11	12	13	14	15	16	17	18	21	22	23	24	25	26	27	28
数Ⅰ	古典	生	数Ⅰ	現社	現社	英A	英C	英Ⅱ	世史	古典	英Ⅱ	英Ⅱ	日物	国Ⅱ	2Y

\* 時間割全体については、2月2日(木)に連絡します。

② 校舎は2号館しか使いません。習熟度授業は原則として取りやめます。

③ 教科書をなくしている人も多いため、授業は教科書はないものとして進めます。

④ ノート・筆記具等をなくした人も多いため、十分ではないですが、その人たちにノート・鉛筆・消しゴムを配布します。

## (2) 通学について

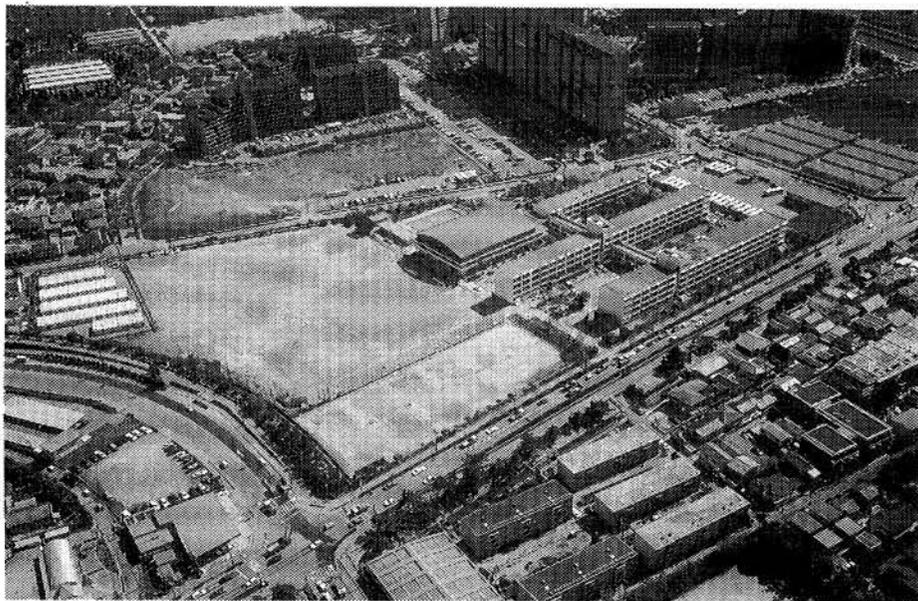
公共交通が完全ではありません。通学すること自体が大変だと思いますが、テレビ・ラジオ等での情報にも注意して、代替バス等使える交通機関で通学して下さい。芦屋市内の人はできるだけ徒歩で通学して下さい。学校の行き帰りは、くれぐれも安全に注意して下さい。

## (3) 学校生活について

① 北門は、自衛隊の車が頻繁に出入りするなど危険ですので、しばらく通行禁止にします。南側の西門を使って下さい。

(正門は通行可ですが、車の出入りが多いので注意して下さい。)

- ② 2号館には西側の入口から、土足のまま入って下さい。靴の泥はよく落してから校舎に入  
って下さい。(生徒昇降口は使いません。)
- ③ 3号館・グラウンド・体育館は立入禁止です。他にも立入禁止の危ない場所があります。絶対  
に近づかないで下さい。
- ④ トイレは2号館と3号館の間に設置してある簡易トイレ(男子用2, 女子用8)を当分の間  
使って下さい。校舎内のトイレでは、衛生面から水が出るまでは、大便の使用を控えること。  
なお男子の小用に限っては校舎内のトイレ使用を可とします。  
学校のトイレでは、トイレトーパーや生理用品は流さずに、備付けのビニール袋に必ず入  
れて下さい。そうじ当番の人は大変ですが、確実にゴミ等そうじして下さい。
- ⑤ 2月6日(月)から1号館西階段付近で、パンと牛乳を販売します。活用して下さい。
- ⑥ 制服を失った人は、担任の先生に申し出て下さい。女子の制服については数に限りはありま  
すが、学校にある分を一時貸与します。
- ⑦ こういう時こそ、互いに相手の気持ちをくみ、やさしい気配り、慎重な行動をとって頑張り  
ましょう。



本校グラウンドと仮設住宅

平成7年 月 日

高等学校長様

兵庫県立芦屋南高等学校長

藤原 周三

下記生徒は、今回の兵庫県南部地震により住居の甚大な被害があり、避難しております。その間、一時的ではありますが貴校の授業に参加できますよう、格別の御配慮をお願い申し上げます。

記

仮転入を希望する 生徒氏名  
学科・学年  
保護者氏名  
本校における住所  
避難先の住所  
後見人氏名  
(電話番号)

- なお ① 本校の在学証明書  
② 成績証明書  
③ 日本体育・学校保健センター加入証明書(写)  
④ 上記生徒についての副申書

以上の書類を添付いたします。

また、貴校で上記生徒がお世話になるのは、まずは平成7年3月末までであろうかと予想されます。復興の状況により、その時期が前後するかもしれませんが、平成6年度の上記生徒の該当学年における単位認定・進級認定等につきましては、本校の方でさせていただきたいと思っております。

つきましては、貴校でお世話になった期間についての出席日数・欠席日数・試験成績等については、別紙の形式でご報告いただけると幸いです。お手数ですが、よろしくお願い致します。



## 学校生活に関する諸注意

1995年2月1日

生徒指導部

今回の災害で、本校の生徒、職員の受けた被害は余りに大きい。多くの死者をだし、家屋、校舎も損傷し、今なお多くの人達が被災に苦しみ、不自由な生活を強いられています。このような状況での学校再開は、何かと落ち着かず、途方にくれがちですが、被害は最小限に抑える努力を、各人がしてほしい。建物が荒れたからといって、心まで荒廃しないよう、お互いに励まし合って、建設的な第一歩を今日から歩んでほしい。

学校生活は、色々と不自由な面が想像されます。とりあえずは、当面の下記の諸注意を理解し、各人がお互いに協力しあって、良識のある判断、行動をとるように心掛けてほしい。

### 1 授業の開始について

2月2日(木曜)より、午前10時始業の短縮4限授業(臨時時間割り、45分授業、昼食あり、14時30分放課)を実施する。

### 2 通学経路について

- (1) 交通途絶などで通常の通学経路をとれない生徒は、阪神・阪急・JRの代替バス、43号線バス専用レーンの急行バスなどを乗り継いで、出来る限り、登校の努力をして欲しい。
- (2) なお交通手段が得られず、徒歩も困難な生徒で、自転車通学を希望するものは、HR担任に申し出て、申請手続きをとること(無断での乗り入れを禁ずる)。
- (3) 生徒の北門の通行を一時禁止する。援助物資の搬入・搬出、自衛隊車両の出入りが頻繁であるため、登下校に際しては、西門、正門を利用すること。阪神打出駅方面から通学する生徒は、大きく迂回して登下校すること。

### 3 校舎の使用、出入口について

- (1) 使用する校舎は、当分のあいだ、原則として2号館、1号館のみとする。4に示す立入り禁止区域へは入らないこと。
- (2) 校舎への出入りは、校舎の西側出入口、中央出入口を利用すること。東側は非常時の出口とする。なお、生徒昇降口(下足置き場)が使えないので、しばらく下足のまま上がることもやむをえないが、よくドロを落として上がって欲しい。

### 4 立入禁止区域について

本校は、災害援助物資の保管場所、災害派遣自衛隊の駐屯地となっている。次の立入禁止場所には立ち入らないこと。

## 〔立入禁止区域〕

- ×体育館周辺（食堂，格技室，更衣室等含む）・・・物資保管，駐屯，危険
- ×3号館全面（クラブハウスも含む）・・・物資保管
- ×生徒昇降口（下足置き場）・・・物資保管
- ×グラウンド・・・駐屯
- ×北門から生徒昇降口に至る広場一带・・・搬入・搬出で危険
- ×288教室，タイプ室，国文講義室・・・駐屯，物資保管
- ×その他，立入禁止の表示をした場所

## 5 トイレの使用について

洋風中庭に仮設トイレを10基（女子専用8，男子用2）設置してあるので，当分のあいだ，これを利用のこと。校舎内のトイレでは，衛生面から水が出るまでは，大便の使用を控えること。なお男子の小用に限っては，校舎内のトイレ使用を可とする。いずれの利用に当たっても，各人がマナーを守り，他者への心づかいをしてほしい。

## 6 制服の着用について

- (1) 現在のような非常事態においても，制服を着用するなどの校則は守らなければならない。ただし，今回の被災で制服を失った生徒については，特別の配慮をするので担任に申し出ること。
- (2) 数に限りがあるが，女子制服の一時貸与を希望する生徒は，担任に申し出ること。

## 7 学校生活一般について

- (1) こういう時こそ，互いに相手の気持ちをくみ，優しい気配り，慎重な行動をとってほしい。
- (2) 身の回りが雑然としておれば，心まで雑になる。教室，廊下など，身辺の清掃に極力努めてほしい。
- (3) 普段の生活をとりもどすなかで，非常時に，平常心を保つ努力を，各人が心がけてほしい。
- (4) 余力のある人は，すすんでボランティア活動に参加してほしい。
- (5) 校内の援助物資は，各地から集められ，被災した人達に配られものである。決して勝手にさわってはいけない。
- (6) 物資の搬入・搬出作業のじゃまにならないよう，すすんで道を譲って迂回してほしい。

保護者各位

兵庫県立芦屋南高等学校  
校長 藤原周三

## 部活動再開のお知らせ

春寒の候、大震災以来2ヶ月を経て、ライフラインの復旧はすすんでいます。まだまだお疲れの日々をお過ごしのことと拝察いたします。

本校では、交通状況が不全の中、2月1日より学校を再開し、なんとか学年末考査も実施できました。考査後も欠けた授業の回復措置として、授業期間の延長をすることは先般ご案内したとおりですが、ここに新たに部活動の再開について下記のとおりお知らせ致します。

部活動の教育的意義、特に現状ではストレスの発散、運動不足の解消等をかんがみた措置ですので、よろしくご理解の上ご協力をお願い申し上げます。

## 記

1. 3月15日より部活動を再開する。ただし生徒の生活状況を掌握の上、無理のない活動とする。
2. 4月9日までの期間、生徒の完全下校時刻を4時30分とする。また、休日、祭日の活動は禁止する。
3. なお、新学年度の下校時刻は別途定め、休日、祭日の活動については解禁とする。

## 3月からの時間帯の変更について

1995. 2. 27 教務部

3月1日(水)より、授業時間帯を下記のように変更します。

職員打合せ	9:10
(予鈴)	
1 限	9:35~10:25
2 限	10:40~11:30
昼 休 み	
(予鈴)	12:15
3 限	12:20~13:10
4 限	13:25~14:15
終礼・そうじ	

\* 3月1日(水)~3月7日(火) 授業

(ただし、3/2(木)は火曜日の授業、3/7(火)考査前日なので、1, 2限のみ)

\* 学年末考査は3月8日(水)~3月14日(火)

時間帯は SHR 9:35~

1 限 9:50~10:40

2 限 10:55~11:45

\* なお、3/22(水)~3/28(火)の期間は、特別時間割で授業を行う。(後日、連絡)

# 教育相談研究委員会より（被災報告）

教育相談研究委員会

木佐貫正博、深田崇子、上野仁史、斎藤富美代、山本伸吾  
岡本 晶、木村信吾、倉 芳博、屋島哲也、田原美生

## 1. はじめに

### (1) 被災状況

死者：教師1名、生徒7名、生徒の家族10名が亡くなった（県下の高校全体での死者は、教師3名、生徒24名と聞く）。

家屋の損壊：全壊125、半壊104、合わせて229。これは生徒在籍数939（当時）の約4分の1。その後、この被害はふくれあがって、4月現在で罹災証明のとれた全・半壊はおおかた5割に達した。

避難生活：6割の生徒が避難生活を体験し、そのうちの半数（全体の約3割）は、1か月以上の避難生活をした。ライフライン等の復旧に連れて、生徒は自宅に戻ったり、仮設住宅に移ったりしたが、新学期が始まった4月現在で、新2、3年生の50人余り、新入生の40人余りが、なお避難生活をしながら通学していた。本校の生徒の通学区域は広く、芦屋、神戸第一学区以外にも、西宮、伊丹、宝塚、尼崎からも通学し、被災地域とびったりと重なる。

校舎等の損壊：校舎は、使用禁止、立ち入り注意の指定を受けるまでにはいたらなかったが、校舎の継ぎ目はことごとく外れ、敷地やグラウンドは地盤が沈下、亀裂が随所に見える。

### (2) 徐々に明らかになっていった被災状況

1月17日、事態の全容を掌握するのに、誰しも時間がかかったようである。夜明け前に起こったことにもよる。ラジオからも断片的なニュースだけで、全貌が分からず、明るくなるのを待って電話に向かうも、ほとんど不通であった。死者が出、電車が止まり、マンションが壊れたようだ等々、後から後から由々しき情報が入ってくるが、宝塚に住む私の場合、その日だったか翌日か、阪神高速の数百本の横倒しの映像を見るまでは、事の深刻さには気づいていなかった。交通機関、道路は遮断され、家の復旧で2日は動けず。生徒に犠牲者が出たことが伝わって来た。

## 2. 学校の再開

### (1) 生徒の招集と学校再開

地震から6日後の1月23日、初めて全校生徒が招集された。既に学校は、芦屋市の救援対策本部として、全国から救援物資が続々と搬入され、運動場、体育館には、災害派遣の自衛隊が駐屯していた。無論、ガス、水道は出ず、仮設トイレが届きつつあった。

阪神・阪急・JRの寸断と、2号線、43号線の交通規制の影響等で、主たる交通手段が遮断されたなか、グラウンドの隅のテニスコートに登校した353人（約4割）の生徒を前に、学校長から教師1

人と学友7人の死が伝えられ黙禱をする。生徒指導部から2月1日の再登校の指示と、今後の見通しが伝えられ、生徒はいったん教室に入り、担任による被災状況の調査、他の生徒の安否確認がなされた。

職員は17日直後から、学校長の指揮のもと、出勤できた者で電話による安否確認と、緊急の対策に追われた。1月20日、立ったままの職員会議がもたれ、緊急対策組織が発表された。この時期の過密な学校スケジュールの消化と、入試日程等の変更の対策に加えて、学校再開に向けての校舎の点検・整備から、臨時時間割りの作成、入試準備、学校生活に関する諸々の対策、合同追悼式（お別れの会）の手配まで、職員は息つく間もなかった。まじかに迫っていた2年生の修学旅行は、中止された。

## (2) 私たちの呼び掛けたこと

2月1日、予想を越えて、82%も登校した生徒たちに向かって、明日からの授業の再開を伝え、「このような状況での学校再開は、何かと落ち着かず、途方に暮れがちですが、被害は最小限に抑える努力を、各人がしてほしい」、「建物が荒れたからといって、心まで荒廃しないよう、お互いに励まし合って、建設的な第一歩を今日から歩んでほしい」、「学校に来るといふ普段の生活を取り戻すなかで、非常時に、平常心を保つ努力を、各人が心掛けて欲しい」、「余力のある人は、すすんでボランティア活動に参加してほしい」等と文書を配り、口頭で呼び掛け、電車・バスを乗り継いで学校に来る努力を具体的に要請した。臨時に自転車通学の許可がなされた。

交通手段の寸断されたなか、数時間かけて登校する生徒も見られた。2週間後には90%が登校し、3月上旬にはほぼ平常の登校状態となったが、なおこの時期にも1、2年の70人程は、2時間以上かけて通学していた。

学年末考査が終了した3月15日からは、生徒に実施したアンケート調査を踏まえて、生徒の運動不足の解消、ストレスの発散を考慮して、部活動が解禁にされた。終業式は1週間遅れの3月29日にもたれ、直前まで授業の補講がなされた。

## (3) 生徒に書かせた作文から

生徒全員に書かせた作文から、被災の大小にかかわらず、多くの生徒は一時的であれ、人間の無力さに放心状態に陥ったものと想像された。生徒の中には、火災消化活動に加わったり、瓦礫の下から人を救助したり、避難した先でボランティア活動に加わることで、自らを支えた者もいる。しかし多くの、茫然とテレビの映像を見続け、当面やることを見失ったかに見える生徒たちに対して、学校に来るといふ普段の行動をするなかで、普段の心を取り戻していくことを期待したことは、ほぼ成功したと信じている。学校が始まり、中にはそれどころでないと辛い思いをした者もいたかもしれないが、被災を無為の口実にさせないためにも、ある種の枠付けは教育的にも必要なことであつたろう。また、人が会すれば話が始まる。未曾有の出来事の恐怖や不安を、友達との雑談の中で解消させることは、有効にして必要なことだった。

また生徒の作文から、被災の大きい生徒ばかりでなく、比較的軽微な被災ですんだ生徒においても、

軽微な生徒は、別の意味で事態を深刻に受けとめていることが明らかになった。彼らは決して、被災を免れたことを、無条件には喜んでいなかった。

友達の死に涙が出ないことで、過度に自分を責めてみたり、自分が生きていることを罪悪視するような記述がみられた。あるいは、ボランティアの人達の活動に感動する一方で、ただ学校へ通うだけの自分を恥じる者など、無用な罪悪感に苦しむ者もみられた。これらは、ごく一部の生徒の心理的特徴と済ませてよいのか？心のケアは、被災の大きい者にばかり必要である、というのではない。被災の軽微な生徒も、軽微な生徒なりに傷ついたものと思われる。ただ、これらの傷は、登校して友達と気持ちを共有するなかで、自然と癒されていくものと思われ、彼らの自己治癒力を信じたい。

また作文には、「失ったものは大きい、得たものも大きい」との記述が多くみられ、彼らの健全さ、逞しさも評価したい。

#### (4) 残されている問題

学校が始まり、生徒にとっての現実が動き出すと、目の前の課題が優先されるために、心の問題は、一時的に棚上げされるか、背景に退く、あるいは心の奥にしまいこまれてしまうようである。これは、プラス・マイナス両方の意味をもつものと思われる。現実に対応するというプラスの側面と、未解決の問題を後に残すというマイナスの側面とを。

生徒の中に、「学校が始まり、毎日の生活を取り戻していかなくてはいけないと思うが、地震が起きた現実を忘れて普通の生活を始めてよいのか、と思ったりする」(全壊の生徒)、「心は悲しみで一杯だ。だけど悲しんでばかりもいられない。だからなるべく表には出さない。・・・この出来事をいち早く忘れたい。でも忘れてはいけないという気持ちもある」(母親を亡くした生徒)等、書き記した生徒がいる。これらは現実の生活を優先する余りに、抑圧されて未整理のままに残される心の問題を示唆しているように思われる。今後、この生徒たちに対してどう取り組めばいいのだろうか？

### 3. 新年度以降の私たちの取り組み

健気に気を張っている生徒に、独りよがりの優しさを示して、依存させるようなことはやるべきでない。心的外傷後ストレス障害(PTSD)なる言葉が、ジャーナリスティックに賑わっているが、概念を知ることの有用性と、それを使うこととは、厳密に別であると思う。道具があると、それを使いたがるのは人の常だが、ことさら「PTSD」を造り出す必要はない。生徒の「張った気」は、支えてやってこそ、相手に寄与するところとなるであろう。では、私たちの出来ることは？

4月以来、私たちが取り組んできたことを、時間の流れにそって、その概略をまとめておきたい。

#### (1) 教育相談研究委員会の組織化(4月上旬)：資料1

県の兵庫県南部地震被災生徒教育相談研究、および文部省のスクールカウンセラー活用調査研究の指定を受けて、新たに教育相談研究委員会が組織化された。その具体的な目的や内容は資料1に譲るが、計画の大きな特徴の一つは、教育相談を、狭く治療的な機能に限定せず、本来的な生徒指導

との連携をはかりつつ、開発的、予防的な機能をもつものとして捉えていることである。端的には、心のケアにも、癒すと同時に、発達段階に則した鍛える側面も必要、との観点にたっていることである。

## (2) 定期面談週間の設定と実施（4月中下旬）

4月に、HR担任教師による全生徒への個人面談が実施された。特に、震災後の生徒の生活状況、心理状況の掌握に努め、話をさせることでのストレスの解消を念頭において、受容的な雰囲気の中かで実施された。また、それ以降の生徒・教師の日常的な相談関係、良きコミュニケーションを形成していくための布石、呼び水となるように配慮して実施された。

## (3) 全校生徒対象のCMI健康調査の実施と分析、活用（5月上旬～6月上旬）：資料2、3

被災による配慮すべき生徒の状況把握の努力は、一応、全生徒の面談で終わっていたが、より細かに、客観的に、身体的・心理的配慮を要する生徒をスクリーニングするために、5月10日、全校生徒を対象に「CMI（コーネル・メディカル・インデックス）健康調査」と次項の「阪神大震災被災アンケート調査」を実施した。この結果からさらに、生徒個々の心身両面にわたる疲労度や、自覚症状、生徒の一般的傾向を掌握して、生徒の面談、観察に活かす努力がなされた。

CMIの集計結果は資料を付けているが、CMIはこの集計結果よりも、生徒個々のデータの方に実際の意義があり、担任が個人面談や観察に活用できるように、委員会の方で全生徒のCMI概略プロフィール一覧表（身体的、心理的不調、気になる症状を幾つ訴えているかを示したもの）を作成し、さらに不調の訴えの多い生徒164人については、個人カードを別に作成して、担任にフィードバックした（判定領域の結果は特に示さなかった）。ただ、これらのデータは、日常的、継続的な我々自身の観察結果と比較しながら活用すべきもので、決してCMI結果を絶対化しないよう留意願った。

CMI結果から、面接を要する生徒への随時的な面接を委員会からも担任に要請したが、面接にあたっては、特に、次のような理解が必要であることを研修した。

①人は感情を表出し、言語化することによって、辛い体験を対象化し、その体験を整理可能な距離に置くことができる。

②人が感情を表出するには、それを聞いてくれる相手が必要であり、感情の表出は、特に安心感のある人間関係の中で行われる。

③同情的なコメントは、相手をかえって惨めな気持ちに追い込むので不要である。

④教師から話しすぎると、本人の体験の個別性、独自性が無視されてしまう。

⑤CMIの「気になる不調項目」のうち、①～④については、人間的なつながりが支えになり、⑧⑨については、恐怖の内容やどういふ時そうなのか、事情をきいてやるとよい。⑦の攻撃性については特に問題としなくてよいなど。

#### (4) 『阪神大震災被災アンケート調査』の作成と調査実施（4月下旬～5月上旬）：資料4

CMIと一緒に実施した上記アンケートの結果の一部は、資料を付けている。アンケートの趣旨等は資料2に譲るが、項目の作成に当たって、委員会として特に留意したことが二つある。その第一は、全生徒に書かせた被災体験作文から、生徒の少なからずが、不要な罪悪感、自責の念に葛藤する姿が明らかになったことから、アンケートはただ客観的な事実を掴むのではなく、アンケートに答えることで、ある心理傾向を学習し、その解消をもくろんだことである。具体的には、友達の死や被災の軽微さといったことに、時として自責の念や罪悪感をもつといったことが、誰にでも起こりうることを知らしめることは意義あるものと思われ項目を工夫した。第二に、この時期のアンケートとして、特に、例えば「学校に行きたくない気持ちが起こることがある」といった項目を極力除外したことである。こういう項目は、こういう心理を誘発させ、容認する恐れがある。現に生徒の心理状況がそうであればなおさらのこと、こういう時期には、客観的事実を掴む研究より、指導という観点を優先させるべきであると判断された。

#### (5) 教育相談にかかわる職員研修会の実施（6月13日）

本年度の本校スクールカウンセラーに決定予定の馬殿禮子先生（前宝塚市立教育総合センター所長）をお招きして、①震災後の生徒・職員の心のケア、精神衛生について、②担任が教育相談をすすめる上での留意点、③教員相互、他機関との連携のとりかた等について講話を願った。講話のなかでは、PTSDや、早期に復旧活動に加われなかった教師の自責感に伴う心理的トラブル等も紹介された。

#### (6) 相談室の整備と開設、駐在委員の決定、相談室だよりの発行（6月下旬）：資料5、6

相談室を整備して、6月以降、教育相談研究委員会の中の3人の相談委員が、毎週月、木、金曜日の4時～5時のあいだ相談室に待機して、来談する生徒の相談にあたる態勢を整えた。また、養護教諭は従来どおり、保健室で相談活動を行うこととした。

自発的に来談する生徒はまだ少ないが、機会をとらえて話をしたり、呼び掛けて相談室に誘ったりと、2学期以降は徐々に相談室も活用されつつある。学校教育相談は、深刻な事例ばかり取り扱うのでない。むしろ些細な、ちょっとした悩みに付き合うものである。来談を待つばかりでなく、相談員が動き廻って、廊下を相談の場にすることも可能なのである。ともあれ、相談室には気軽に、グループで来てもよいと生徒には呼び掛けている。また相談室だよりの発行に努めている。

#### (7) スクールカウンセラーの紹介と全校生徒向け教育相談講演会の実施（7月17日）

7月17日に、全校生徒に対して、2学期から本校のスクールカウンセラーとして相談室に駐在していただく馬殿禮子先生を紹介（この時点ではまだ文部省の正式辞令がでてなかった）し、そのあと「青年期のころ」と題してお話し願った。講話の内容は、震災後の一般的心の動きに触れられて、エネルギーを使い果たしている人は相談室を利用してほしい、と呼び掛けたあと、青年期に特徴的な繊細な対人関係や、自己像との関係など多岐にわたった。生徒の聞く態度も良く、眼を閉じてごらん

なさいと呼び掛けると、ほとんどそれに従ったことに驚いておられた。

#### (8) 担任による生徒の面談（ないしは観察）の所見一覧表の回収（7月下旬，10月中旬）

夏休み前に、CMIの個人データ等を踏まえて担任が実施した面談等から、気にかかる生徒のリストアップをしてもらったところ、学習面の不調や身体的不調、心身的不調、対人関係、生活指導上、不登校といった様々な学校不適応内容が報告され、全学年で65名の生徒が担任の眼にとまった。二学期になって10月中旬、中間考査前に再度報告してもらおうと、全学年で23名の生徒が挙げられた。

#### (9) スクールカウンセラーの活用に関する連絡調整

本年度から文部省の指定を受けて、県下の県立高校では、本校にのみ導入されているスクールカウンセラーの職務は、文部省の「実施要項」によると、校長等の指揮監督の下に、概ね、①生徒へのカウンセリング ②カウンセリング等に関する教職員及び保護者に対する助言・援助 ③生徒のカウンセリング等に関する情報収集・提供 ④その他生徒のカウンセリング等に関し各学校において適当と認められるもの、といったことを行うとされている。

本校では、昨年度から既に職員研修の講師としてお招きしていた馬殿禮子先生をスクールカウンセラーに迎えることができ、先生を教育相談研究委員会のコンサルタントとして位置づけし、概ね以下のような勤務態勢で、多岐にわたる職務を担当していただいている。

勤務は原則として、毎週水曜日の午後1時～5時、金曜日の午前8時半～12時半の時間帯で、相談室に駐在。水曜日をお願いしたのは、HRでの講話やワークショップの実施を念頭に入れている。また、金曜日には職員朝礼にも参加していただき、学校の雰囲気を知っていただくとともに職員とのコミュニケーションをお願いしている。

職務内容は、①職員研修会の講師 ②生徒向け講演会の講師 ③PTA向け講演会の講師 ④生徒へのカウンセリング ⑤担任教師へのコンサルテーション ⑥教育相談委員会、学年会へのコンサルテーション ⑦保護者に対する援助、カウンセリング ⑧HRでの講話やワークショップ、といったことを念頭において、すでにそのほとんどを担当していただいている。

#### 4. おわりに

さて、私たちの取り組みの中間報告は、ひとまずここで置くことにするが、一学期は私たちにとっては慌ただしく、生徒たちにとっては、一見、何事もなかったかのように過ぎたように思われる。生徒たちは、事態を真摯に受けとめてくれたようで、震災に乗じて羽目を外すこともなかった。ただ、5月の中間考査が終わったあと、ふっと気の緩みが出たのか、全般的に遅刻欠席が見られた。しかしそれもどうにか乗り越え、例年より事件もなく終業式を迎えた。

次の私たちの気かけは、長い夏期休暇を彼らがどう過ごかであった。ふたをあければ、それも例年とそう変わりはない。9月は、学校祭が2学期に移ったことで、教師生徒ともども慌ただしい毎日を過ごした。学校祭は、「復興」をテーマに、生徒会執行部を中心に、各クラス、文化部ともそれぞれが熱心に取り組み、全クラスが復興宣言の寄せ書きの色紙をつくった。これは生徒会執行部の

手で、全国の義援金等の支援を寄せて下さった30余りの個人や団体に送られる予定である。生徒の多くは、被災（受け身）から能動的に心を整理し、震災に一応の心理的区切りをつけてくれたものと思っている。

心の問題は、眼にみえにくく、とらえがたい。これからの私たちは、スクールカウンセラーの援助を得て、わずかな兆候から、それと気付く眼を養う研修体制を組みたいと思う。また、それと気付いても、いたずらにこと挙げせず、日常的な接触のなかで、それとなく支える職員の力量、協力体制を積みたいと思っている。

（ 文責 木佐貫 ）

# 資料 1

平成7年度兵庫県南部地震被災児童生徒教育相談研究（指定）年間実施計画書

兵庫県立芦屋南高等学校

## 〔1〕研究の趣旨

### 1. 研究の目的：

兵庫県南部地震によって、地震の恐怖感や肉親の喪失、自宅の損壊などの精神的なショック等を受けた被災生徒の心の傷を癒したり、日常生活の諸々の悩み等の解決を目指すとともに、生徒指導の充実、強化に寄与する教育相談のあり方等についての研究を行う。

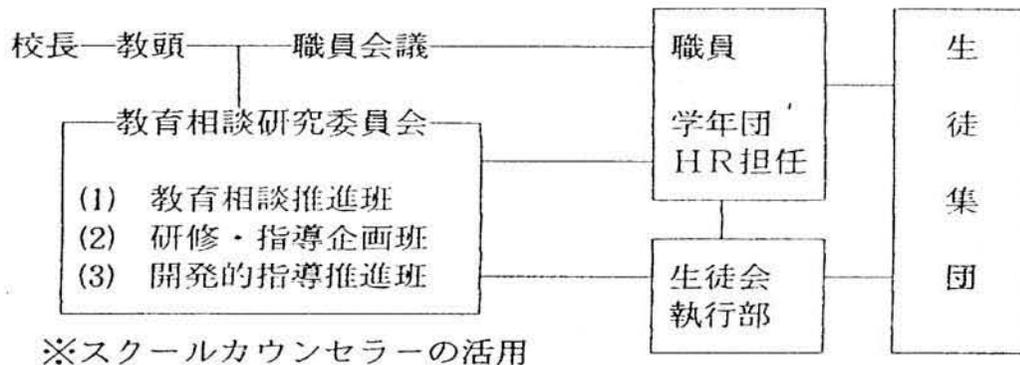
### 2. 研究指定期間：平成7年度1年間

### 3. 調査研究内容

- (1) 精神的な援助を必要とする生徒に対する教育相談をいかに充実するか。
- (2) 教育相談に対する教職員の理解と力量をいかに高めるか。
- (3) 人間的なふれあいに基づく生徒指導をいかに推進するか。

## 〔2〕研究の組織と研究・実践の概要について

### 1. 研究・実践組織



### 2. 教育相談研究委員会委員

木佐貫正博，深田崇子，斎藤富美代，上野仁史，山本伸吾，岡本 晶  
木村信吾， 倉 芳博，屋島哲也， 田原美生（教頭）

### 3. 研究・実践計画内容

#### (1) 教育相談班：

心理的な援助を必要とする生徒に対する教育相談の実践と研究にかかわる。自発的に来談する生徒の相談のほか、気にかかる生徒の呼び掛け相談，担任から委託された相談にかかわる。

- ① 面談週間の企画や教育相談活動（精神衛生，健康相談など）
- ② H R 担任へのコンサルテーション
- ③ 随時的な事例検討会議
- ④ 配慮を要する生徒の掌握，事例追跡調査など

- ⑤ グループ・カウンセリングの構成
- ⑥ 保健便り，精神衛生便りの発行
- ⑦ 教育相談の案内，啓発

(2) 研修・指導企画班：

教育相談に対する教職員の理解と力量を高める研修の企画や，生徒に対する指導の企画，実践，研究等にかかわる。

- ① 職員研修の企画
- ② 精神衛生講演会の企画
- ③ 教育相談室の整備
- ④ 各種アンケート調査（健康調査，意識調査など）と分析
- ⑤ 読書指導（図書コーナー，図書案内など）
- ⑥ 授業の中の指導計画の調整（現代社会，保健体育，家庭における指導）

(3) 開発的指導班：

生徒会活動，部活動，HR活動，各種行事などの関わりのなかで，人間的なふれあいに基づく生徒指導の企画，実践，研究にかかわる。

- ① 部活動における健全育成，学年を越えた対人関係の指導
- ② 福祉ボランティア活動における援助活動の推進
- ③ 学校祭等における開発的指導（被災（受け身）から能動へ心の整理）  
（例）復興をテーマとしたパネル展示，現地調査，ボランティア体験発表，被災体験の共有，各人の復興宣言など
- ④ HRガイダンス，HR集団づくりの推進  
（例）・HR活動で，震災をテーマにした内容を取り上げ，被災体験を共有し，受け身から能動へ，心の整理をしていく。  
・支え合うHRづくりとしての親睦的内容の活動企画。

4. 研究・実践の年間計画

4月	定期面談	9月	HRガイダンス
5月	健康調査，意識調査 相談の啓発	10月	芦南祭，
6月	職員研修	11月	定期面談
7月	精神衛生講演会 不登校生徒のケア	12月	事例会議
8月	サマー福祉ボランティア	1月	不登校生徒のケア
		2月	追跡調査
		3月	研究のまとめ

※ 年間継続的取り組み

- ・随時教育相談，HR担任へのコンサルテーション，保健・精神衛生便り
- ・福祉ボランティア活動の推進
- ・部活動における健全育成
- ・生徒会，委員会，HR集団づくり
- ・スクールカウンセラーの活用に係わる研究
- ・委員に時間加配された時間を活用した随時的委員会の開催

## 資料 2

平成7年5月7日

健康調査（CMI），アンケート調査実施にあたって

教育相談研究委員会

生徒の作文を分析すれば、被災の大きい生徒はもとより、軽微な被災ですんだ生徒においても、決して彼らは、当初、被災をまぬがれたことを無条件には喜んでいない。友人の死に涙が出ないことで、過度に自分を責めたり、自分が生きていることを罪悪視するような記述もみられる。あるいは、ボランティアの活動に感動する一方で、ただ学校に通うだけの自分を申し訳ないと思ったりしている。これらは、ごく一部の生徒の心理的特徴とすませていいか？ 被災の軽微な生徒も、当初は、軽微な生徒なりに、傷ついたものと思われる。

また、生徒のなかに、「学校が始まり、毎日の生活を取り戻していかなくてはいけないと思うが、地震が起きた現実を忘れて普通の生活を始めてよいのか、と思ったりする」（全壊の生徒）、「心は悲しみで一杯だ。だけど悲しんでばかりもいられない。だからなるべく表には出さない。・・・この出来事をいち早く忘れたい。でも忘れてはいけないという気持ちもある」（母を亡くした生徒）等、書き記す者もあり、これらは現実の生活を優先する余りに、抑圧されて未整理のままに残されている心の問題を示唆している。今後の観察や調査で取り組むべき課題かと思われる。

### 1. 健康調査（CMI）のねらい

生徒の疲労感や心身両面にわたる自覚症状を調査し、要面談生徒のスクリーニングに資する。ただし、調査結果だけを絶対視せず、日常の継続的観察と併用して、決して面談の強要にならないように、また相談の呼び掛けに不安がる青年心理には、十分過ぎる配慮をする。

### 2. アンケート調査のねらい

- (1) 被災の大きい生徒、軽微な生徒の、それぞれに、どの様な配慮すべき特徴が見られるのか？ また、その特徴的な男女差はあるのか？
- (2) 被災の大きい生徒、軽微な生徒、また男女のそれぞれに対して、立ち直りの早い遅いがあるとすれば、何に起因するのか？ 生徒個々の性格特徴、家族関係の安定、友人関係の安定、教師関係の安定、充実した部活動、趣味の有無、学習・進路意識の明確さなどとの関係をもて、今後の指導に活かす。

### 3. 実施と留意点

〔日時〕 5月10日(水) 6時限のHR(50分一杯を使う)

〔方法〕 出席番号順の座席

(1) 生徒への案内：不安感を与えないよう、実施の前に協力を依頼する。

(例) 「これからしてもらう調査は、震災に会った君達の心身の状態や、感じたことなどを調べるものです。プライベートな内容も含んでいますが、人に見せたりするものではないので安心して書いてください。また、どう答えても、どれが正しいとか間違っているというものでもありません。正直にありのままに回答してください」など。

※ なお不安がる生徒には、本人に不利益になるような取扱いは絶対にしないこと  
また、ごく限られた教師で統計的な処理をすること、などを付け加えてよい。

(2) 最初に、CMIを配付(男子用、女子用あり)する。

姓名、年齢、被災時の住所、姓名の上に学年・組・番号を書かせ、「記入の注意」を読んでやりなさい」程度の教示でよい。時間は25分程。AからRまでの質問に答えさせる。ミシン目は破らない。処理は委員会で実施。

※ 記入に際して、「いつも」と「よく」をどのように区別したらよいかとか、どの程度の自覚症状があったら「はい」と答えてよいのか、などの質問には、「自分の常識的な判断で、適当に記入して下さい」と説明しておくだけでよい。それでは納得出来ずに、しつこく質問を繰り返したり、不当に時間を要したり、書き変えたり、途中で記入を放棄するなどの行為は、それ自体が何らかの情緒的トラブルを示唆する。記載の無理強いをせずに本人の意思を尊重する。本人に不利益になるような取扱いは絶対にしないこと、を繰り返し述べてもよい。

(3) 次に、アンケート調査を配付する。

CMIの記入の進み具合をみて配付する。表紙に氏名等を記載させて、CMIの終わった者から回答させる。

※ 記載に疲れたり、生徒によっては、記憶が過去のものになりつつあって、集中力を欠くなどの場合には、「貴重な調査だから真剣に回答して下さい」と、重ねて協力を依頼する。

(4) 回収は別々に。

# 資料 3

CMI 健康調査表集計 (全体)

平成7年6月5日

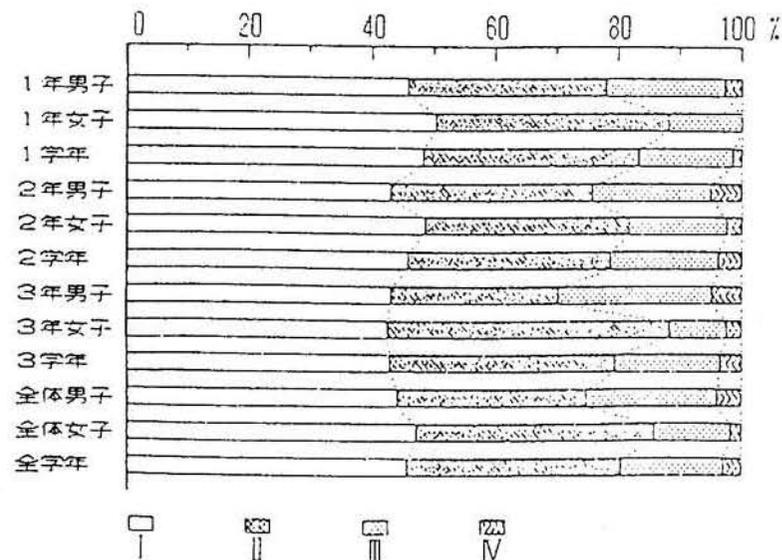
教育相談研究委員会

	男	領 域				気になる不調項目								
		女	I	II	III	IV	①	②	③	④	⑦	⑧	⑨	
1年 男	124	57(45.9%)	40(32.2%)	24(19.3%)	3 ( 2.4%)	5	4	5	1	46	16	1		
1年 女	147	74(50.3%)	56(38.0%)	17(11.5%)	0 ( 0%)	6	4	10	0	39	6	0		
1学年	271	131(48.3%)	96(35.4%)	41(15.1%)	3 ( 1.1%)	11	8	15	1	85	22	1		
2年 男	155	67(43.2%)	51(32.9%)	30(19.3%)	7 ( 4.5%)	6	15	7	2	46	16	1		
2年 女	143	69(48.6%)	48(33.3%)	23(15.9%)	3 ( 2.0%)	7	7	12	0	42	19	5		
2学年	298	136(45.8%)	99(33.1%)	53(17.7%)	10 ( 3.3%)	13	22	19	2	88	35	6		
3年 男	139	60(43.1%)	38(27.3%)	35(25.1%)	6 ( 4.3%)	9	12	6	1	46	16	1		
3年 女	141	60(42.5%)	65(46.0%)	13( 9.2%)	3 ( 2.1%)	10	11	7	2	49	11	7		
3学年	280	120(42.8%)	103(36.7%)	48(17.7%)	9 ( 3.2%)	19	23	13	3	95	27	8		
全学年男	418	184(44.0%)	129(30.8%)	89(21.2%)	16 ( 3.8%)	20	31	18	4	138	48	3		
全学年女	431	203(47.2%)	169(39.1%)	53(12.2%)	6 ( 1.3%)	23	22	29	2	130	36	12		
全学年	849	387(45.6%)	298(35.0%)	142(16.7%)	22 ( 2.5%)	43	53	47	6	268	84	15		

## 気になる不調項目

- ① いつも不幸で憂うつですか
- ② 人生はまったく希望がないように思われますか
- ③ いっそ死んでしまいたいと思うことがよくありますか
- ④ ひどいノイローゼ(神経症)にかかったことがありますか
- ⑦ すぐかっとなったり、いらいらしたりしますか
- ⑧ 何か恐ろしい考えがいつも頭に浮かんできますか
- ⑨ 特別の理由もなく急におびえることがよくありますか

## CMI 領域



## 資料 4

阪神大震災被災アンケート調査（H7. 5月10日実施）集計結果

兵庫県立芦屋南高等学校教育相談研究委員会

### 〔質問1〕被災状況

#### 1. 震災後の心のダメージ

- ・6割以上が冷静に受けとめている（特に男子に顕著）。
- ・11%（100人）は、パニックないし立ち直れないかと思った（特に女子に顕著）。

#### 2. 震災の想起

- ・3割が時々まざまざと思い出し、内4%はいつも頭から離れない。
- ・約半数はたまに思い出す程度と答え、4分の1は忘れていくことが多い。

#### 3. 家屋の被害

- ・全壊・全焼2割，半壊3割。5割が全半壊

#### 4. 避難状況

- ・6割が避難生活を体験し，27%は1か月以上の避難生活を体験。

#### 5. 現在の住居（5月10日現在）

- ・9%（73人）が一時的住居（避難所16人，仮設住宅30人，親類・知人宅27人）

#### 6. 亡くした人

- ・母親2人 ・妹 1人 ・祖父母12人
- ・親友28%

### 〔質問2〕震災後の心理状況

#### 1. 心理状況の変化（直後・2月・5月）

- ・震災直後の心理状況は，非現実感(64%)，恐怖心(61)，不安(59)，ショック(58)，疲労感(45)，悲しみ(40)を強く感じ，以下，抑うつ感(24)，無気力(20)，怒り(19)と続く。かえって気が張った者10%。孤独感，罪責感を強く感じた者が5，6%いる。
- ・この内，恐怖心は急速におさまる(2月9%，5月2%)，不安やショックは徐々におさまる，次に，悲しみ，疲労感，非現実感は，比較的長引いたように見受けられるか。
- ・抑うつ感や無気力に比べて，怒りの減衰が低いのが注目される。
- ・男女差で，震災直後，特に女子に顕著に見られたのは，無気力，悲しみ，抑うつ感，不安，ショック，恐怖心，孤独感など。

#### 2. 震災直後の行動

- ・1割以上の者が，避難所や近所で，ボランティア活動をよくしている。少ししたも含めると5割以上がボランティアをしている。
- ・ほとんどの者が，家の手伝い，身の回りの整理をし，テレビ，ラジオをよく聞いた。
- ・近所・友人をよく訪ねた者2割。何もする気が起こらず家に居たもの2割程（特に女子に顕著）。

### 3. 震災の受けとめ方

- ・自然災害だから仕方がないと、半数以上の者が受けとめているが、割り切れないと強く答えたもの17%。
- ・被害はまだましだったと、半数以上が答え、恐らくその内の半数はひどい被災者に申し訳なく思っているか。
- ・被災の辛さは、被災した者でないと分からないとは、ほとんどのものが認めている。
- ・失ったものも大きいと、4割（特に女子に顕著）が答え、全くそうは思わないと、14%（特に男子に顕著）。

### 4. 人間観、家族関係、人生観の変化

- ・人を信頼する気持ちが高まる(74 %), 一方、人の嫌な部分が目につく(55 %)
- ・家族と話す機会増えた 58 % (特に女子に顕著)
- ・家族との信頼関係増した 54 % (特に女子に顕著)
- ・人生が虚しく 20 %
- ・人生を有意義に過ごそうと 66 % (特に女子に顕著)

### 5. ボランティアに対する意識

- ・ボランティアの人達に、特に大変感激した者 64% (特に女子に顕著)
- ・ボランティアを、ぜひしたい者 13% (特に女子に顕著), 機会があればしてみたいも含めると 62 %。頼むと9割の生徒はしてくれそう。
- ・ボランティアを見ていて、自分が何もしないことに強い罪責感を持ったもの 24% (特に女子に顕著)。多少の罪責感を含めると 82 %。

### 6. 震災後の身体状況

- ・疲労感が顕著 5人に一人。

### 7. 震災のダメージを支えてくれたもの

- ・震災のダメージを、とても、軽減したり支えてくれたものとして、

友達	53% (特に女子に顕著)
家族や親類	48% (特に女子に顕著)
自分の精神力	20% (特に男子に顕著)
市やボランティアの人達	17% (特に女子に顕著)
学校の先生	12% (特に女子に顕著)
部活や習い事	11% (特に女子に顕著)

### 8. 友人の死の受けとめ方

- ・友だちの死を受けとめられず、涙がでないことに自責の念で悩むもの 14 % (男女差なし), そのような気持ちになったものを含めると6割弱。

### 9. 被災者に対する態度 (罪責感)

- ・災害に対する不要な自責, 罪責感で悩むもの 11% (特に女子に顕著), 少しそのような気持ちになったものも含めると7割近く

[質問1] この度の阪神大震災での被災状況に関する次の質問について、あなたに当てはまる番号を選び、○印をつけて下さい。

1. 今振り返ってみて、震災後のあなたの心のダメージはどの程度でしたか？

1. 取り乱して動転した 5%	2. 立ち直れないかと思った 7%	3. 少しダメージを受けた 27%
4. 恐怖や不安は感じていても意外と冷静だった 44%	5. あまりダメージは受けなかった 17%	

2. 今でも震災直後のことを思い出しますか？

1. いつも頭から離れない 4%	2. 時々まざまざと思い出す 25%	3. たまに思い出す 45%
4. 記憶から遠ざかる 6%	5. 忘れていることが多い 20%	

3. 家屋の被害状況はどうでしたか？

1. 全壊・全焼 19%	2. 半壊 32%	3. 軽微な被害 49%
--------------	-----------	--------------

4. 避難しましたか？

1. 避難所に1ヵ月以上 8%	2. 親類・知人宅等に1ヵ月以上 19%
3. 1ヵ月未満の避難 32%	4. 避難せず* 41%

5. 現在の住居はどうですか？

1. 震災前と同じ 80%	2. 避難所 2%	3. 仮設住宅 4%	4. 転居 11%	5. 親類・知人宅 3%
---------------	-----------	------------	-----------	--------------

6. 誰かを亡くしましたか？

1. 父母 2人	2. 兄弟姉妹 1人	3. 祖父母 12人	4. 親友 28%	5. その他 32%
----------	------------	------------	-----------	------------

[質問2] 震災後のあなたの心理状態や行動に関する次の各質問に教えてください。

1. 「震災直後」、「2月上旬」、「現在」のそれぞれの時機のあなたの心理状態に関する次の質問について、当てはまる心理状態の番号に○印をつけて下さい。  
 なお、回答欄の「3・2・1」の番号については、全項目とも「.....」の基準とします。

3. 強く感じた (強く感じている)      2. すこし感じた (すこし感じている)      1. まったく感じなかった (まったく感じていない)

心 理 状 態	震 災 直 後			2 月 上 旬			現 在		
	3	2	1	3	2	1	3	2	1
1. 恐 怖 心	61%	37%	8%	9%	58%	33%	2%	39%	59%
2. 非現実感 (事態が信じられない感じ)	64%	23%	13%	20%	41%	39%	9%	28%	63%
3. 怒 り	19%	27%	54%	12%	26%	62%	8%	18%	74%
4. 無 気 力 (途次くた)	20%	29%	51%	7%	25%	68%	2%	11%	87%
5. 不 安	59%	28%	13%	21%	45%	34%	6%	31%	63%
6. 悲 し み	40%	32%	28%	23%	38%	39%	11%	32%	57%
7. 疲 労 感	45%	29%	26%	28%	36%	36%	10%	24%	66%
8. 孤 独 感	6%	18%	76%	3%	11%	86%	2%	6%	92%
9. 抑 う つ 感 (気分が落ち込む)	24%	32%	44%	10%	29%	61%	3%	16%	81%
10. 罪 責 感 (自分を責める感じ)	5%	10%	85%	2%	9%	89%	1%	6%	93%
11. シ ョ ッ ク	58%	26%	16%	24%	37%	39%	7%	25%	68%
12. 充 実 感 (かえって気が張った)	10%	20%	70%	6%	22%	72%	4%	17%	79%

2. 震災直後からあなたのとった主な行動に関する次の質問について、当てはまる番号に○印をつけて下さい。

	3. よくした	2. 少しした	1. まったくせず
(1)避難所や近所でボランティア活動・手伝いをしていた。	11%	43%	46%
(2)家の手伝い・身の回りの整理をしていた。	66%	31%	3%
(3)近所・友人宅を訪問していた。	21%	49%	30%
(4)しばらくは何もする気が起こらず、家にいた。	18%	42%	40%
(5)テレビ・ラジオなどの視聴をしていた。	68%	27%	5%

3. この度の震災をあなたはどのように受けとめていますか。次のような考えをどの程度感じていますか。当てはまる番号に○印をつけて下さい。

	3. とても思う	2. 少し思う	1. まったく思わない
(1)自然災害だからしかたがないと思う。	52%	44%	4%
(2)なぜ、被災したのか割り切れない気持ちだ。	17%	45%	38%
(3)もっとひどい被害にあった人たちもいるのだから、まだよかったと思う。	53%	35%	12%
(4)もっとひどい被害にあった人たちもいるのだから、申し訳なく思う。	23%	47%	30%
(5)被災のつらさは、被災した者でないとわからない。	72%	23%	5%
(6)失ったものも大きい、得たものも大きいと思う。	42%	45%	14%

4. この度の震災を境に、あなたの人間観、家族との人間関係、人生観にどの程度の変化がありましたか。各項目について、当てはまる番号に○印をつけて下さい。

	4. とても	3. すこし	2. あまり	1. ぜんぜん
(1)人を信頼する気持ちが高まった。	25%	49%	18%	8%
(2)人の嫌な部分が目についた。	22%	33%	33%	12%
(3)今までより家族と一緒に過ごす時間が増え、話をする機会も多くなった。	20%	38%	29%	13%
(4)今までより家族との結びつきが強くなり、信頼関係が増した。	17%	37%	32%	14%
(5)人生が悲観的に（むなしく）なった。	5%	15%	13%	47%
(6)人生を有意義に過ごそうと思った。	33%	33%	23%	11%

5. この度の震災でボランティアの人達に対する次のような考えをどの程度そう思うか、当てはまる番号に○印をつけて下さい。また、あなたのボランティア活動経験についても当てはまる番号に○印をつけて下さい。

	3. とても	2. すこし	1. ぜんぜん
(1)なかなかできることではなく、大変感激する。	64%	31%	5%
(2)被災していない人が援助を向けるのは、人間として当然のことである。	19%	54%	27%
(3)人のために無償で働いているボランティアの人達を見ていて、何もしない自分に対して罪責の念や申し訳ない気持ちを抱くことがあるようです。あなたもそのような気持ちになりましたか。	24%	58%	18%

(4)自分自身も今後ボランティア活動をしてみたい。

4. ぜひしたい	3. 機会があれば	2. 頼まれれば	1. 気が向かない
13%	49%	27%	11%

(5)あなたは今までにボランティア活動をしたことがありますか？(ただし、学校などで全員で割り当てする通学路清掃などの場合を除く)

1. はい 28%	2. いいえ 72%
-----------	------------

6. 震災以後のあなたの身体状況について当てはまる番号に○印をつけて下さい。

- (1)胃腸の調子が悪い。
- (2)頭痛がよく起こる。
- (3)最近特に疲れる。
- (4)食欲がない。
- (5)夜、眠りにくい。

	3. とても	2. すこし	1. ぜんぜん
(1)	4%	19%	77%
(2)	3%	18%	79%
(3)	21%	33%	46%
(4)	2%	12%	86%
(5)	6%	19%	75%

7. 次の項目について、多かれ少なかれ、あなたの被災のダメージを軽減したり支えてくれたりした程度を教えてください。それぞれ当てはまる番号に○印をつけて下さい。

- (1)家族や親類など
- (2)友達
- (3)学校の先生
- (4)市やボランティアの人達など
- (5)部活動や習い事など
- (6)勉強意欲など
- (7)自分の精神力

	3. とても	2. すこし	1. あまり
(1)	48%	36%	16%
(2)	53%	34%	13%
(3)	12%	45%	43%
(4)	17%	39%	44%
(5)	11%	26%	63%
(6)	4%	27%	69%
(7)	20%	52%	28%

8. 突然、友達など親しい人の死を知らされても涙が出ないことがあります。そのことで自分を責める気持ちが働くことがあるようです。あなたも同じような気持ちになりましたか。当てはまる番号に○印をつけて下さい。

4. まったく同じような気持ちで悩んだ 14%	3. 少しそのような気持ちになった 43%
2. そのような気持ちは起こらなかった 29%	1. 泣いてしまった 14%

9. 自分より被災の大きい人達に対して、自分には責任のないことだとわかっているにもかかわらず、どこか悪いような自責の念や申し訳ない気持ちを抱くことがあるようです。あなたもそのような気持ちになりましたか。当てはまる番号に○印をつけて下さい。

3. まったく同じような気持ちで悩んだ 11%	2. 少しそのような気持ちになった 56%
1. そのような気持ちは起こらなかった 33%	

[質問3] あなたの性格傾向や学校生活、家庭生活について当てはまる番号に○印をつけて下さい

	3. はい	2. どちらともいえない	1. いいえ
(1) 親しい友人関係をもっている。	83%	15%	2%
(2) 性格的に明るいほうである。	58%	38%	4%
(3) 悩み等を話せる友人がいる。	70%	24%	6%
(4) 勉強に積極的である。	11%	55%	34%
(5) 授業をよく理解している。	12%	70%	18%
(6) 進路のことを真剣に考えている。	47%	42%	11%
(7) 相談できる先生がいる。	22%	51%	27%
(8) 親しみを感じる先生がいる。	33%	42%	25%
(9) 先生と話す機会をもとうとしている。	17%	53%	30%
(10) 部活動に入って充実感をもっている。	36%	24%	40%
(11) HRや学校行事には協力的である。	15%	59%	26%
(12) クラスのなかにいるのが楽しい。	42%	49%	9%
(13) 家族はお互いに理解しあっている。	40%	51%	9%
(14) 家にいるのが楽しい。	34%	53%	13%
(15) 家族の者とよく話をする。	49%	40%	11%
(16) 自分の性格を気に入っている。	18%	60%	22%
(17) 何をするにも自信がもてない。	13%	65%	22%
(18) 劣等感に悩まされる。	13%	55%	32%
(19) 会などの時は人の先に立って働く。	6%	46%	48%
(20) 自分で話すより人の話を聞く方である。	34%	52%	14%
(21) 人目に立つようなことは好まない。	24%	61%	15%
(22) 人中出现てもまごつかない。	16%	69%	15%
(23) 打ち込める趣味がある。	44%	38%	18%
(24) 趣味に時間をかける方である。	37%	42%	21%
(25) 趣味は気分転換になる。	66%	25%	9%

## 資料 5

生徒 のみなさんへ

平成7年6月22日

### 1) 生徒の相談室があるのを知っていますか？

(カウンセリング・ルーム)

新学期が始って3ヵ月、新しい仲間づくりはできましたか。ほとんどの人が楽しい充実した学校生活を過ごしていると思います。でも学校を休みがちの人、体調のすぐれない人、表情のかたい人はいませんか。毎日の生活のなかで悩んでいることや、心配なことはありませんか。どんなことでも相談に応じます。気軽に利用してください。

相談室は、1号館3F図書室の隣にあります。

### 2) 例えば次のようなときに相談してみては？

1. 自分の性格、健康、勉強、進学、就職等について悩んでいるとき
2. 学校、家庭、友達、先生、家の人との関係で困っているとき
3. 人に疑われたり、うわさされたり、いじめられたり、また物を盗まれたりして困っているとき
4. その他、どんな小さなことでも結構です。

### 3) 私達の出来ること

ただ私達に出来ることは、あなたの心配事なり、願いなりを解消し、達成するために一緒に考えていく事だけですが、きっとお役に立てると思います。あなたの迷惑にならないよう約束を守り合って、真面目に相談にのります。もちろん成績にも関係しません。進んで相談、よりよい解決、そして明るい学校生活を送りましょう。

### 4) 相談したいときには

- ・気軽に声をかけて下さい。
- ・直接、次の曜日、時間帯に気軽に相談室をのぞいて見て下さい。
- ・グループで来てもかまいません。

\*相談担当者の割り当て

月曜日	上野先生	16:00~17:00
木曜日	深田先生	16:00~17:00
金曜日	木佐貫先生	16:00~17:00



兵庫県立芦屋南高等学校生徒相談室  
担当者一同 (木佐貫 ・ 深田)  
(上野 ・ 斎藤)

## 心の中をのぞいたら

心の中にポッカリ穴が・・・こんな経験をしたことがありますか？

身近な体験ですと、お祭りのあと、誰にでも、虚脱感というか、何かボーッと空しい思いにとらわれたことがあると思います。

何かに夢中になって、心がそれに没頭し、一所懸命に取り組んでいたとき、それが終わってしまうと、終わったとたんに、まるで心の中的一所懸命になっていた自分までが失われてしまったかのような体験です。

難しい言葉でいうと、対象喪失が自己喪失を引き起こしてしまったかのような体験です。

私たちの心の中には、いろいろな「自分」、時には矛盾した様々な「自分」があると考えてみればどうでしょう（そもそも一体、自分って何でしょう？）。

たとえば、親に甘えている子供としての自分、生徒としての自分、クラブの先輩としての自分といったものから、男あるいは女としての自分、趣味に没頭している自分、笑っている自分、怒っている自分、明るい自分、暗い自分といったものまで、私たちは、時と場合によって、色々な自分を使い分けて生活しているようです。もちろんそこには、首尾一貫した変わらぬ自分があるはずですが・・・。

さて、お祭りの話にもどしますと、お祭りに一所懸命になっていた自分は、お祭りの終わりとともに失われてしまいます。お祭りを心の支えにしていたとすれば、その人の心の中には、大きな穴がはっきり空いたような気持ちとなって体験されるでしょう。

震災でも私たちは多くのものを失っています。親しい人たちや住む家、大事にしていた物といったハッキリとしたものから、見慣れた風景や雰囲気、感覚といったハッキリしないものまでも、知らずに失われています。

大切なものを失ってしまうと、多かれ少なかれ、それとつながった心の中の自分までが失ってしまうかの体験を、私たちはしてしまいます。

失うことに付随する哀しみは、避けることは出来ませんが、それを経ないと新しいものも得られない、とも言われます。〈悲しい作業〉については次回でも紹介するとして、今はただ皆さんが、自分の取り組むべき何かをさがしとめて、はっきり空いた穴に、新しい充実した自分をとりもどしてくれることを願うばかりです。

## 透明なる魂

人間の魂にとって、いちばん大切なことは、その魂の本が、清らかであるということなのだ。

魂の根っこが、よく洗われ、  
不純なものがないということなのだ。

魂が透明であるということなのだ。

### スクールカウンセラーの紹介

馬殿 禮子 先生

宝塚市教育委員会・参事（教育総合センター担当）

教育総合センター所長 本年3月ご退職

臨床心理士

日本箱庭療法学会理事

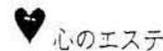
兵庫県臨床心理士会副会長

武庫川女子大学講師  
兵庫県教育相談委員



専門分野

臨床心理学（カウンセリング・箱庭療法）  
教育心理学（発達・適応）



心のエステ

## リラックスしましょう！

ストレスを感じたら、まず身体の緊張をほくしてあげましょう。

身体の疲れは心に、心の緊張は身体に、私達の心と身体は、相互に影響を与えあっています。心と身体は一体です。危険信号を早めにキャッチしてケアしてあげましょう。

複雑な人間関係で、落ち込んだりイライラしたり。食生活ではビタミンやカルシウム不足など、ストレスの原因はたくさんあります。日頃から適度な運動をしたり、バランスのとれた食事をして、ぐっすり眠ることが大切です。疲れているのに眠れない・・・

こんな時は、ぬるめのハーブ湯につかってリラックスしたあと、ゆったりとしたイスに腰掛けて深呼吸をしてみましょう。就寝前の30分は眠りのためのウォーミングアップだと思って。



エ イズよりも恐ろしい疫病が  
アメリカを襲っている。

1989年、フランス国外で輸入  
品から人間に感染した場合、致死  
率90%のウイルスが発見された。

「ニボラ」と名付けられたこの  
ウイルスは、人間に感染すると体  
中から出血し、内臓がどうどうに  
溶けて死に至る。USAMRIID（米  
国陸軍伝染病医学研究所）は特  
別チームを率い、何とかこの殺人  
ウイルスの蔓延阻止に成功した。  
本書は、この事件を契機に描いた  
ノンフィクション作品だ。研究所  
内の高度警戒ゾーンは、扱うウイ  
ルスの危険度に応じて4つのレベ  
ルに分かれている。その最も危険  
（ホット）なウイルスを扱うレベ  
ル4の区域が「ホットゾーン」と  
呼ばれている。

これだけ医学が進歩した現代に、  
人類への挑戦の如く現れた新ウイ  
ルス。私たちにとって「未知とは何な  
のか」を考えさせられる書だ。（書）

心地よい眠りのために



私たちの復興宣言

生徒会の選んだ第10回芦南祭のテーマ「新しい飛翔をめざして」は、今の私たちにあっては、最もびったりなテーマだと思います。信じがたい震災体験を経ても、今私たちの多くは、あたかも何事もなかったかのように、着々と普段の生活にもどつつあるように思えます。それは人間の持つたくましい適応能力の証(あかし)なのかもしれません。

米国の精神科医ホルムスらは、重大なストレスになる生活上の変化を、下の表のように数値化しました。この表によれば、親しい人の死や別離といった対象の喪失が、最も大きなストレスとして数値化されています。

対象の喪失を広く人物以外にも、「住みなれた環境や地位、役割などからの別れ」まで含めると、引越や昇進、進学といったものまでが、ストレスとなりうるということがわかります。つまり、一体感をもっていた親しい人物や環境が喪失されると、人は一時的にも心の拠り所を失って、多かれ少なかれ心の安定を失うということでしょう。

対象の喪失は、悲しみをもたらす、それはしばしば悲痛な体験を人に強いますが、これは言うてみれば、ごく自然な心の流れです。問題なのは、対象喪失からもたらされる、「自己喪失」であると思われれます。

時には生身の人間として、取り乱しても、悲しみは悲しみとしてしっかり受けとめ、安定を欠いた自分を体験することが、取りも直さず自己を喪失しないことであると言えるかもしれません。

泣き言や愚痴や文句を言っているうちに元気がでるかもしれません。自分を喪失しないよう、大きな声で自分なりの復興宣言をしてほしいものです。

変化に対応するためのストレス (Holmes, T.)

出来事	ストレス値
配偶者の死	100
離婚	73
配偶者との別れ	65
拘禁	63
親密な家族メンバーの死	63
怪我や病気	53
結婚	50
職を失うこと	47
引退	45
家族メンバーの健康上の変化	44
妊娠	40
性的な障害	39
新しい家族メンバーの獲得	39
職業上の再適応	39
経済上の変化	38
親密な友人の死	37
仕事・職業上の方針の変更	36
配偶者とのトラブル	35
借金が1万ドル以上に及ぶ	31
借金やローンのトラブル	30
仕事上の責任の変化	29
息子や娘が家を離れる	29
法律上のトラブル	29
特別な成功	28
妻が働きはじめるか、仕事を止める	26
学校に行きはじめるか、仕事を止める	26
生活条件の変化	25
個人的な習慣の変更	24
職場の上役(ボス)とのトラブル	23
労働時間や労働条件の変化	20
住居の変化	20

※相談申し込みカードを職員室前、相談室前に設置しました。利用してください。

ちょっと気になること聞いてみませんか?  
(グループでもかまいません。)

相談申し込みカード

年 月 日 氏名

▼相談の内容はどんなことですか

・通学・習字・仕事・友人関係  
・学習・身体のこと・行動  
・その他( )

★相談を希望する日時を教えてください。  
・日時を指定したい

月 日 ( ) 時 分

・指定しない(先至の順番に案内する)

★日時決定の連絡方法を教えてください。(〇印)

・担任から連絡してもらう。  
・相談担当(保田)から連絡してもらう。  
・その他の方法(希望する方を指定してください)

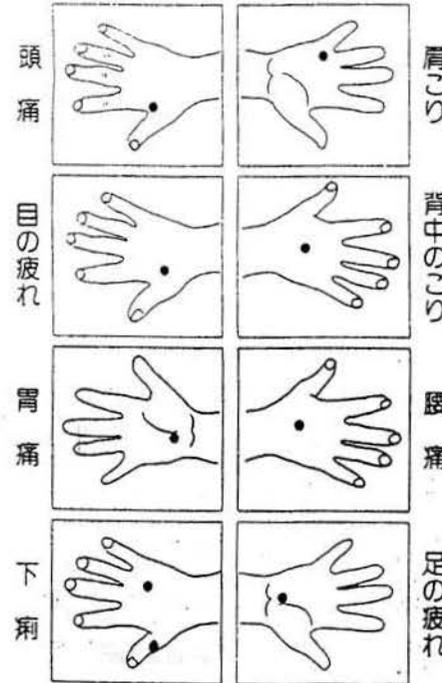
( )

本リトリ

年 月 日 氏名 さんへ

月 日 時 分に  
相談室へお越しください。

ストレス解消指圧のツボ



ベストセラーから 『ソフィーの世界—哲学者からの不思議な手紙』  
ヨースタイン・ゴルデル 著 須田明彦译/池田香代子訳  
日本放送出版協会 2,500円



世界的ベストセラー“事件”を巻き起こしている哲学ファンタジー。「あなたはだれ?」「世界はどこから来た?」14歳の少女ソフィーに届けられた謎の封筒の問いかけ。ソクラテス以来の西洋哲学史が絶妙な比喩と語り口調で、いきいきと展開されていく。

高校教師だった作者の意図は、子供たちにやさしく哲学を語ること、授業は対話形式でやっていたというだけに“哲学する”ことの楽しさを存分に体験させてくれる。「自分がだれなのか知らないなんて変じゃない?」——ソフィーと奇妙な哲学者との証解が始まる。ファンタジーとミステリーと哲学

を離れまぜながら、読者をいつの間にか「ものごとの本質」を探る思考の旅に巻き込んでゆく手法が斬新だ。詰め込み教育、カルトや特任教員にイヤ気がさした現代人にとって、“哲学する”ことが新しいニーズに?

馬殿先生の在室予定

9/27(水)	PM1:00~5:00
9/29(金)	AM8:30~12:30
10/6(金)	AM8:30~12:30
10/11(水)	PM1:00~5:00
10/13(金)	AM8:30~12:30
10/20(金)	AM8:30~12:30
10/25(水)	PM1:00~5:00
10/27(金)	AM8:30~12:30

相談担当者 在室

月曜日	上野先生	16:00~17:00
木曜日	深田先生	16:00~17:00
金曜日	木佐貫先生	16:00~17:00

## 編集後記

あの朝はすさまじい光景であった。こんなことが起こっていいものだろうか？誰もが夢ではないかと疑った。眼の前の現実が信じられなかったのである。ましてや、この地震で思わぬ惨事に出会われた方々の嘆きはいかばかりかと思う。

私たちの学校は、県下の学校でも多数の犠牲者を出した。芦屋浜にある本校は「液状化現象」で写真が紹介された。校舎は応急措置でなんとか使えるようになり、2月1日には学校を再開した。

震災後、自衛隊の宿営、芦屋市災害対策本部、物資の集配基地、救援ボランティアの宿泊場所となり、本校の「お別れの会」、卒業式、芦屋市合同慰霊祭、仮設住宅建設を経験した。

一周年を迎える今も、被災した街には半壊のビルや、住めなくなったマンションがまだ残っており、ところどころだが公園にはテント生活の人たちがいる。広々と見渡せる更地がある。復興がやっとこれから始まるといった様子だ。

本年度は、「研究紀要」第7号を出す年にあたり、震災特集号を発刊することになった。

この度の大地震は、いつまでもひとの心に鮮明に残るであろうが、細かい記憶は薄らぐものである。私たち執筆者は、当時発行された文書を見てあの頃の混乱を回想したものだ。

小誌には、おもに学校の動き、関係文書と論文、教職員の体験、生徒作文を載せた。記録保存と震災体験を合わせた編集にした。なお編集にあたって、学校で撮った写真以外に、犬塚写真館、三宮写真館、芦屋市広報課から貴重な写真をお借りした。厚くお礼を申し上げます。次第です。

最後に、亡くなられた松村吉成先生と7名の生徒たち、ならびに保護者の方々のご冥福をお祈りします。(小)

